
緋弾のARIA ～強襲の道化師～

緋村 梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜強襲の道化師〜

【Nコード】

N7993W

【作者名】

緋村 梢

【あらすじ】

東京武偵高校 アサルト 強襲科に通う なぎのみや 鷲宮 かおる 薫は、遠山キンジとある事件がきっかけで平凡な日常から非凡な日常へと変わってしまうのであった……。

1 弾 prologue

この物語の主人公――

さぎのみや かある

鷺宮 薫（17）はいつものように、朝7時30分に起きて、洗面台で歯を磨き、顔を洗って、朝食の準備に取り掛かる。

食パンをトースターで焼き、フライパンで半熟の目玉焼きを作り、食べ始める。

俺は毎朝こんな朝を過ごしている。

朝食を食べ終えて、薫は防弾防刃制服に着替える。

愛用のベレッタM92F -（フルバースト） - とサバイバルナイフを懷のホルスターに容れ、ブレザーを羽織り、部屋を出て、鍵を閉める。

すると俺の親友である遠山 キンジの部屋にキンジの幼馴染である星伽 白雪が重箱一段を持って、チャイムを鳴らしまくっていた。

「おお、白雪。おはよ〜」

「あ、薫君、おはようございます」

白雪は礼儀正しく、一礼してくる。

「で、今日もか？」

「うん・・・」

キンジは偶に起きない時がある。

そんな時は、俺が持っているところキーを使うと・・・

あゝ不思議、モノの五秒で開けることが出来るのだ。

「流石元盗人だね」

「それは禁句だ・・・」

「ご、ごめんなさい！」

「いいから起こしてこいよ・・・ここで待つといてやるから・・・」

「ありがとう！」

白雪はそう言っただけキンジの部屋に入ってしまった。

今更ながら・・・俺こと鷺宮 薫は元泥棒・・・

今は普通に暮らしているが、昔は結構ヤバかった。

どんなに警備が固くても切り抜けて来た。

が、とある少年によって捕まり、俺は務所に入った。

だが、入ってすぐに司法なんとかってのが課せられ、武偵高に入っ

た。

俺が元泥棒だと知っているのは、キンジと白雪だけだ。

ていうか、白雪の場合は俺とキンジの話を盗み聞きしていたんだが・
・

泥棒が盗み聞きされるとはなんだかまぬけな話だ・・

俺は腕時計を見る・・

うゝわ・・・もう7時50分・・。

乗り遅れ決定だ・・

そして、遠山キンジが慌てた様子で出て来た。

「か、薰！何くつろいでんだよ！？」

結構慌ててんな・・

「まあまあ、どうせバスは武藤をはじめいろんな奴が乗り合わせてんだ・・。チャリの方が確実だって」

俺は前にも同じようにチャリで武偵高に向かって、バスより先に着いたことがある。

「それもそうかもな・・。んじゃあさっさと行こつぜ」

「そうしよう」

この時、俺はキンジを無理やり起こしてでも、バスにさせるかタクシーを呼べばよかったと後悔することになるなど、1μも思っ てなかった・・・

1 弾 prologue (後書き)

さきのみや かおる
鷺宮 薫 (17)

髪色：漆黒 髪型：エル・ワトソンのような髪型

眼色：ミッドナイトブルー

身長：165cm

携帯武装：ベレッタM92F - (フルバースト) -、サバイバル
ナイフ

装備場所：懐

アサルト
所属：強襲科

アサルト
ランク：Sランク

強襲科では結構有名で、蘭豹と互角で渡り合えるほどの実力持ち。
しかし、体力を温存するため、あまり本気を出さない。

2弾 - second prologue -

——空から少女が降ってくると思うか？

こんな平凡な俺たちに天使なんぞが助けしてくれるわけもない・・・

「うりゃ——！」

俺とキンジは並走しながら一生懸命チャリをこいでいた…

今、俺とキンジはバスに乗らなかったことをものすごく後悔していた。

《そのチャリには 爆弾が 仕掛け てやがります》

《チャリを 降りやがったり 減速させ やがると 爆発

しやがります》

俺とキンジのチャリにそれぞれ一台並走してくるSGはスピーカセグウェイからそれぞれ言ってくる。
それがハモるところがまた不気味だ。

おいおい物騒なこと言つなよな・・・

俺はそう思いながら、SGを見る。

いっーやー！ UZIが乗ってる——！！

「薰！どこに逃げ込む！？」

「逃げるつつつても…」

俺は不意にビルを見上げる。

すると、見たこともない少女が降ってきた。

あ……天使が迎えに……じゃない！！

武偵^{うち}高の制服じゃねえか！！

「なんだ……あいつ……」

「キンジ！んなことより頭下げやがれ！！」

「なんでだよ！？」

「ほらそこのバカ！！頭下げなさい！」

だから言っただろ！！

俺とキンジは頭を下げる。

するとその少女はコルト ガバメント2丁取り出し、水平撃ちでSGを撃った。

SGはクラッシュしてどんどん後ろに遠のいていく。

「あんがとよ！！SGが居なきゃ俺は大丈夫だ！」

「ならアンタは後回しでいいのかしら？」

「いいや、自分で何とかする！だからこいつを助けたら逃げやがれ！」

「分かったわ！！」

「バカ！このチャリには爆弾が仕掛けられてんだよ！！」

「バカ！！武偵憲章1条く仲間を信じ、仲間を助けよ！！」> 行くわよ！！！」

まあ、逆さまになるんだろうが…

すると少女は、マジでやりやがった・・・

スカートの事は気にせんのかね〜ってそれどころじゃねえか！

そして、キンジが少女に助けられたと同時に、俺は仕込んであったパラシュートを瞬時に開き、風の力で後ろに飛んで行った。

キンジ達とは飛んでいった方向は逆だが・・・

そして、俺は近くのビルの屋上まで飛ばされた。

性能が良すぎるのもまた不幸だな・・・

そして、俺はそのパラシュートを外して、ワイヤーで道路に飛び降りた。

「さてと…行くか…。」

俺はキンジ達が飛ばされたと考えられる第二グラウンド体育倉庫に走って向かう。

あゝでも結構距離があんだよねゝゝ。

まあキンジがもし死んでたら、線香の一つはあげてやるか…。

俺は半分期待しながら、まるで子供のように浮き浮きであった。

そして到着した…

やはり倉庫の屋根には大きな穴が開いていた。

俺は体育倉庫の壁に背中をつけ、中を覗く。

ぱつと見誰もいない・・・

一応、懐のベレッタM92Fを取り出し、スライドを引いて、中に入る。

あれ？なんで防弾跳び箱の上が外れてんだ？

俺は、恐る恐る中を覗いた。

「あ・・・」

中ではキンジがさっきの少女の服を託しあげていた。

「よ、よーキンジ・・・」

「お、おお・・・薫・・・」

俺とキンジはウィンキングで会話をする。

「なんでそんなことになってんだよ!？」

「知らねえよ!目が覚めたらこの様だ」

すると、キンジの顔が青ざめる。

「へ、ヘンタイ——!！」

その叫び声に、俺は3歩後ずさる。

「目・・・覚ましやがった！」

「さ・・・さ・サイテ——！」

ゴンツと少女の拳がキンジの頭を直撃した。

俺は恐怖のあまり、壁まで後ずさる。

「お、俺は関係ない...うん、関係ないから大丈夫」

俺は心の底から納得するように肯き、暗示を掛けた。

さつきから少女は恩知らずだの人でなしとか言いながらポコポコとまるでダダコネ少女のように連発してやがる。

かわいそうにな・・・。

まあ、俺は関係ないから・・・

「アンタも共犯なんでしょ!？」

ええ———！

「ち、違う!!俺は何も・・・」

「トボケてんじゃないわよ!—！」

「だから……」

すると、俺はSGの機械音を聞きたる。

「今はそんなこと言ってる場合じゃなさそうだな……」

「何いってんのよ!？」

「いいから伏せやがれ!!」

俺はベレッタを少女目掛けて撃った。

少女は素早く跳び箱の中にモグラのように引込んだ。

それと同時に、SGのUZIから放たれたと思われる弾丸が跳び箱目掛けている。

しばらくして、弾丸が止んだ。

「おい、大丈夫か？」

「ああ、何とかな」

あれ?この感じ……。

そうか……あっちのキンジか……。

俺を捕まえたほうのキンジ……

「そうか…。なら待ってる…。SGを壊してくる」
あいつら

俺はベレッタのノーマルマガジンを抜き、背中のマガジンホルスターからロングマガジンを取り出し、ベレッタに装着する。

そして、セミオートからフルオートに切り替えて、SGの前に立つ。

SGのUZIは俺の頭に銃口を向ける。

「さよなら、武殺のおもちゃ・・・」

俺はそう呟き、構え、引き金を引きながら左から右に銃を振るように撃った。

弾は、UZIの銃口に吸い込まれるように入り、左から暴発していく。

そして、最後の一基が爆発した後、後ろを振り向いた。

「ひとまず、安心だな」

俺はやれやれというようにお手上げポーズのように両手を広げた。

「流石、薰だな」

キンジはさっきの少女をお姫様抱っこしながら跳び箱からひょっこりと出て来た。

少女は恥ずかしさのあまり、リンゴのように赤くなっている。

「お褒めにあずかり光栄ですよ、遠山。それより、第二派が来るぞ。さつきから90近く機械音がしやがる」

俺はベレッタのロンマガを抜いて、減った分をリロードする。

「俺にもロングマガジンを貸してくれ」

キンジは少女を近くのマットに座らせ、俺と同じベレッタM92Fを懷より取り出した。

「別に構わんが、どっちがいい？30発か40発…」

「40発に決まってるだろ」

キンジは余裕の笑みを見せる。

「本当に、お前は分かん奴だよ」

俺も呆れ気味に言いながら、40発装填可能ロングマガジンをキンジに渡す。

「で、君はどうする？」

「へ？」

少女は混乱のあまり話を聞いていなかったらしい。

「だから、90基のSGと闘うか否かって聞いてんだよ……」

「あ、当り前でしょ!~!」

少女はコルガバを2丁取り出した。

「なら…これを使え……」

薫はマガジンホルスターからコルガバ専用ロングマガジンを二丁分取り出し、少女に渡す。

「あ、ありがとう……」

こうして見るとちっちゃくてかわいいんだが……あの戦闘力は今は必要だろうな……

「いいか、コルガバのロンマガは最高20発しか入ってねエ…。もし、弾が切れたら逃げる。俺たちは君を護ることは無理に等しい……」

「アンタ、私がやられると思ってるわけ!~?」

はあ……頑固か……

「いいや、1μも思ってない。なんせ、爆弾にも動じない女だからな」

俺は確信した。

このガキはできる……

「次言ったら風穴！」

「はいはい」

俺はロンマガを30発から40発に替える。

これで、合計120発・・・

余裕弾丸数は30発・・・・・・・・

まあ、今のキンジは外さないだろうが・・・この子はさっきの並走SGを破壊したときに見たが、乱射して当てるタイプだからな…無駄弾を出すとしたら俺とこの子だな…

「それじゃ、行くぞ」

キンジの言葉に俺達もSGの前に出る。

予想通り、めちやくちや多い・・・

「薰、お前は右を頼む」

さすが、カリスマ的リーダー性だな・・・

完璧だ・・・

「分かったよ」

「アリアは左を頼む」

アリア？ああ、この子の名前か・・・

俺は目だけを少女に向ける。

「なんでアンタが私に命令すんのよ！？」

「まあまあ、キンジの言うことは正しい。今は彼を信じてやってくれ」

俺は少女に笑いかける。

「あ、アンタがそういうなら今回だけは信じてあげるわ！」

ああ、意外と俺ってこの子に信頼されちゃった？

まあいいや・・・

「そんじゃあ始めるぞ！」

キンジはベレッタを構えて放つ

それに続いて、俺と少女は撃ちまくる。

次々とSGに取り付けられたUZIは暴発または破壊されていく。

最初に弾が切れたのは、少女のコルガバであった。

「下がってる！」

俺は少女を怒鳴りつける。

「うるさい！」

俺は少女に向けられたSGのUZIの銃口を見つける。

とつさに、俺は少女を抱きかかえ、庇う。

バンッとUZIの弾丸が放たれた音がした。

俺は目を瞑り、少女を抱きかかえる手に自然と力が入る。

しかし、いつになっても撃たれたような衝撃がしなかった。

恐る恐る目を開ける。

「キンジ、終わったのか？」

「ああ。全部片づけた」

「ふう。よかったぜ・・・」

俺は安心した。

ていうか・・・し過ぎた・・・

忘れている者に気づくまでは・・・

「ちょ、ちょっと！！」

あ！忘れてた！

「わ、悪い！」

俺は恐怖を感じつつ、少女を放し、後ずさる。

「あ、アンタだけは違うと思ってたのに、や、やっぱりアンタも強
猥犯だったのね！！」

少女はコルガバを俺に向けてくる。

しかも、キンジにお姫様抱っこしてもらった時並だ・・・

流石に生命の危機を感じる。

「お、落ち着け！俺はただ君を護るために・・・」

「うるさい！！」

少女は俺の話を聞かずにコルガバを撃とうとしたが、スライドオー
ブンしていることに気づく。

よ、よかったー！これで死なずに・・・

俺の読みは甘かった・・・

背中から小太刀を二本取り出しやがった。

君は何者だ！？

と俺は本気で思った。

「あんた達を強制猥褻で捕まえてやる!!」

少女は地団太を踏み、叫んでいる。

そんなことをしていると、少女のスカートがバサツと落ちる。

「あ……」

少女はそれに気付き、落ちたスカートを拾って、体育倉庫に逃げ戻った。

俺とキンジは目を合わせ、溜息をついて、やれやれという表情を顔に出す。

「……アリア、それは悲しい誤解だ。あれは不可抗力って奴だよ」

キンジはしていたベルトをはずし、少女の逃げた体育倉庫に投げ込んだ。

少女は、手を伸ばしてそのベルトを取り、スカートに付けているのだろう……

カチャカチャ音がしてんぞ……

そして少女が体育倉庫から出て来た。

「あ……あれが不可抗力ですって!? そっちの奴はそうだとしてもア
ンタのは絶対強猥よ!!」

少女はキンジを指さしながら断言している。

「悪い、俺は女に興味がない。ましてや武偵の女子にはな」

一応、俺は念のために言っておく。

正直、この手の奴は信じてくれるわけがない。

「アンタだけは信用してあげるわ。でも、そいつだけは信用できないわ！」

おいおい・・・なんで俺は信用するんだよ・・・

キンジも気の毒にな・・・

「よ、よし冷静に考えよう。俺は高校生...しかも今日から2年だ。中学生を脱がしたりするわけないだろ？歳が離れすぎだ。だから安心していい」

俺は焦った。

んな訳あるか！！あそこまでできる中学生は居ねえだろ！！

ほらほらあの子も怒り全開だぞ

「お、おい・・・」

キンジに忠告してやろうと思ったが、とばっちりはごめんだ。

だから、黙っておく。

「あたしは中学生じゃない!!」

ほらほら言わんこっちゃない……

そろそろ気づけよ

「わ、悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだな。助けられたときからそうかもとは思

ってたんだ。しかし凄いよ。アリアちゃんは勇——」

そして、少女の怒りは頂点に達したみたいだな……

キンジの言葉にはショットガン並の衝撃があるからな……

「こんな……こんな奴助けるんじゃないかった……!!」

うわゝ、俺もたくさんの怒り表情を見て来たが、今回はMYギネスに更新されるな……

まあ、被害者は俺じゃないけど……

「わ、私は高二だ!!」

少女はコルガバを取りだし、ロンマガを抜いてノマルマガジンを装着し、キンジ目掛けて放つ。

キンジは少女に接近し、腕を押さえた。

そして少女のコルガバはスライドオープンした。

あゝあ、多分キンジの負けだな・・・

あんなに近けりやあ徒手格闘掛けられんだろ・・・

そして案の定、キンジは投げられた。

「一応聞いておくが、キンジ、大丈夫か？」

一応・・・強猥犯でも親友だしな・・・

「あ、ああ・・・」

キンジは意外そうに少女を見ている。

「キンジ、さっきあの子を見て思い出したんだが・・・あれは厄介だ・・・」

俺はこの時、逃げるための得策を考え付いた。

「だからどうした？」

キンジは俺の目を眼見してくる。

「なあ、俺の辞書にはく逃げるも勝ちの一つゝってのがある。逃げようぜ？」

く逃げるも勝ちのひとつゝ・・・つまり、生きてればなんでも勝ち組ということだ。

泥棒にはな……

「そうだな……」

俺はキンジと肯きあい、アリアの前に立つ。

「君は、今、弾がないよね？」

「あるわよ！」

と少女がサブマガジンを取りだそうと太もものホルスターに手を伸ばす。

しかし、見つからないみたいだ。

「ないだろ？」

「なんで……さっきまでここに……」

少女は驚いた様子だな……

なら、もうひと押し……

「君のサブマガジンは、今装填してあるので最後だったんだよ。口ンマガであっても満タンに入れなくても使えるからね。だから君のホルスターに容れていたマガジンから拝借させてもらった」

諒は少女の持っていたコルガバの空マガジンを二つ見せる。

「い、いつの間に!？」

いや、その驚いた感が俺的には嬉しい・・・

なんか勝ったて感じがして楽しい・・・

「なら、銃を使わなければいいだけでしょ!!」

少女は小太刀を取り出し、なぜか俺に切りかかる。

俺は足元を指さして警告する。

「転ぶなよ」

しかし、俺の忠告もむなしく「~~~~~わおきやつ!？」と少女はツルンドテンツと転んだ。

俺はキンジに「今だ!」とウインキングで合図した。

キンジはコクリと肯いて逃げて行った。

「こ…このツ…~~~~~わおきやつ!？」

とまた少女はこける。

「一つだけ謝る。このマガジンはコルガバのだが、君のコルガバのじゃない。俺のコルガバのマガジンだ。そして、君のマガジンはさつき、体育倉庫でマガジンか何かが落ちる音がしたから恐らく体育倉庫内だと俺は推測している。なんなら探してみろ」

俺はそんなくさいセリフを吐いて、すぐさま逃げるようにその場を立ち去った・・・

微かに「このツ卑怯者！」とだけは聞こえたような気がするが…まあ、気にしても仕方がないな・・・

一応、高天原先生には連絡しておこう・・・

俺はそう思い、携帯で武偵高に連絡を取るのであった・・・

3弾 first attacco a sorpresa

ようやく、俺はキンジに追いつき、一緒に教室に入る。

俺の席は、キンジの前の席である。

席に座り、俺はキンジの方を振り向いた。

キンジはダークオーラを放ちながら、机に伏せていた。

「み…見られた…しかも女子に…」

キンジは蚊の鳴くような声で喋っていた。

「別にあの子がこのクラスに居る訳じゃねえんだ。そんなに落ち込むな」

「おい、薫。今の俺にかまうな…」

あらら…相当ショックなんだな…

「わかったよ…」

俺は仕方ないなと思いながら正面を向いた。

すると、大男が右手を挙げて入ってくる。

「いよう、喜べ キンジに薫！今年も車輜科^{ロジ}の武藤剛気さまが一緒のクラスだぜ……」

こいつは武藤^{むとう} 剛気^{こうき}……車輜科^{ロジ}所属で、乗り物と名のつくものなら何でも乗りなす。

俺とキンジがよく絡む友人の一人である。

「武藤、今、キンジはダークな心境なんだ。話しかけるなよ」

一応言っても、ダークな心境なんぞ知らない人間…武藤 剛気。
関係ないだろうな

「なんだよ、星伽さんと別のクラスなのがそんなに悲しいのか？」

ほら…KY武藤だな……

KY賞を授与したい……

「武藤……今の俺に女ネタの話題を振るな……。薫の忠告もなかったあ聞けよ……」

ほらほら俺は間違ったことはいってないよ。

ちなみに、俺のあだ名は<歩く弾丸倉庫>と<怒りのストッパー>である。

今は呼ばれていないが・・・

しばらく、携帯をいじっていると、担任の高天原　ゆとりが出欠簿を持って入ってきた。

やっぱり・・・かわいいな・・・

俺はちら見して携帯の画面に目を戻す。

「はーい、皆さん。2年生最初のホームルームのHRを始めますよー」

ああ・・・声もかわいい・・・が、そんなことを思うだけで、欲情したことはない・・・

女性に対する意欲がわからない体質なのである。

だから、あの時、あの少女のスカートがズレ落ちた時も何にも感じなかったのである。

「うふふつ、まずは－去年の3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらいますよ？」

俺は一瞬、悟った。

逃げるべきだと・・・

俺はいじっていた携帯の画面から、その転入生に目を向ける。

俺は幻覚を見ているのかと思いながら、携帯を床に落とした。

来てしまった・・・

「強襲科の神崎・H・アリアちゃんです？」
アサルト

俺は落ちた携帯を拾いながら「これは夢これは夢これは夢これは夢・・・」と小声で呟き、現逃をした。

「遠山君、どうかしたの？」

と高天原が言っていたので、キンジの席に目を向けた。

キンジはずるりと滑り落ちていた。

まあ、キンジはあれを見られたから仕方ないだろう・・・

「い、いいえ・・・なんでもないです」

とキンジは応えざるおえないのであった。

それに、死を覚悟している。

さてと、最初の第一声はなんだろう・・・

「先生、私、あいつ等どつちかの隣に座りたい」

「ええ——！！！」

俺の心の叫びをキンジ以外の奴らが代弁してくれている。

「よ、よかったなキンジ。なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞー!!」

武藤はキンジの手を握りながらぶんぶん振る。

「先生！俺転入生さんと席代わりますよー!!」

と武藤が切り出してくれたため、俺の隣になることはない。

ひとまず安心した。

「あらあら最近の女子高生は積極的ねえ。じゃあ武藤君、席を代わってあげて」

パチパチとみんなが祝福の拍手をしている。

俺も面白そうなので、参加しておこう。

俺はみんなにまぎれつつ、拍手をした。

そして、神崎・H・アリアという少女はてくてくとキンジの席に向かう。

俺は面倒事をご免蒙りたいため、目を反らす。

すると・・・停まりやがった・・・俺の席の横で・・・

「はい、これ返すわ」

アリアは俺にさっきのSG対抗戦の為に貸していたコルガバのロンマガと弾丸を14発置いた。

しかも・・・満タンだ・・・

「別に満タンにしなくてよかったんだぞ・・・。あと、この弾丸だけってのはあのばらまいた分だろ？君が返すことはなかったのに・・・」

俺はアリアの目を見ながら、少し恩着せがましいんだよって言うように睨んだ。

「別にいいでしょ。私からの御礼」

まあ、もらっというて損はない・・・か・・・

「なら、貰っとく。あんがとよ」

俺はアリアにそう言って、弾丸14発を体育倉庫でばらまいた弾が入っていたノマルマガジンを腰に付けたマガジンホルスターから取り出し、ノママガに装填し、再び腰のマガジンホルスターに直した。

そして、キンジの地獄の始まり始まり

「キンジ、これさっきのベルト」

アリアは持っていたベルトをキンジに放り投げた。

俺にはちゃんと机に置いたのに・・・

微かだが、キンジの「呼び捨て……？」という突っ込みに内心爆笑した。

しかし、表情には出さない。

これが俺の得意なポーカーフェイスだ。

「理子分かつちゃった！これーフラグばっきばきに立ってるよ！！」

ナイス理子！！

今でお前のお笑いセンスはレベルアップした！

理子こと峰 理子は探偵科^{インケスタ}N o . 1のおバカ少女であり、薫の親友である。

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！」

あゝ、あとでこいつになんか奢ってやろう……

俺はその推理の面白さに、ただ耳を立てて聞くだけだ……

庇うことは野蛮であり、今はこの面白い理子理子推理を子守唄に眠りたい……

「これ謎でしょ謎でしょ！？でも理子には推理できた！できちゃった！」

理子はアリアを指さした。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！
そして彼女の部屋にベルトを忘れて行
った！つまり二人は——」

おゝ来た来た…。

直球ストレート！！

「熱い熱い恋愛の真つ最中なのだよ——！！」

ホームラン！！

俺のつぼをクリティカルヒットだ！！

俺は笑いのあまり、腹を抱えて、机に伏せて笑い顔を隠した。

ヤバイ！！真相を知ってるだけにウケル！！

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に！？」

「影が薄いヤツだと思ってたのにッ」

「女子どころか他人に興味がなさそうなくせに裏でそんな事を！？」

「フケツ！！」

あゝそろそろ噴火するな・・・俺の故郷の火山が・・・

訓練訓練頭を手で覆い身をかかめ・・・

いつでもいいぞ！！

ズキンッ×2・・・

しかも同時発砲・・・

こりゃあ・・・アリアしかないわな・・・

俺は恐る恐る体を起して、アリアの方を見た。

じゅ、銃口が目の前に！！

俺はすぐに席を立ち、アリアから離れる・・・

「れ・・・恋愛なんてくだらない！！全員覚えておきなさい！！そ
んなことを言うヤツには…風穴あけるわよ！！」

やりやがった・・・

まあ、面白いから許すがな・・・

そして、昼休みのチャイムが鳴り、俺は質問攻めにあう確率が低い
ため、のんびりとキンジが逃げるのを見送って、屋上に向かう。

はあ・・・どうせキンジは屋上だろう・・・

いつも逃げ込むつつたらあそこだけだもんな・・・

俺が屋上の扉を開けようとした時、女子3人の声がしたため、あけ
るのを止めた。

ドアに凭れかかり、話を盗み聞きすることにした・・・

「うわ――、今日のキンジって不幸。チャリ爆破されてし
かもアリア？」

「さっきのキンジ、ちょっとカワイソーだったね・・・」

「それに、薫もなんかチャリジャックで被害にあってるみたいだし
・・・」

「薫も大変そうだね」

「そうだよね、それにアリア、キンジと薫のこと探って回ってた
し」

「あ、あたしもアリアにいきなり聞かれた。キンジと薫ってどんな
武偵なのか、実績とか・・・」
「キンジ

は昔、強襲科^{アサルト}で凄かったんだけどねー」って適当に答えたよ」

「あれ？薫の事はなんて答えたの？」

「「今も昔も蘭豹先生と互角にやり合える唯一の武偵だよ」って答えたよ。あんまり反応は薄かったけどね」

そんなこと、言わないでほしかった・・・

ということは、目を付けられたかもしれない・・・

「さつき、^{マスターズ}教務科の前に居たよ。きっとキンジと薫の事探ってるんだよ」

「うっわー。ガチでキンジラブなんだ」

ふう・・・俺にはなってないな・・・

「キンジがカワイソー。女嫌いなのによりもよってアリアだもんね」

「アリアってさ、ヨーロッパ育ちかなんか知らないけど、空気読めてないよね——」

「でも、男子の間では人気あるみたいだよ」

その男子・・・ロリ好きなだけだろ・・・

俺は正直、さっさと屋上に出たかった・・・

が、呆れ過ぎて出れなかった。

だが・・・俺は次の会話に興味がある・・・

「ていうか、あの子さ、友達いないよね。しょっちゅう休んでるし、お昼も一人でお弁当食べてたよ。教室の隅っこでぼーんって」

「うわっ、なんかキモお——！」

なんだか・・・いろいろと複雑なのかもな・・・

神崎・H・アリア・・・

4弾 second attacco a sorpresa

仕方ない・・・そろそろ屋上に行こうかな・・・

俺はそう思い、ドアを開いて屋上に出た。

「か、薫!!」

おいおい・・・完全に何か話してました的な顔すんなよ・・・バ
しるぞ・・・

「なんだよ？」

まあ、普通に接してりゃあ、聞いてたなんて思っまい・・・

「べ、別に」

「あ、そうだ。今からここにキンジが来るぞ」

まあ、もう居るんだろうけど・・・

「げ、マジ!？」

「ああ。さっき呼んでおいたからな」

「そ、そうなんだ。それじゃあ、私たちはお邪魔しないように場
所変えるね」

まあ、ありがたいが・・・申し訳ないな・・・

そうだ！飲み物ぐらいはおごってやるか。

アリアの情報賃としてな・・・

「なら、ほれ・・・」

俺は財布から１０００円札を取り出し、差し出す。

「えっ？」

そら不審がるよな・・・

「わざわざ場所を変えてもらうんだから、飲み物ぐらいは奢ってやる」

「い、良いの!？」

「ああ」

すると少女は¥１０００札を受け取った。

「ありがとう——!!」

「なんか困ったことがあったら言ってね!」

などと言いながら、女子３人組は屋上から降りて行った・・・

さてと・・・

「キンジ、居るんだろ？」

あ、ほらほら出て来た・・・

「なんでここってわかった？」

「何となくだ。それよりほら、一緒に食うか？」

俺は隠し持っていたカロリーメイトを取り出した。

「んなもん食う気になれん・・・」

あらら・・・おいしいのに・・・

まあ、今のキンジはそれどころじゃないわな・・・

俺はそう思いつつ、カロリーメイトの包装袋を破り、頬張った。

もぐもぐ・・・ごっくん、もぐもぐ・・・ごっくん・・・

そして、最後の一口に成り、もぐもぐ・・・ごっくん・・・

「はあ・・・もうお腹一杯だ」

「よくそれで保つよな・・・」

「俺は元泥棒だぞ？」

「関係ねえだろ・・・」

まあ関係ないが・・・

「なあ、薫」

「なんだ？」

「お前は神崎の事、どう思う？」

珍しいな・・・あの女嫌いで根暗なキンジがそんなこと聞いてくる
とは・・・・・・・・

まさか奇跡の両想い！？

なぐんであるわけないか・・・

俺は溜息を吐いて、かわいそうな者を見るような目で睨む。

「なら聞くが、あいつはこの学校に居て幸せそうか？」

まあ、さっきの話を聞いてたなら、何となく察することはできるが・
・・・

「そんなのわかるわけがねえだろ」

キンジは腕を首の後ろで組み、壁に凭れかかった。

「それと一緒にだ。俺も会ったばかりでわからないんだよ」

「でもお前はそういうのが専門じゃないのか？」

ああ、なるほど・・・

忍びと泥棒は一緒だと思いこんでやがる・・・

「俺はドロ専だ。忍専じゃない」

「どう違うんだよ？」

オイオイマジかよこいつ・・・

まるでカメとスッポンの違いが分からないガキ並だぞ・・・

「あんなキンジ…。泥棒は人様のモノを盗む職業だ」

そんな仕事あったら警察がその会社に居座っちまうけどな・・・

「忍びは情報とかを盗む職業だ」

そんな奴らはとくに平和なハッキング社会に行っちまってるけど
な・・・

「どう違うんだよ？」

ダメだ・・・俺はそう確信し、頭を抱えた。

「つまりだ…。形ある物を盗むか、形ない物を盗むかで違ってくるんだ。一応、おおざっぱに説明すればそうだ」

ああ・・・これでわからなかったら、お前に捕まった俺が恥ずかしい・・・

「なるほどな...。つまり、お前は形ある物を盗む側ってことだな」

「そ、そんな感じた・・・」

めちゃくちゃだが、まあ、伝えたいことの2割通じただけで良しでしょう・・・

その後、別の事を放しつつ、教室に戻り、午後の授業に出席し、終わった・・・

「では今日の授業はここまでです。えー、皆さん。くれぐれも用意な行動及び発砲は控えるよう...」

その瞬間、キンジが走りだし、窓からワイヤーを利用して飛び降りた。

あゝあ・・・先生の話は最後まで聞こうぜ？

ほら・・・泣いちゃった・・・

まあ、俺は一応、高天原先生の話（愚痴）を最後まで聞いてあげてのんびり帰ることにした。

十分後・・・ようやく高天原先生の話（愚痴）が終わった。

「あゝおかげでスッキリしました。それじゃあ、気をつけて帰ってくださいね」

「わかってますよ」

俺は高天原先生が教室を出て行ったのを確認し、寝ている理子の席に歩み寄る。

「すぴ——・・・すぴ——・・・」

まだ起きねえのかい・・・

「おい、理子・・・」

俺は仕方なしに理子の肩を揺すった。

「ん・・・あれ？もう終わったの？」

理子は眠たそうに目を擦りながら状態を起こし、背伸びをした。

その為、無駄にでかい胸が一段と出ているように見えた。

俺は目を反らす。

「それより、ファミレス行くぞ」

「ええ！奢ってくれるのお——！？」

「あ、ああ。今日の推理はK点越えだったからな……。そのお礼だ」

「やった——！！理子、うれしい！」

理子はいきなり俺に飛びついてきやがった。

「ば、バカ！！離れろ！！」

「嘘だったらいけないじゃーん。だから、キープキープう」

はあ・・・んなことするかよ・・・

「逃げねえから離れろって・・・」

俺は右手で理子の頭を押さえながら溜息をついた。

理子は二歩下がって「う——らじゃ」と両手で敬礼した。

「んじゃ行くぞ」

俺は理子連れてファミレスに向かった。

ファミレスに着き、俺と理子はドリンクバーの近くに座った。

「ねえねえ、さっき。なんでも頼んじゃっていいの？」

まあ、K点だからな・・・

それに、今日は任給が出る日だし・・・

「ああ。好きに選んでくれ」

「わーい！！なら理子ね・・・これとこれと・・・」

はあ・・・こうして理子と居るとなんだかリラックスできる・・・

「ねえ聞いてるう？」

「店員呼べ店員・・・」

「は！そうだった！」

理子は呼びベルを鳴らした。

そして来た店員に、俺はステーキセットを頼み、理子はまたたくさん頼みやがった・・・

店員も員数確認を再度確認してきたため、「二人です」と念を押しておいた。

おどおどしながらも、店員は注文を伝えに戻って行った。

「理子・・・あんなに食えんのか？」

「理子わかんない！だから、もしもの時は手伝って！」

んなことだろうと思った・・・

「わかったよ・・・」

そして、注文したすべての商品がずらりと並ぶ……

おいおい……パフェ全種かよ…。

ざっと、7皿……

チョコ、ストロベリー、バナナ、チョコミント、バニラ、メロン、
ドラゴンフルーツ……

しかも……高さ30cmもある……

「ちなみに理子……一つを完食したことは……?」

「もちろん初挑戦!!」

やっぱりな……

まあ、いいか……

俺はもうどうにでもなれと思いつつ、ステーキセットを食べ始める。

数十分後……もちろん、俺は完食した

が、理子はちょこちょこ食べているせいで、あまり減っていなかった……

「おい……大丈夫か?」

「うん！あ、さっき、あ〜ん・・・」

理子はチョコミントをスプーンですくい、俺に食べさせようとするため、仕方ないから食べる・・・

結構・・・おいしいな・・・

すると、俺の携帯がなった。

「悪い、電話だ。ちょっと待ってろ」

「う——らじゃ」と理子はいつもの両手敬礼をする。

俺は一度、店を出て、携帯を取りだす。

相手はキンジだ。

「なんだよ・・・」

仕方ないから出てやるか・・・

俺は通話ボタンを押して、「なんだよ？キンジ」と言ってみる。

『出るのが遅い！！』

おいおい・・・キンジじゃねえ・・・アリアだ・・・

マズイ！！こ、ここは誤魔化して・・・

「あの、どちら様の携帯ですか？」

『さっき、キンジって言ったでしょ？それになんで携帯ってわかるのよ？』

ま、マズった！！

仕方ない・・・用件だけ聞いて切ろう。

「なんだよ・・・？アリア」

『やっぱり気づいてたんじゃない。まあいいわ、今すぐキンジの部屋に来なさい！！分かったわね！？』

「おい！ちょ・・・」

しかし・・・切れた。

確認取る前にきんなよ！！

まあいい・・・。

シカトしてれば・・・

すると、今度はメールであった。

来なかったらキンジに風穴あけるから！！

あゝあ・・・あのエリアがとうとう犯罪者に堕ちてしまった・・・

だが、キンジは死なせるわけにはいかないからな・・・

俺はそう思い、深呼吸した後、店内に戻った。

席に戻ると、理子の友達が集まっていた。

「さっき、お友達呼んじやった」

と理子がgoodサインを出している。

ナイス理子！

「俺、用事が出来たからコレ、払っといってくれ」

俺は理子に¥20000渡す。

「う——らじゃ！」

「頼んだぞ」

と俺は理子に言っ
て、急いで寮に
戻った・・・

俺は、キンジの部屋の前で考え事をしていた。

ハァ・・・キンジの部屋にいるってことはいつでも俺の部屋に乗り込んでくるのだろうか・・・

すると、キンジはコンビニ袋とアリアは紙袋を持ってこちらに歩いて来る。

「あ、やっと来たのね、薫」

最初に喋ったのはやっぱりアリアであった。

「なんだよ？神崎。わざわざ呼び出すんならそれその理由があるんだよね？」

「それは中で話すわ。入りなさい」

おいおい・・・ここキンジの部屋だツツの！！

俺はキンジにウィンキングで「なんで神崎がお前んとこに居座ってるんだよ！？」と訴える。

するとキンジは「知らねえよ！！チャイムが鳴って出たらこの有様だ！！」と返してきたため、「まあ、話さ
え聞いてれば風穴はあけられんだろ・・・」と返し、互いに肯きあって、部屋に入った。

そして、俺はもう夕食を食べ終わっていたため、夜食を取る二人をよそにソファで携帯をいじることにした。

だが、その沈黙をキンジが壊した……。

「…ていうかな、ドレイってなんだよ。どういう意味だ」

ど、ドレイ!?

俺は流石に聞き流せない単語だと思い、キンジの隣の椅子に座るところにした。

「強襲科アサルトであたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

「まさか……俺もか!？」

一応聞いておかないとな……

「そうよ」

「「何言ってんだ!」「」

俺とキンジはハモった。

「俺は強襲科アサルトがイヤで一番マトモな探偵科インケスタに転科したんだぞ!それに俺は――

般の高校に転校して武偵自体やめるつもりなんだよ!それをよりもよってあんなトチ狂った所に戻るな

んて——無理だ！」

確かに強襲科はトチ狂ってやがるな……

アサルト

別名く死ね死ね団だもんな……

卒業生存率ってのがあからな……

去年は2人死んでたみたいだし……

「あたしにはキライな言葉が三つあるわ」

「って人の話を聞けよ!!」

ごもつとも……

「ムリ」ム疲れた」ム面倒くさい」

アリアはご丁寧に指を立てる。

「この三つは人間の持つ無限の可能性を自ら押し留めるよくない言葉。あたしの前では二度と言わないこと、いいわね？」

「ちなみに、俺が立つポジとしてはどこだ？」

「そうね……。薫の場合はあたしとキンジと一緒にで前衛がいいわ」

フロント

負傷率No.1のポジ……か。

「もう少し考えさせる」

俺はそう言って、キンジの部屋を出て、自分の部屋に戻った。

部屋に戻った俺は、そのまま、ベッドにもぐり、眠りに着いた・・・。

翌朝・・・

俺はいつものように朝食を摂って、バス停に向かおうと思ったが、歩くのがめんどいと思い、近くの空

き地に隠してあるダイハツ ムーブカスタムで近くまで行こうと階段を降り切った時、居た・・・

キンジにしがみついてやがる・・・

「キンジ！！」

俺がそう呼ぶと、キンジは振りむいて、「よう」と右手を挙げてた。

俺はキンジに歩み寄る。

「どうした？ひつつき少女を連れて仲良く登校か？うらやましいな」

「んなわけあるか!!」

「誰がひつつき少女よ!!」

おゝ、仲のいいことで・・・

「で、その状態でバスに乗るのか？」

「んなわけあるか・・・」

「そんじゃあ、送ってやるよ」

俺は鍵を見せながら、言ってみる。

「ああ、頼む・・・」

「アンタ、運転できんの？」

「まあな。車はこつちだ」

俺は車のところまで案内する。

そして、俺たちはムーブカスタムに乗って、武偵高に向かう。

車内・・・

運転は俺、助手席はキンジ、後部座席にアリアが乗っている。

「で、神崎」

「アリアでいいわよ。何か用？」

「俺の事、どこまで調べた？」

一応聞いておかないと後々ヤバイしな。

「鷺宮 薫・・・武偵高では結構評判良好。強襲科Sランクの実力
で、教師並…。依頼（ク

エスト）はほとんど一人でこなして、一度も標的を逃がしたことが
ないらしいわね」

「さっすがSランク武偵の神崎・H・アリアだ…」

まあ。元泥棒ってことは調べられねえよな・・・

「んなことより、薫。昨日白雪が来て大変だったんだぞ…」

「知らねえよ…」

そんなこんな話していたらあつという間に着きやつた。

俺はキンジとアリアを下した後、近くのパーキングに車を停めて、
学校に向かった。

教室に入り、のんびりと授業を受けていた。

充てられることもなく、ただ気のままに……

そして、午後の授業に入り、俺は強襲科実習場の射撃練習場でベレッタをぶっ放していた。

すると、背後に視線を感じる。

恐る恐る振り向くと、アリアが居た。

「なんだよ、神崎・H・アリア」

「だからアリアでいいって。アンタに少し話があるのよ」

「丁度いい、なら、キンジも混ぜて話そうや」

恐らく、依頼クエストで校外に逃げるだろう…

「いいわ」

「よし、なら行くか。蘭豹せんせーい、俺上がりまーす」

と一応言っておかないと、叱られるからな……

「なんや、どこ行くねん？」

「神崎と探偵科インケスタの護衛です」

「わかった・・・帰ってええ」

「それじゃあ、さいなら」

俺はアリアを連れて、校門に向かい、キンジを待ち伏せる。

そして・・・キンジがこのこ現れた。

「遅かったな。そんなに楽な依頼クエストがなかったのか？」

「げえ！！なんでお前らがいんだよ！？」

「アンタが居るからよ」

「同じく」

キンジはハァと溜息をついた。

俺たちは歩きだした

「答えになつてないだろ。薫はともかく、アリアは強襲科アサルトの授業サボってもいいの
よ・・・」

「あたしはもう卒業できるだけの単位を揃えてあるもんね。で、あんな普段クエストどんな依頼受けてるのよ？」

「お前には関係ないだろ。俺はマルチな薫と違ってEランク武偵…。
Eランク武偵にお似合いの簡単な依
頼だよ。アリアは帰れッ！」

俺は帰らなくてもいいのか・・・

「アンタ、今Eランクなの？」

「そうだ」

まあ、こいつは3学期期末試験を受けてないからな・・・

「…ていうか、俺にとっちゃランクなんてどうでもいいんだよ」

確かにな・・・

「で、キンジ。今回の依頼クエストは何なんだ？」

「なんで答えなきゃいけないんだよ。教える義理はお前であっても
ない」

「はいはいわかったよ」

まあ、着いていけばわかるだろ。

「教えなさいよ」

ムリだってアリア・・・

「だから、お前は特に教える義理は・・・」

「風穴あけられたいの？」

うあゝ脅したゝ！（笑）

「…今日は猫探した」

「猫探し？」

キャットサーチ・・・まあ、Eランク武偵御用達のアニマルサーチ
だな・・・。

「青海に迷子の猫を探しに行くんだよ。報酬は一万円・・・0：1
単位分の依頼だ」
クエスト

「ふゝん」

「ついてくんな」

「いいからアンタの武偵活動を見せなさい」

「断る！！ついてくんなッ！」

「お、おいキンジ・・・もう少し落ち着いて・・・」

「そんなにあたしのことがキライ？」

「大っキライだ！ついてくんな！」

おいおい風穴あけられんぞゝ

「ア、アリア、落ち着け・・・な？」

「もういっぺん ついてくんな っていったら風穴」

だから止めたんだよー！！

まあ、何とか落ち着いたら良いけど・・・

俺たちはモノレールに乗り、青海に向かった。

青海に着き、モノレール乗り場で作戦を立てていた。

「で、猫探しっていうけど、アンタはどういう推理で探すのよ？」

「別に猫の行きたそうなところを虱潰しに歩くだけだ」

「おいおい、そんなとこ、何百ヶ所あると思ってんだよ・・・」

「そうよ。そんなことしたら日が暮れるわ」

「なら、お前等はどう推理すんだよ？」

「推理はニガテよ。一番の特徴が遺伝しなかったのよねえ」

遺伝？まあ、どうでもいいや

「ていうかお腹すいた」

「さっき昼休みだったろ。メシ食わなかったのかよ」

「食べたけどへったの！！なんかおこって！」

「しかたねえな・・・」

「俺も行こう。いいかアリア、この周辺を見るのは構わんがな...、あまり、遠くに行くなよ」

「わかってるわよ」

俺とキンジはファーストフードに向かう。

そして、適当にキンジと選んでアリアのところに戻った。

すると、アリアは洋服店に飾ってある服を熱心に見ている。

あゝあ...やっぱり女の子なんだな

気は強いが、乙女的心情もあるんだな...

「おい」

アリアはゆっくりとこちらに振り向いた。

キンジはKYだね。

そうっと後ろから驚かせたかったのに...

まあ、ビクツとしたから134ydぐらいは行ったかな・・・

「~~~~あ、ち・・・違うの！あたしはスレンダーなの！これはスレンダーっていうの！！」

「まだ何も言つてねえだろ！」

「まあまあ、あっちのベンチで食おうぜ」

俺は公園に備え付けてあるベンチを指さした。

俺たちはそのベンチに向かったものの、二人しか座れない。

「キンジとアリアが座れ。俺はそこに座る」

俺は後ろの花壇の淵に座ることをした。

そしてキンジから俺の分のチーズバーガーとアイスコーヒーを受け取り、花壇に座り、食べ始める。

二人はなんだか楽しそうに話しているが、今回は関与しないことにした。

すると、俺の携帯にEメールが届いたため、ポケットから携帯を取り出し、メールを確認する。

リカバークエスト
奪還依頼：報酬30万円、午前0時just決行・・・ランクB

＜東京第三倉庫に

て、誘拐された少女達を奪還せよ＞by東京武偵局

はあ・・・、マジかよ。

まあ、報酬30万ならやる価値はあるな・・・

俺は 了解（ラジャ）と返信をし、携帯をポケットに直した。

そしてチーズバーガーを食べ終えて、アイスコーヒーを飲み干した。

あ、理由はわからんが、殴られたぞ・・・

「お、おい・・・大丈夫か、キンジ？」

「り・・・理不尽だ・・・」

とキンジの小声が聞こえた。

あはは・・・面白いが洒落になってねエ・・・

俺はキンジを引き起こし、海沿いを探すことを提案した。

最初はアリアが拒否したが、キンジは俺の事を信じてくれて、海沿いに向かった。

海沿いについて、適当に散策していると、お目当ての迷子ネコがいた。

キンジは海に入り、捕まえた。

少々引つ搔かれていたが・・・

無事、依頼を達成して、迷い猫を飼い主に返してあげて。俺は自分の寮に戻った。

午後11時30分……

東京第三倉庫付近コンテナエリア……

俺は、黒いロングコートに、銀狼の仮面を着けていた。

これが俺の真の姿……。

武偵局直属の専属ドロ専武偵だ。

俺は人であろうと、戦闘機であろうと潜水艦であろうと盗むことができる。

俺が強奪した中で最大のモノは……客船……。

報酬は¥800,000,000。ランクR……。

まあ、忘れたいが……

「はあ……行くか……」

俺はそう呟き、コンテナの上から飛び降りた。

勿論、見張りは居る。

俺は麻醉弾をサイレンサーの付いたワルサーP99で撃ち、見張りを一人一人眠らしていく。

そして、全員眠らした。

さて・・・本命を忘れないうちに・・・

俺は第三倉庫に向かう。

途中途中に見張りは居たが、グッスリ眠らしておいた。

俺は倉庫の扉に立ち、南京錠を外し、でかい扉を開けた。

すると、中にはたくさんの少女達が脅えながら、寄り添っていた。

「確認する、怪我人は？」

俺は一応、負傷者が居ないか確認する。

「い、いいえ・・・」

「そうか。ついてこい」

俺は、手で招き、武偵局の定めた場所に案内する。

少女達も脅えていたが、ちゃんと付いて来てる。

そして、誘拐された少女達の安否確認のため、バスで来ていた女性
武偵に、

後を任せ、寮に戻った。

翌日・・・

俺は目を覚ました。

「あゝあ、眠い・・・」

俺はそんな愚痴を吐きつつ、朝食を摂らぬまま、武偵高に向かった。

そして到着して以下略・・・

授業が専門すら終わり、俺は寮に戻った。

階段を登りきると、アリアが俺の部屋のチャイムを鳴らしていた。

「ただいま出かけております用のある方はさっさと帰れアリア!!」

俺は今、無性に腹が立っていた。なぜなら、朝から何も食べてないからだ。

「あ、薰、遅かったわね?どっか行ってたの?」

「んな訳あるか。俺は今、腹が減ってた。用があるならさっさと入れ」

まあ、こんなところをSSDに見つかったら蜂の巣だ。
シネシネダン

俺は鍵を開けて、アリアを中に入れる。

前にも云ったが、俺は女に対して欲情したことがない。

まあ、精神病みたいなもんだ。

というわけだから、あまり緊張しない。

一応、俺は昨日の事を言われた時の為に、鍵を閉める。

「で、何の用だ？」

「私はまだ、アンタから返事を聞いてないわ」

ああ、あの時の・・・

「そついえばそうだったな。俺は別に構わん。ただし、カメラトレイじゃなく、仲間としてな」

「わかったわ」

「で、話はそれだけか？」

「ええ。それだけよ」

なら帰れ！と言ったら風穴風穴！って叫ぶだろうから・・・

「キンジの部屋に入ってるよ」

「鍵が閉まってんのよ」

「なら開けてやるから来い」

俺はさっき閉めた玄関のカギを開けて、キンジの部屋に向かう。

「どうやって開けんのよ？」

「まあ、見てろって……」

俺はいつものように、鍵をあける。

「アンタ、すごいわね……」

「まあな。そんじゃあな」

俺は自分の部屋に戻った。

翌日……

俺はいつものように起きて以下略。

午前の授業を終えた俺は、アサルト強襲科実習場で格闘訓練をしていた。

そして、奴が来た……

「キンジ？」

俺が云うと、俺と取っ組みあっていた奴も俺が見ていた方を見る。

そして俺達の見ている方向を周りの奴らも向く。

「キンジだ・・・」「」「お———！」「」「」

と複数の生徒がキンジのところに集う。

「やっぱり説得されたか・・・」

俺はキンジには歩み寄る。

「キンジ、久しぶりにやり合うか？」

「んなことしたら死んじまうだろ」

「良いじゃねえか！さっさと死んじまえよ」

まあ、強襲科では死ね〃がんばれのような日常会話だ。

あ、そうだ。

「あ、キンジ。もう帰んだろ？ゲーセンのコイン券やるよ。俺行かねえし・・・」

さっき、理子に貰ったんだが俺は行かないから・・・

「サンキュ、貰っとく。んじゃあな」

そしてキングは帰って行った。

俺は引き続き、格闘訓練を再開した。

そして、授業を終わらせ、昨日、乗って帰るのを忘れていたムーブカスタムで寮に帰った。

俺は風呂に入って、すぐにベッドへinした。

翌日・・・雨だ。

しかも土砂降り・・・

まあ、いつもは気にしないんだが・・・。

よし、バス停に行こう。

俺は制服に着替え、武装し、鞆と傘を持って、部屋を出た。

階段を降り切って、俺は傘を開いて、バス停に向かった・・・

そしてバス停に到着した。

が・・・運が悪かった・・・

もう込んでやがる・・・

その後、キンジがやってきた・・・

「どうなってるんだ・・・」

「見ての通り混んでんだよ・・・」

そして武藤が乗り込んでいく。

「乗せてくれ武藤！」

「そうしたいがムリだ。お前はチャリで来いよ」

「俺のチャリはぶっ壊れちまったんだよっ！これに乗れないと遅刻するんだ！！」

「ムリなもんはムリだ！キンジ、男は思いっきりが大事だぜ？1時間目フケちまえよ！というわけで2時間目にまた会おう！」

そういつて、バスは出て行った。

その時、俺はなんだか違和感を感じた。

いつも乗ってるバスとは少し感じが違った。

まあ、気のせいだろう・・・

「あの野郎・・・」

キンジがなんか言ってる。

しゃあないな・・・

「キンジ、今日も車で送ってやる」

「ワリいな・・・」

俺はキンジと共に武偵高に向かった。

その途中、キンジの携帯が鳴る。

キンジは携帯を取り出し、電話に出る。

ああ・・・喋り型的にアリアだな・・・

すると、いきなりキンジの表情が変わった。

その時・・・俺は耳を疑った。

事件という単語に・・・

そして、通話がキレた。

「薫…女子寮にむかってくれ・・・」

「わかった・・・」

俺は道路の真ん中をターンして女子寮に向かった。

そして、キンジにC装備を着るように言われたため、車の中に隠れてあったC装備に着替え、女子寮屋上に急いで向かった。

屋上に出ると、キンジは体育座りでいる狙撃科Sランク2年、レキスナイプの姿を見つけた。

レキは俺と一緒に入試の時からSをキープしている。

ちなみに、名字は誰も知らない本人も知らないらしい・・・

「レキ・・・お前もアリアに呼ばれたのか？ていうかそのヘッドホン、いつも何の音楽を聞いてんだ？」

あ、俺も昔から気になってた・・・

「音楽ではありません。風の音です」

意味がわからん・・・

「時間切れね・・・。もう一人Sランクが欲しかったところだけど・・・」

とアリアがこちらに振り向いた。

「か、薫！！アンタなんで・・・」

「キンジと登校していた時に連絡が来たんだ。アリアが俺に連絡できないことはキンジも知ってるからな。だからキンジ経由で依頼を聞いた。邪魔なら帰るが？」

「いいえ、よかったわ。アンタが居たら百人力よ!」

「そりゃどうも。で、事件ってのは?」

「バスジャックよ」

おいおい・・・まさかな・・・

「アリア、念のため聞いておく。そのバスは午前7時58分第三男子寮に停留する武偵高行きのバスじゃないか?」

違うと言ってくれ・・・

「え、ええ・・・。そうよ、でもなんでわかったの?」

俺は近くの壁を殴った。

チクシヨ——! あんときの違和感はそういついことだったのか!!

「恐らく…爆弾が仕掛けてある・・・」

その場にいた、アリア、キンジは驚いた。

「どうしてそう思うんですか?」

レキが冷静に問いかけて来た。

「バスの車高が少しだけ後方が下がっていた」

「それはたくさん乗ってたからだろ」

「いや、バスは後方に乗れて、15人…。車体中央にほとんどの生徒が乗っている。だから、普通車高は均等に下がるはずだ。それが、後方が下がっていたのなら・・・」

「爆弾が車体後方下にあるってことね」

「そういうことだ」

「流石ね。ということは武偵殺しの仕業ね。あんた達二人を狙った時と手口が似てるわ」

「だが、ふに落ちないことがある。武偵殺しは捕まったはず・・・。アリア、あの人は本当は無罪なんだろう？」

「そうよ、真犯人はほかに居る」

「おい！お前たちは何の話をしてんだ！？」

まあ、キンジはいずれ話してやろう。

「キンジ！この話はいずれしてやる！それより今はバス奪還と武偵高生の救助（セー

ブ）が優先だ！！リーダーはアリア！それでいいだろ？」

「クソッ！！やってやる！」

キンジは投げありながらも、了承してくれた。

そして、武偵高ヘリがやってくる。

俺たちはヘリに乗り込み、バスを追いかける。

ヘリ機内……

「キンジ、これが約束の最初の事件になるのよね」

ああ……なんだかアリアはうれしそうだが……なんだか嫌な予感がする……

まるで、大切な仲間を亡くすような……そんな感じが……

俺は外を眺めながら、考えていた。

「どうかしましたか？」

気づけば横にUSSR SVD“ドラグノフ”を肩にベルトで掛けたレキが居た。

「レキ、この事件を解決できるのは、お前の狙撃かもしれん……。そのときは頼んだぞ」

俺はあまり考えたくないビジョンであったが、今は想定しておくことが必要だ……

レキは無言のまま、コクリと肯いた。

俺は再び、窓の外を眺める。

あ・・・いた。

が、俺の目は両目5・0…。

微かに見えない・・・

「レキ、あれじゃないか？」

俺はさっき、見つけたバスを指さした。

「窓に武偵高の生徒が見えますね、おそらく間違いないでしょう」

流石視力両目6・0のレキだ。

頼りになるぜ！

「アリア、キンジ！目標^{ターゲット}を捕捉した。バスのルーフに飛び乗る準備をしておけ！」

俺はリーダーではないが、指示はしておく。

そして、ヘリ操縦者に支持を出す。

「了解！でもアンタを乗せるのって何回目かしら？」

「恐らく、一万ずつ依頼料払ってたらベンツが買えるかもな・・・」

このヘリ操縦者…車輛科2年Aランク、宮澤 さくら。

こいつとは結構つるんです。

あのムーブだってこいつに点検依頼してるし…

「んじゃあ、いつか買ってよね!」

「この事件が解決したら買ってやるよ」

俺はそんなことを言いながら、キンジ達のところに戻り、ベレッタ M92Fのマガジンを確認する。

恐らく、使わんだろ…

そして、ヘリはバスの真上に並走した。

流石、宮澤だ。

1ミリもずれないで並走してやがる。

俺はキンジとアリアが降りたことを確認した後、宮澤のところに行く。

「宮澤、RBで待機レインボーブリッジしている。もしかしたら、俺達と連絡が取れなくなるかもし

れない…。そのときは爆弾ボムを外すことを優先する。いいな?」

「それって…アンタが死ぬってこと?」

「運が悪けりやな…。とにかく、RBでバスに平行してくれ。頼んだぞ」

「了解・・・」

なんだか元気がないな・・・

「安心しろ。俺は死なねえ。お前とレキがちゃんとしてくれればな」

「分かった！やってやるわ！」

「その意気だ！レキも頼んだ」

俺はそう吐き捨て、バスのルーフに飛び乗った。

ヘリはどんどん離れていく。

あの方向はRB・・・。

頼んだぞ・・・宮澤、レキ・・・

俺はそう思いつつ、車内に入った。

俺が入ると、キンジが少女の携帯を持っている。

いや・・・武偵殺しの携帯か・・・

にしても・・・武偵のくせに脅えてんじゃねえよ・・・

まあ、1年は仕方ないか・・・

俺は運転手の様子を見る。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ。でも、本当に爆弾が仕掛けられてるんですか？」

やっぱり怖いよな・・・

「すみません、こんなことに巻き込んでしまつて・・・。運転変わります」

「でも・・・」

これ以上、この人には迷惑は掛けられん・・・

「今から、臨車であなただけ逃げします」

そうだ。この人は無関係なんだ・・・

この人だけでも逃がしてやろう・・・

俺はインカムで臨時車輛を手配した。

まあ、事前に呼んでいたんだが・・・

そして、トンネルに入る。

俺は運転席に座り、横に着いたホンダ S2000（左ハンドル）

と並走する。

「あのー、薫さま、これでよろしかったでしょうか？」

ホンダ S2000（左ハン）でバスに並走しているこの少女・・・

車輜^{ロジ}科2年Bランク、石宮 りん

こいつとも宮澤と共につるんでいる。

まあ、車しか運転がうまくないのである。

「上出来だ！武藤！この人を支えてやれ！」

「分かった！」

武藤は運転手をS2000に乗るのを支えた。

そして、運転手は乗り移るのに成功した。

S2000は後方に遠のいていく。

これで、このバスに乗っているのは武偵高生のみだ・・・

俺はバスについているマイクのスイッチを入れる。

《おい、みんな聞け！今このバスはノンストップだ…。ブレーキも使えない……。だから、カーブになったら武藤の指示に従え！！いいな？》

「ああ・・・」「ええ・・・」「しかたねえ・・・」「死ぬよりは可能性に掛けてみつか・・・」などと聞こえる。

俺はマイクのスイッチを切る。

首都高湾岸線はほとんど直線なのだが、一部カーブになっている。

まあ、一か所を除くカーブは増速はしないものの、減速はしないが・・・一か所だけ急なカーブがある。

ここだけは流石のSランクでも減速すんぞ・・・

「武藤、最初のカーブだ…。アウトから行って横転確率は？」

「67%だな・・・。みんな左に寄れ!!」

流石武藤だ・・・

だが・・・ツルってる・・・

いままで一般車が濡れて走っているから、めっちゃ濡れてる・・・

まあ、だからベタ踏みなただけだな・・・

そして、コーナーをパスした。その時、俺はサイドミラーを見て目を疑った。

UZIの乗ったルノー スポールスパイダー スピダーが来やがった・・・

しかも無人・・・

あん時のSGと一緒にだ！

「みんな伏せろ！！」

俺はそう叫んだ・・・

そして、悲鳴が聞こえる。

あのルノーが撃ちやがったのだ！

「こんにやる——！」

俺はベレッタM92F を取り出し、窓からルノーを撃った。

俺が撃った弾はルノーのタイヤを撃ちぬき、ルノーをクラッシュさせた。

俺はふと、バックミラーを見た。

まだ居やがった！

しかも俺が手が出せない真後ろだ。

ブレーキを踏めないため、どうすることもできない

俺がそう考えていると、後ろにいたルノーはクラッシュして大破した。

キンジ達がやりやがったんだな・・・

俺はこのまま、最後の切り札に任せることにした。

いくぜ・・・宮澤・・・レキ!!

俺はアクセルを全開に踏んでいく。

ギヤは最高の7速・・・

下手すりゃあ、レブって減速する・・・

チャンスは...一回・・・

行くぞお——!!

俺は心の中で叫び、トンネルを出た。

作戦通り、宮澤のヘリがすぐさま並走してくれた。

レキも爆弾^{ボム}を見つけてくれたみたいだな。

いつものセリフを言っただけ・・・

そして・・・レキがドラグノフを放った・・・

弾丸は、どうやら爆弾^{ボム}を撃ちぬいたみたいだ。

何か気が楽になったようだ・・・

俺は爆発音を聞いた後、すぐにEBとFBで停まり、キンジとアリアのいる屋根に上った・・・

そこには・・・キンジが頭から血を流しているアリアを抱えていた・・・

「アリア!!」

俺は夢中だった・・・

だから・・・覚えていない・・・

なんか俺はアリアの傷口に何かして、メディカ衛生科顔負けの止血したらしいが・・・覚えていない・・・。

俺はただ・・・必死だった・・・

宮澤 みやざわ さくら(16)

髪：黒髪のショートヘア

身長：158cm B：B80

眼色：エメラルドグリーン

携帯武装：パラ・オードナンスLDA、ライトニング・ダブル・アクションダガーナイフ

車輜科二年Aランク・・・

陸海空の乗り物は武藤並に乗りこなす少女。

薫とは一年からの付き合いである。

結構やさしく、素直な女の子。

石宮 いしみや りん(16)

車輜科二年Bランク

髪色：藍色のストレートヘア

身長：150cm B：A60

眼色：ミッドナイトブルー

携帯武装：ベレッタM84“チーター”、コンバットナイフ

自動車の運転はSランク並みなのだが、他はまああのBランク。

薫とは、宮澤を通じて知り合い、薫に命を救ってもらった過去がある。

偶に、薫と宮澤と一緒に昼食を摂ったりしている。

勿論、一年からの付き合いである。

丁寧口調で、薫の事は<薫さま>と呼んでいる。

7弾 A r i a t h e K a m e r a d E i d

俺は気付くと寮のベッドに寝ていた。

ああ・・・そういえばアリアを病院に連れて行って、石宮に送ってもらったんだった。

俺はシャワーを浴びて制服に着替えて部屋を出て行った。

コンビニに行って、ももまんをあるだけ購入し、アリアの見舞いの為、武偵病院に向かった。

武偵病院三階VIPルームエリア廊下・・・

まったく人が歩いてねえ・・・

静かだ・・・

まあ、もう夜になる一歩手前だからな・・・

時刻は午後6時44分・・・

夜だね~~~~~

そして、俺は<神崎・H・アリア>と表札が出ている部屋を見つけた。

一応、ノックしないといけないよな・・・

俺は、コンコンツとドアを叩いた。

しかし、返事がない・・・

俺は恐る恐る、スライドドアを開いた。

しかし、アリアは寝ているみたいだ。

しゃあねえ・・・ももまんだけおいて帰るか・・・

俺はそう思い、ベッドの近くの台に<レキ>と書かれた百合のフラ
ワーアレンジメントがあった。

レキも来ていたのか・・・

そして、俺はその百合の横にももまんを置いた。

ふとゴミ箱を覗くと・・・やっぱり捨ててやがった・・・

報告書・・・

みんなが頑張つて調べてくれたのに・・・

まあいいか・・・

「ん・・・」

や、やべエー!!

俺がアリアの方の目を向けると、ただ寝がえりをうつただけみたいだった。

ふう

俺は、アリアの頭に巻かれた包帯に目を顰めてしまう・・・

俺のせいで負った怪我だからだ・・・

「すまなかった・・・。俺が不甲斐ないばかりに・・・」

なぜか知らないが、俺は右手でアリアの頬をそつと撫でた。

「…ママ…」

寝言・・・か・・・。

こうしてると可愛いんだよな・・・

やっぱり…こいつはいろんなもんを抱えて生きてんだろっな・・・

俺はそう思っ、部屋を出ることにした。

そして、寮に戻って、眠りに就いた・・・

翌日・・・

今日は休日だ。

俺はちよいと調べることにした。

武偵殺しについてな．．．．．

部屋にあるPCで1日かけて調べた。

やっぱりだ．．．．辻褄があわねえ．．．

あの人は無罪のはずだ．．．

だが証拠がそろってやがる．．．

逃れられねえわけだ．．．．

俺は腕に付けた時計を見た。

もう午前0時だ．．．

寝るかな．．．．

そして俺は眠りに着いた．．．．

翌日．．．．

俺の携帯が鳴った．．．

眠い・・・が、相手はアリアだ。

出なかったら風穴地獄だろう・・・

渋々、俺は電話に出た。

「なんだ？アリア」

『ねえ、今からアンタの部屋に行っていい？』

なんだか・・・元気がない・・・

「学校で会えばいいだろ？」

『二人っきりで話したいの！！』

なんだろうな・・・まあ、一般教科は別にサボってもいいし、専門ノルマーレの強襲科（アサル
ト）は卒業単位を揃えている。

それに・・・アリアが俺と二人で話したいって言うてんだ。

しかも・・・気になるからな・・・

「わかった。俺も休んでるから来い」

『ありがとう・・・』

アリアはそう言って、電話が切れた。

アリアがくありがとうゝっていったのは初めて会った時以来だから
2回目だな・・・

なんだろうな・・・話って・・・

しばらくしてアリアが来たため、部屋に上げてソファに座らせた。

「で、話ってのは？」

「あたし・・・今日の夕方、ロンドンに帰るの・・・」

マジかよ・・・

「なんでだ？」

「あたしがここに来たのはパートナー探しも兼ねてたのよ。でも..
キンジは違った・・・。あたしはや
っぱり独奏曲^{アリア}なんだわ・・・」

泣いてる・・・アリアが・・・

「それとこれと、俺にどう関係ある？」

「あたしとロンドンに渡ってほしいの」

やっぱりな・・・。

まあ、俺はフリーなんだ…。それに…。アリアを一人にさせたくない……

「いいぞ。こんな俺でよければな」

アリアはうれしそうな顔をした。

「も、もちろん仲間^{カメラート}としてよ!!」

「ああ、分かってる……。仲間^{カメラート}としてな」

いいんだ……。これで……

「そうと決まれば早く準備しなさい!!」

「はいはいわかったよ」

俺はやれやれというように、荷物の準備を始めた。

こうして、俺はアリアの仲間^{カメラート}として渡英することになった……

8弾 R i k o t h e n e b e n b u h l e r .

俺とアリアはアリアの荷物を取りに行くため、第一女子寮に向かった。

寮に着き、俺はタクシーを呼んで、門の前で待つ。

しばらくして、アリアはキャリーバック一つ持って、寮から出て来た。

どうせ、何も話すことは何もない。

だから、無言でタクシーに乗り込み、空港に向かう。

タクシー車内……

「この前はありがとう……」

不意にアリアが行って来た。

「何がだ？」

「バスジャック事件の時、止血してくれたたんでしょ？レキから聞いたわ」

あの野郎……黙っとけよ……。

話してほしくないことを話しやがって……

まあ、報告がてらに言っただくらいだろうが・・・キンジに編集してくれなかったのか・・・

俺は照れながら外を眺めた。

「別に、仲間として当り前の事をしたまでだ。礼を言われるほどじゃないねえ」

「あと、ももまんも買ってきてくれた・・・」

な、何で俺だつてわかったんだよ!?

誰もいないことをちゃんと確認した!!

ならなんで・・・

「なんで知ってたんだよ...?」

「やっぱりアンタだったのね」

「当てずっぽかよ!!」

「違うわ、大まかに推理を試みたの。キンジとレキは私が起きてるときに来てくれた。だけどアンタは来ていない...。キンジは一度ももまんを買ってきてくれたし、私がかもまん好きなのを知ってるのはキンジとアンタだけ...。だからアンタが犯人よ」

おいおい・・・まあ、誰が持ってきたかわからんから、大まかに推理して食べたんだろうな・・・

恐ろしいやつだ・・・

「なら全部食ったんだな

「もちろんよ」

「誰が持つて来たか分からんももまんを食べたいからそんな推理が出たのかい？」

「そ、そんなわけないでしょ!!」

やっぱりか・・・

そして、空港に着いた。

俺はもちろんチケットを持っていないため、チケット売り場に行く。

やっぱりアリアと違う部屋が良いだろう・・・

「あの・・・」

「すみません、この子とあたしの部屋を相部屋にしてほしいんだけど・・・」

何言ってるんだ――!!

「お、おい・・・」

「どうぞ、お待たせしました」

受付の女性がチケットをアリアに渡した。

「ありがとう」

アリアはそのチケットを受け取り、俺に渡して来やがった・・・

「なんで相部屋なんだよ・・・？」

「アンタはあたしの仲間カメラートでしょ？別にいいじゃない」

マジかよ・・・・・・・・まあいいか・・・・・・・・

「それじゃ行くわよ！」

アリアはうれしそうに歩きだした。

しゃあねえな・・・

俺もアリアの後についていき、機内に向かった。

今はもう夕方5時50分・・・

太平洋に台風があるせいか、夕日どころか空も見えない曇天であった。

俺はその空を見ながら、機内に向かうための通路を歩いていた。

「薰、どうかしたの？」

それは自然と歩く速度が遅くなっていたみたいだ・・・

「悪い、考え事をしてた」

「そう、別に詮索しないけどちゃんとしてきなさいよね？」

「はいはい」

そして、再びもう一度歩きだし、機内に入った。

あゝ、まああつちで武偵活動すんなら、みんなであつちに暮ら
かな・・・

親父もあつちにいるし・・・

母さんもフランスだし・・・

あ、ならあつちで暮らした方が幸せかもな・・・

菜月達にも、親父と母さんに会いたいだろうし・・・

まあ、あつちに着いたらロン武高に転入届を出さんないかな・・・

部屋に入り、俺はすぐに制服のブレザーをソファの背もたれに掛け
て、ネクタイを緩くする。

「ふう〜。なあ、アリア」

「なによ？」

「あっちの武偵高つて、日本の規則と違うのか？」

「ええ。あっちでは人を殺しても罪にはならないわ」

そんな恐ろしいことを口にするんじゃないわ！

「そういうことじゃない！武器の改造^{イジリ}限度はドンくらいまで許されるのかってことだ！！」

「ならそう言いなさいね。別に限度なんてないわ。簡単にいうと、自由（フリー）よ」

そうか・・・ならあっちの主要武器を覚えとかないとな・・・

俺はそう考えながら、ソファに座った。

そして、飛行機は動き出した。

あと、異様な気配を感じ、俺は懐のホルスターのベレッタをセミオートからフルオートに替えて、固定ベルトを緩めた。

そして、ドアが開いた・・・

「「キンジー！！」」

俺とアリアは驚いた・・・

入ってきたのは、キンジだ……

なんてこった……

「よ、よう」

なんだよ、その困ったっていうような表情は……

「断りもなく部屋に押し掛けてくるなんて失礼よ!!」

「お前がそのセリフを言う権利はないだろ」

「そうだぞアリア。てかキンジ、武殺の狙いを今更気付いたのか？」

「どういうこと!? アンタ、武偵殺しの狙いを知ってるの!？」

キンジはやっぱり知っていたのかというような顔をしている。

「んじゃあ、俺は見周りに行ってくる。後の説明はキンジに任せる」

俺はそう言って、再びネクタイをちゃんと締めて、ブレザーを着る。

「な、なんでキンジと二人っきりにならないといけないのよ!？」

アリアが俺に怒鳴る。

「怒鳴るくらいなら自分で推理できるくらいになればよ、オルメス4世」

アリアは俺の言ったくオルメス4世>という単語に目を見開いた。

「んじゃあ、キンジ、後は頼んだぜ」

俺はそう言い残して、個室を出た。

「あのCIAが犯人だキャビンアテンダントな……」

俺はそう思って、機体後方に歩いて向かう。

この武偵殺しが最初に起こした事件……

それはバイクジャック……

次にカージャック……そして……キンジの兄貴が行方不明になったシージャック……。

最初、俺はただ無差別に武偵を狙ったのだと推測した。

が、この前のチャリジャックの時……このジャック事件はちゃんとターゲットが居るんじゃないか
と思った……

その時は思ったただけだった……

証拠がないから判断出来なかった・・・

そして、バスジャックの時、俺は確信した・・・

狙われているのは・・・アリアだ。

間違いない・・・

まあ、物的証拠はないのだが・・・

すると、雷が鳴り始めた。

嫌な天気だな・・・

不吉・・・というべきか・・・

俺はそう思いつつ、後方の貨物室に爆発系のものがセットされていないか、探してみる。

ちなみに、普通はセンサーがあり、操縦者に知らせるのだが、俺はその対策をして中に入ったのだ。

めっちゃくちゃ簡単だ・・・

俺は溜息をついて、調べた。

が、それらしいものは何もなかった・・・

俺は貨物室から出て、キンジとアリアのいる個室に向かった・・・

俺が、個室の前に着いた時、視線を感じ、視線の方向を見る。

「あらら・・・なにしてくれてんだよ・・・武偵殺し・・・」

俺の目がとらえたのは、入り口に居たC Aがほかの気絶したC Aを引きずってこちらに歩いて来る。

そのC Aはその場に停まり、気絶したC Aをその場し降ろし、不気味な笑みを見せて、俺をワルサーP99で撃ってきた。

俺はうまく避けた。

すると、銃声を聞いた客どもとキンジ、アリアが出て来た。

「Attention Please でやがります」

そして、そいつは謎のG A S缶を開けて、その場に放り投げた。

「チッ！全員部屋に入ってドアを閉める！！」

俺はキンジとアリアを部屋に押し込めながら叫んだ。

俺も部屋に入ってドアを閉める。

「Not bio spray、無害ガスか・・・。してやられたな・・・」

俺は少し微笑む。

すると、^ハポポ——ン ポポポン ポポ——ン ポポ——ン
ン」と和文モールスが聞こえる。

「おいで・・・イ・ウーは天国だよ…。おいでおいで私は一階のバ
ーに居るよ…」

俺はそのモールスを口に出して略した。

「誘ってんのか…？」

「当たり前だろ。奴はアリアが狙いなんだから・・・」

俺はベレッタのマガジンの弾数を確認しながらいう。

「上等よ！風穴あけてやるわ！！」

フツ、やっぱりアリアはこうでなくちゃな・・・

「一緒に行つてやろうか？今の俺が役に立つかどうか分からんけど
な・・・」

まあ、キンジなりの思いやりつてやつかもな・・・

「来なくていい」

「おいおい・・・」

俺は落ち込むぞ。

折角、二人つきりにしてやったんだからよ・・・

すると、雷が鳴り響く。

なぜかアリアがビクッてる。

はは〜ん・・・雷が怖いんだな〜（笑）

なんて笑ってる場合じゃねえ・・・

「アリア、行くぞ」

俺は先に個室を出た。

アリアが慌てて先に行く。

俺とキングジは溜息をついて、互いに肯きあう。

俺はベレッタを構えながら、階段を下りる。

そして、バーに着くと一人のCA・・・ではなくフリフリ改造制服を着たCAが居た。

「今回もキレイに引っ掛かってくれやがりましたねエ」

そういうと、C Aは顔の特殊メイクを剥がした。

「はあ・・・やっぱりお前か・・・理子」

俺がそういうと、「ピンポン！さっすがさっきー！さっきのメ
ールは大正解。よく私だってわかった
ねー。理子驚いちゃった！」とテンション高く言ってくる。

キンジとアリアは驚きながら俺を見ている。

「アンタ知ってたの!？」

アリアが俺に問いかける。

「まあ、半信半疑だったかな・・・」

そうなんだよな・・・

「まあいいや。正解したご褒美に理子の事教えてあげる。峰・理子・
リュパン4世…。それが理子の本当
の名前・・・」

「リュパン…!？」

キンジが驚くのも無理はない・・・

だって、理子がフランスの大怪盗の子孫だったって今知ったんだも
んな・・・

「でも、家の人間はみんな理子を『理子』とは呼んでくれなかった…。お母様がつけてくれたこのかわいい名前を。呼び方がおかしいんだよ」

「おかしい…？」

俺はつい、声に出してしまった…

「4世…4世…4世…4世さまア——！って…。どいつもこいつも使用人まで…。理子をそう呼んでたんだよ、ひつどいよねえ」

確かにひどいな…。

せつかく理子って名前があるんだから、そう呼んであげればよかったのに…

だが、アリアにはそんな感情があるか分からん…

「そ…それがどうしたっていうのよ？【4世の何が悪いってのよ…】」

「

この言葉が…。理子の怒りを買うトリガーとは思わないのだろうか…

「悪いに決まってるだろ！！あたしは数字か！？あたしはただのDNAかよ！？あたしは理子だ！数字じゃない！

どいつもこいつもよオ！！曾お爺さまを超えなければあたしは一生あたしじゃない！『リユパンの曾孫』

として扱われる。だからイ・ウーに入ってこの力を得た！この力で

あたしはもぎ取るんだ、あたしを
ッ！！」

「待て…待ってくれ！！お前は何を言っているんだ！？オルメスつて…イ・ウーってなんだ！？『武偵殺し』は…本当にお前の仕業なのか！？」

キンジ…

しやあないな…

「おい理子、お前の本命はアリアなんだろう？」

確証はないがな…

「そつだ。100年前、曾お爺さま同士の間決は引き分けだった。つまり、オルメス4世を斃せば、あたしは曾お爺さまを超えたことを証明できる…。キンジ、お前はちゃんと役割を果たせよ？オルメスの一族にはパートナーが必要なんだ。だから」

「だから理子はアリアとキンジを引き合わせる為にあんな茶番をやつてのけた…。そつだろ？理子」

「そつだよ！！さつすがさつき、理子の考えてることはお見通しなのかな？」

「お前とは長い付き合いだからな。で、俺の推理の捕捉だが…、お前がキンジの兄貴を殺したのか？」

俺は怒りを少しむき出しにして、理子に問いかける。

「お前が・・・兄さんを・・・」

許してくれ、キンジ・・・

だが、あいつの挑発にのんなー！！

「キンジのお兄さんねエー、今…理子の恋人なの」

「いい加減にしろー！！」

「キンジー！！理子はあたしたちを挑発しているわ！落ち着きなさい
！！」

んな忠告聞けてりゃあ、俺がこんなに焦るわけないだろー！！

「これが落ち着いていられるかー！！」

「バカー！！銃を抜くなー！！」

壊されるぞー！！

しかし・・・そんなこと、キンジが聞くはずもなく、ぐらりと機体が揺れた瞬間、理子がキンジのベレツタを素早く分解しやがった・・・

「ノンノン…ダメだよキンジ。今のお前じゃ戦闘の役には立たない…。オルメスの相棒は闘う相手じゃ

ないの。パンピーの視点からヒントを与えてオルメスの能力を引き

出す…。そういう活躍をしなきゃ

」

するとアリアが近接拳銃戦（アル＝カタ）に持ち込みやった。

「アリア！！理子はP9（ピーナイン）を二丁持つてるぞ！！」

歩き方、立ち方でわかる……

二丁拳銃だ……

「今更遅い！！」

理子はアリアと近接拳銃戦（アル＝カタ）を始めやがった。

これでは流れ弾に当たる確率が高い……

だから……何もできない……

しばらく俺がカウンターに隠れていると、アリアがキンジを呼んだ。

まさか……

俺は慌てて、飛び出す。

「アリア！！理子から離れ……」

遅かった……

理子は髪で握った小型ナイフでアリアの側頭動脈を切りやがった。

チッ！！キンジ達にも見せたことねえんだぞ！！

俺はそう思いながら、頭の中でスタングレネードを連想し、手握った。

すると、スタングレネードが現れ、俺はためらわず、床に投げつけた。

キンという音とまぶしい閃光が出で居る中、俺は動けないアリアとキンジを回収して、バーから逃げた。

チクシヨ——！！

重いつたらありやしねえ！！

俺は今まで盗んだ中で重かったものと二人を比べてこっちが軽いと暗示を掛けながら、個室に入った。

キンジはソファに座らせ、俺はアリアをベットに寝かせた。

「アリア！ちょっとは気をつけやがれ！！」

俺は気絶しているアリアを怒鳴りつけながら、傷口を応急止血テープで止血する。

そして、ラッツォを連想して、手握り、開く。

手にはラッツォが現れていた。

これが俺のもう一つ的能力・・・<錬金術^{アルヒミ}>

無い物を頭で連想するだけで、具現化できる超能力である。

だから俺は<歩く弾丸倉庫>というあだ名が付けられたのである。

俺はアリアの服の上からラッツォの注射針を心臓に直接打つ。

幸い、こいつのDNAはアレルギーがない・・・わざわざ救護科に^{アンビュラス}まで確認に行ったこと

とがある。

打った瞬間、アリアの体が少し震えた。

が、すぐに起き上がった。

「このバカ・・・」

「か、薫！！な、なんで・・・」

「こっちは大丈夫みたいだな・・・。キンジ、もう大丈夫か？」

「ああ…、もう慣れて来た。」

よし・・・これで作戦が実行できる・・・

「り、理子は!？」

マズイ！！ラッツォは強力な薬だ、錯乱状態にまでなるほどのな・

「理子——！！」

アリアは俺を突き飛ばして。出口に向かおうとする。

マズイ！！今のままじゃ・・・

だが、俺はさっき突き飛ばされたせいで、すぐには立てない。

するとキンジがアリアを止める。

何かいい争っているが、俺はそれどころじゃない。

俺はベレッタを見る。

まあ、一発も撃っていないから弾丸はあるんだがな・・・

すると、さっきまで騒がしかった二人が静かになった。

おいおい・・・まさか・・・

俺はそう思って、キンジとアリアを見る。

キス・・・しやがった・・・

なんだこの絵は！？

俺は主人の不倫現場を見てしまった使用人か！！

アリアは力が抜けたように、座りこんだ・・・

キンジもあっちのキンジになったみたいだ・・・

「薫、作戦はあるか？」

キンジが俺に問いかけてくる。

「ああ、俺の描いたシナリオはアリアが主役だけだな・・・」

俺はキンジに笑みを見せる。

「ぜひ聞きたいな」

こうして、俺の考えたシナリオで、理子を斃すことにした・・・

9弾 Aircraft Recover

俺達は俺が考えた仕掛任務トリックミッションをやることとなった。

そして・・・配置は完了した。

後は理子がこの部屋に来るだけだ。

俺はそう思って入口の前に立つ。

すると、足音が聞こえ、扉が開いた・・・

「よう、理子。遅かったな？オルメスの死に様を見れなくて、残念だったな・・・」

俺は悲しい顔をする。

もちろん、偽顔ダミーフェイスの表情だ。

「そうなんだ、死んじゃったんだアリア…。でも、キングはどこかな？」

「さっきうるさいほどの錯乱しやがったから気絶させて、ベッドに眠らせている」

俺はそういいながらベッドを指さした。

「ふゝん。じゃあ後の障害はさっきだけだね。ねえ、さっきもイ・ウーに來ない？」

「そうだな…。でも、俺はやっぱこつちがいい。誰にも嫌われずにのうのうと行きたいんだ……。俺はね……」

俺はいい、ベレッタM92Fをゆっくりと取り出し構えた。

理子もワルサーP99を取り出し俺に銃口を向けた。

残念……。それは鏡に映った俺だ。

俺は理子の頭に銃口を突き付ける。

「よくこんな大荷物持ってこれたね」

「持ち込むわけないだろ。錬成したんだ」

「…錬金術^{アルヒミ}……。か。流石さっきだね……。無駄がない……」

理子はベッドを撃った。

しかし、飛んだのは血飛沫ではなく……。羽毛だ。

「はずれだ、理子」

キンジはクローゼットから現れ、理子の額に銃口を突き付ける。

「あつれエ？キーくん生きてたんだ。さっきの嘘つきィ！」

「悪いな、理子……。でも俺はこっちがいいんだ。お前も、あんな奴らから手を退いてくれ……」

「今更遅いんだよ！！この裏切り者！どうせお前等二人でこの私が斃せると思ってるのか！？」

男気ある理子は俺を睨んだ……

二人じゃないんだな……

「なら、3人だったらどうかしら？」

さっすがに小さいロッカーに入ってるとは思わなかっただろう……

俺もびつくりしたからな……

「やっぱり生きてやがったか！！」

「誰が死なせるか……。理子、お前は弱いんだよ」

「あたしが弱いだと！？」

「弱すぎる……。理子は大事なもんが欠けてるからな」

そつだ……。お前は俺以外に仲間が必要だ……

真実を知った俺じゃなくな……

「ふざけんな！！裏切ったためえだけには言われたくねえんだよ！

「！」

理子はそう叫び、俺目掛けて髪が握った小型ナイフが飛んでいく。

俺は避けずに……受けとめた……

もちろん……防刃制服を貫通し、腹部に二本の小型ナイフがグサリと刺さった……

「「薰!!」」

これでいいんだ……これで……

理子は驚いたように俺を見て、後ずさった……

まるで、くなんで避けなかったんだ>と言わんばかりの驚きようだ・
・

アリアとキンジが叫んでやがる……

その隙に理子は逃げて行った。

アリアは俺に駆け寄ってきた。

キンジも駆け寄ってきたが……今はそんな場合じゃねえだろ……

「キンジ!! お前は理子を追え!! 俺は大丈夫だ!!」

「だが……」

「武憲1条を守れ!! 守らねえとクロス!!」

俺はキンジに叫んだ・・・

「...わかった。アリア、薫を頼む!」

「わかったわ!」

キンジは理子を走って追いかけていった・・・。

「薫、大丈夫!？」

「安心しろ、傷は浅い。それより、コックピットに行くぞ」

恐らく、この飛行機はさっきからぐるぐる同じ所を回ってやがる・・・

俺は立ちあがり、ナイフを抜いた。

血の付いた長さからみて、2?ぐらいか・・・。

内臓までは達していない・・・

「でもアンタ・・・」

「俺が死ぬのと、この飛行機が墜ちるのはどっちがいい？」

そうなんだよ・・・この飛行機には一般人が居る・・・

死なせたらアリアがマスコミに叩かれる・・・キンジの兄貴の二の

前になるだけだ・・・

「どっちもダメよ!!」

真剣な目をしてやがる・・・

「ならとつと行くぞ。てか、俺がこんだけで死ぬわけねえだろ・・・
だから、安心しろ」

やってやる・・・

エアクラフト・リカバ―
飛行機奪還・・・

今回が・・・初めてだ・・・

俺は腹部を右手で押さえながら携帯を取り出しながら、アリアを引き連れてコックピットに向かった。

チツ！意識が遠のきやがる・・・

床にポタポタと血が垂れ落ちる・・・

携帯に写したのは、台風とGPSで現在位置を見る。

やっぱり全然移動してねえ・・・

巡回飛行ターンフライしかしてねえ・・・

俺とアリアがコックピットに入る。

ビンゴ・・・誰もいねえ・・・

「どういうことよ！？パイロットが居ないじゃない！」

「そりゃあ・・・この飛行機全体が武殺のオモチャだからな・・・。居なくて・・・当然だ・・・。それより、そっちに座れ」

俺は右側の席に座る。

「ちょ！こっちは機長席よ！！」

「だからなんだ？」

「あたしはセスナ機しか操縦したことないのよ！」

マジかよ・・・ってのは冗談として・・・

「安心しろ・・・アリア。俺が補助^{サブ}してやる・・・。ただ・・・俺はいつ気を失ってもおかしくねえ・・・。だから・・・俺が気絶した時は頼んだぞ・・・」

「・・・分かったわ。あたしにも基礎的な操縦を教えてなさい！」

「わかってる・・・」

俺はアリアに操縦に必要な知識を最短で教えた・・・

「さてと・・・」

俺が燃料の残量可能飛行時間を出そうとした時、爆発音が鳴り響く。

「なに！？今の！」

俺は燃料計を診る。

「インターエンジンの回転メーターがエラーになりやがった……。恐らく……。インターエンジンがやられた……」

「どういうことよ！？」

「わからねえが、間違いなく……。さっきの爆発が原因だろ。俺達には何も出来ねえ……」

すると、キンジがコックピットに入ってきた。

「遅い！！」とアリアがキンジに怒鳴った。

「アリア、運転できんのか？」

「セスナ機しかないわ。大抵の事は薫に聞いたの」

「薫は運転できるのか？」

「少しだけは車輛科の宮澤に習っている」

「キンジ……。アリアの代わりに操縦してくれ……。この機体はアリアには荷が重すぎる」

「わかった」とキンジはいい、アリアと代わった。

「で・・・、何をすればいいんだ？」

「まずは滑走路の確保だ。このあたりでベストなのは・・・羽田か・・・」

俺は機内電話を使い、宮澤に電話した。

『もしもし？』

「俺だ」

『薫！？良かった・・・無事なのね？』

「まあ何とかな・・・でも、その反応ではもう公で放送されていくってことか？」

『ええ。恐らく乗客が連絡したんだと思う・・・』

「そうか・・・。てことはそこにみんな集まってるのか？」

『ええ。少なくともアンタが知ってる二年はね・・・で、今の機体状況を教えて。さっき

レキが言ってたけど、ミサイルのような物体が機体に向かって飛んで行くのが見えたらしい・・・。そうなの？』

「レキも居んのか・・・。その通りだ。インターエンジンが両サイドやられ、アウターエンジンで飛行している」

『燃料は？』

「528・・・526・・・ダダ漏れだ・・・。逆噴必須燃料
計算を考えれば・・・。」

『保つて15分・・・。できれば10分以内に着陸させないと、こ
の雨じゃ、タイヤが地面にくい付かないわ・・・。』

雨！？マジかよ・・・。

暗闇で全然わからなかったが・・・。

『羽田に着陸した方がいいわ。あそこなら、確實だから・・・。』

「分かった。連絡を取ってみる。キンジ、代わってくれ」

俺はキンジに機内電話を渡した。

そして俺はインカムで羽田 Cコントロールに通信を試みた。

「こちら、AM A 600便・・・。羽田C、応答願う。繰り返す、
こちらAM A 600便・・・、羽田C、応答願う」

俺がインカムで呼びかけると、微かに雑音に混じって、人の声が聞
こえる。

『こ・・・は・・・ントロー・・・。A・・・便、で・・・
・・・しょ・・・た・・・。』

まったく・・・雑音しか聞こえん・・・

『緊……数127・631で……答せよ!』と肝心なところが聞こえた為、さっきまでの事はチャラにしよう……

俺はすぐに周波数を合わせた。

「こちらA M A 6 0 0 便、緊急の為、今現在、操縦士が2名負傷、通信士の搭乗なし。操縦士二名の代わりを二名の武偵が操縦している。私は鷺宮薫、もう一人は遠山キンジ、あと、神崎・H・アリアが補助員としてコックピットに居る。インターエンジン2基をやられた」

『了解。B 7 3 7 - 3 5 0 は2基のエンジンでも飛行可能だ。安心しろ』

「だいいいんだが……」

すると、割り込み通信が入る。

『A M A 6 0 0 便、こちら防衛省航空管理局だ』

「こちらA M A 6 0 0 便」

『羽田空港への着陸は許可できない』

キンジとアリア、恐らく宮澤たちも驚いているだろう……

まあ、イ・ウーのおもちゃなら当たり前だろ……

『空港は現在、自衛隊により封鎖中だ』

『何言ってやがる！？』

『誰だ？』

『俺ア武藤剛氣！武偵だ！！600便は燃料切れを起こしてる！飛べてあと10分なんだよ！！代替着陸なんてどっこにもねえ！羽田しかないんだよ！！』

『・・・武藤武偵。私に怒鳴ったところでムダだぞ。これは防衛大臣による命令なのだ・・・』

「それで武偵を脅しているおつもりですか？この馬鹿な俺にね」

『命令を無視するつもりか？』

「無視？いいえ、とんでもございません。私は政治家や大臣階級に準ずるつもりが元々ないものでね」

『君は何を言っているのか分かっているのか？』

「わかってますとも・・・。武憲一条・・・仲間を信じ仲間を助けてよ・・・。俺はこれを守るだけ・・・。それに、アンタが思ってるほど、俺達武偵はどんなにヤバくても乗り越えられる精神つてもんが備わってる。だから、俺は自分の描くルートでこの場を切り抜ける。これ以上の詮索はしないことを勧めておく。下手したらお前らの裏を表に流してやる！！」

俺はそう叫び、通信をカットした。

「アンタ・・・後で呼び出されるかもしれないわよ？」とアリアは

薄く笑った。

「政治家なんぞ、俺は怖くなんかないね。雑魚の居集いも甚だし
い……。って言っても、羽田なんぞに着陸するつもりなんぞ、元
からねえッつつの……」

「ならどこで着陸するんだ？」

「学園島のお隣さんである空地人工浮島フィールドメガフロートに着陸する」

俺は再び、通信を宮澤に繋ぎ、これからすることを大抵説明した。

「まあ、ギリだけどアンタならできるでしょうね……。でも、あ
そこは真っ暗で端と端が分からないわよ」

「だからそこで車輛科ロジの方の協力が必要なんだよ、宮澤」

「私達に何ができるっていうのよ？」

「空地人工浮島フィールドメガフロートに車を並べて、滑走路灯ラインサインを描けってことですかね？
薫様」と石宮の声が聞えた。

「おいおいそんなこと許可なしにできるわけねえだろ！」と武藤が
言っている。

「後でなんとかするさ。とにかく頼んだぞ……」

『了解！』

宮澤はそう言って、通信を切った。

一応、一般市民も乗っているため、機内放送で呼び掛けた。

「キンジ……、後は頼めるか？」

「別にかまわないが……どうした？」

「意識がもうたねえ……。悪いが……。後は……。たの……。ん……。だ……。ん……。」

そして俺はブラックアウトするのであった……

俺は気がつくと、白い天井が目に入った。

「ここは……。」

「あ、気がついたのね、薰！」

その声はアリアだった。

「アリア……。」

「三日も目エ覚まさねえから心配したんだぞ」

そしてキンジか・・・

「俺そんなに寝てたのか？」

「ああ。先生の話によれば精神的ストレスが原因だよ」

「なるほどね……。で…アリアがなんで居る？」

おゝい……。二人して目を反らすな

「そ、そんなのどうでもいいでしょー！」

「そうだ」

「ははゝん……。さてはキンジゝ、＜Ｊ・Ｈ・ワトソン＞にでもなったか？」

すると二人はビクツとした。

「そ、そんなこと・・・」

「よかつたな、アリア」

まあ…俺が云えるのはそれくらいだ。

「んなことより、早く学校に来いよ。高天原が話し相手が居ないって落ち込んでたからよ」

俺は高天原の何なんだ！？

てか・・・気付いたら二人とも帰ってるし・・・。

ツツコム暇なし・・・

薄情者め・・・・・・・・・・

とか思いながらの翌日・・・・・・・・

俺は退院した。

10弾 Adseard

その翌日・・・

普通に授業を受けて、昼休みになった。

やれやれ・・・

俺はそう思いつつ、食堂に向かう。

そしたらキンジとアリアが居ったそうな・・・ではなく、今そこに居る。

ばれたらヤバいから、顔を隠しながら食べるところを探した。

ない・・・

キンジとアリアの座っているところがかろうじて二つ空いているだけだ・・・

しかたない・・・

合い席すつか・・・

俺は渋々キンジとアリアの居る席に行く。

「邪魔すんぞ・・・」

俺はその一言言って座った。

無言の3人・・・

てかアリア・・・昼飯ももまんってどういうことだよ・・・

まあ、俺は無難なAランチだな・・・

黙々と食べていた俺だが・・・

「遠山君、ここいいかな？」

こいつの名前は不知火 亮。

アサルト
強襲科Aランク。

昔、俺とキンジがよくパートナーを組んでいたクラスメートだ。

格闘・ナイフ・拳銃、どれも信頼がおける武偵高には珍しき人格者である。

ちなみにモテる。

「聞いたぜキンジ。ちょっと事情聴取させろ。逃げたら轢いてやる」

はいはいこいつはKY武藤…モトイ、武藤 剛気。

ロジ
車輛科Aランク。

乗り物と名のつくものなら汽車から原潜まで、なんでも操縦できる

乗り物オタクだ。

ちなみにこいつはモテない。

みんな知っていると思うがな・・・

俺とアリアは無言で食べている。

一応盗み聞きはするがな・・・

「お前、星伽さんとケンカしたんだって？沈んでたみたいだぞ。どうした？」

へえ、白雪とケンカしたのか・・・

「白雪とはどうしたも何も…。っていうかお前、白雪を見たのか？」

「今朝、温室で花占いをしていたのを不知火が見たって言うからよ」

「なんだよ花占って…」

おいおい知らんのか・・・流石、女嫌い。

鈍い・キライ・避けたいがモットの女嫌い・・・

あれ？なんかおかしい・・・けどどうでもいい・・・

「しらねーよ。アリア、聞いたことあるか？」

今のアリアは餌付けされた犬のようだ・・・

俺はこれ以上盗み聞きするのがバカらしくなったので無視する事にした。

なんだかアリアがももまんを喉を詰まらせそうになったり、キンジの顔をアリアが殴ったりしていたが無視をした。

そして話題がアドシードと呼ばれる年一武偵高国際競技大会（スポーツで言うならインターハイ、オリンピックといったモノ）にかわった。

俺もガンシューティング拳銃射撃競技にエントリーしている。

まあ、アリアのカバーだがな・・・

それに武偵大学に行くにはこれで記録を残せば有利になる。

「で、鷺宮君は競技に参加するの？」

「ああ。最初は総合競技でオール・ゲームエントリーしていたんだが…、この前、体痛めちまった

から止められた。だから、アリアが辞退したガンシューティング拳銃射撃競技に絞ることにした」

「そういえば薫は武偵大志望だったな」

「ああ。だから何もないよりはって高天原先生が代理でエントリーしてくれた」

「んまあ、その方がいいっちゃあいいが……。でも薫、確かお前、バンドにも誘われてなかったか？」

あ……。忘れてた……

「そういえばそうだったな……。でも、メリツト的には競技に出場した方がいいだろう。断っておく」

「そうだね。それはそうと、遠山君。僕達と一緒にバンドやろうよ」

「まあ得意でも不得意でもないし……。やるか」

というわけでこの3人はバンドを組むみたいだ。

「でも、神崎さん、代表を辞退するなんてもつたいたい……。アドシアードのメダルを持つてると進路がバ

ラ色になるんだよ。武偵大も有利な推薦で進学できて就職にも有利……。武偵局にはキャリア入局できる

し、民間の武偵企業だつて一流どころも内定は選り取り見取りつて話だよ？」

へえーそうなんだ……

「そんな先のことはどうでもいい。競技の練習に出てるヒマはないわ。あたしには今すぐやらなきゃいけないことがある……。アドシアードなんかよりね……」

アリアはそう言いながらももまんの包み紙を一つに丸めた。

俺は時計を見た。

そろそろ時間だな……

「んじゃあ、俺は高天原先生と綴先生に呼ばれッてから……。キンジ、死ぬなよ……」

俺はそう吐き捨て、呼びとめるキンジの声を無視してマスターズ教務科に向かった。

マスターズ
教務科 職員室……

ハア~~~~~……

さてと……

俺はドアをノックした。

「失礼します」

ドアを開けて、中に入り、両手を振っている高天原 ゆとりのところに歩み寄った。

「呼びだしたりしてごめんなさいね、鷺宮君」

「いいえ、別にいいですよ。それより、綴先生も話があるということでしたが……」

すると、ドアが開き、綴が俺に歩み寄ってきた。

「悪い悪い、今さっき書類が届いたから取りに行ってた。これが拳銃シューティング射撃競技

の競技説明とルール、あと、使用可能拳銃が書かれている」

綴は俺に書類を渡してきたため、受け取った。

「お前は確かベレM92Fだったよな？」

「え、ええ……」

なんだか嫌な予感が……

「いじってるだろ？」

マズイ……フルオートなんぞにしていることがばれたら……

「い、いじってませんよ」

「ほ、なら見せてみるよ」

か、勝てない……

「恥ずかしながら嘘をついてました……。フル替可能にしています……」

「やっぱりな。で、競技にはベレで出るのかい？」

出れない・・・

てか、フル替自体が違法改造なのだから・・・

「ま、まあ・・・デザートイーグルDEならノーマルがありますけど・・・」

「規定外だな。ほらほら使用可能には書いてないぞ」

やべえ・・・なら・・・

「わかりました…。明日までに規定内の銃を用意します…」

「分かればいいんだよ、分・か・れ・ば」

と綴は勝ち誇った顔をして、自分の席に戻った。

「はあ……。ベレを取り寄せつか・・・」

俺はそう思った。

「あのね、鷺宮君。この前ね……………」

というわけで、高天原は俺と世間話しかっただけで呼んだみたいだ……

本日のネタは<イタリア料理のお店>・・・

一応、俺も会話を返したりして話は盛り上がり、他の先生も混ざってきた……

- ・そして、昼休みを使って、イタリア料理の店について熱く語った・

11弾 Amico

午後の授業が終わり、俺は寮に戻った。

階段を上りきると、俺の部屋の前に少女が立っていた・・・

ていうか・・・俺の戦徒アミカの堇葵すみれぎ 水姫みずきだ・・・

「おい堇葵、何しに来たんだ？」

俺が堇葵にいうと、ビクツとして、恐る恐るこつちを振り向いた。

「薫先輩！お疲れ様です！！」

「あ、ああ。お疲れ・・・。てか、なんで中に入らないんだよ？スパアキー渡しておいただろ」

俺はそう言いながら、堇葵のところまで歩み寄った。

「あ、あの・・・ですね・・・。お、男の人に部屋に入るにはちょっと緊張して・・・。でも安心してください！！例

え薫先輩がえ、ええっちな本を持っけていても尊敬してますから！！」

んなもんはねえよ・・・

「ハァ、お前こそ安心しろ。んなもん、持ってねえ。てか興味がわかねえ・・・。前にも云ったが、俺は

異性に欲情できない体質なんだ。だから、俺はそこいらの男と一緒に

にすんじゃないぞ」

「そ、そうでしたね…。私ったら何考えてたんだろ。やっぱり薫先輩はカッコイイです！！尊敬します！！」

「はいはい…。それより、部屋に入るぞ」

俺は鍵を開け、ドアを開けて入る。

「はい！」

いちいち返事が良いやつだな…

まあ、嫌いじゃないから許すがな…

俺と薫葵は中に入り、薫葵は夕食を作ってくれと言ったので、その言葉に甘えることにした。

俺は部屋に入り、イタリアに住んでいる父＜鷺宮 梓弦＞に電話を掛けた。

1コール・・・2コール・・・3コール・・・

『もしもし、薫か？』

電話に出た。

「ああ。こんな時間に悪い…」

『別にいいさ。で、何の用だ?』

「ベレッタM92Fのノーマルが欲しいんだけど・・・今日中に・・・」

『おいおい・・・それは流石に無理だろ・・・。今から送ったとして、着くのは明後日だ』

「やっぱりか・・・」

『でも、お前も持ってるじゃないか。』

「それがさ、ちょっと改造をいれて・・・アドシールド^{イシロ}で使えないんだよ。だから、ノーマルが欲しいんだ」

『うーん・・・、そんなこと言っただってな・・・』

「なら他の奴で日本で手に入りそうなのって・・・」

『IMIジェリコ941ぐらいだろ』

「母さんと同じ奴か?」

『ああ、そつだよ。アレなら規定内に入ってるはずだ』

「待ってくれよ・・・ええつと・・・」

俺は規定書を見る。

A Zの順で並んでいるため、簡単に見つけることが出来た。

IMIジェリコ941・・・製造国はイスラエル、口径9×19、全長205mm、重量1,086g、装弾数16+1。

イスラエル国防軍で制式化されている自動拳銃・・・

規定内ではある。

「あつた・・・」

『そうだろ。なんせ、母さんはそれで金メダルを獲ってるからな』

「ハア——！！んな話聞いてねえぞ！！」

『当たり前だろ。俺は芙弓ふゆみに負けた身だから話したくはなかったがな・・・』

マジかよ・・・

あのいつも優しい表情の母さんが・・・金メダルを獲ってやがるとは・・・

しかも親父は銀メダル・・・

恐ろしい親だな・・・

俺は啞然としていた。

『まあ、私からそっちに住んでいる販売人の椿に連絡してやる。椿

なら１０分で来るはずだ。姿は見せん
がな』

「了解…。なら頼むよ……。料金は明日にでも……」

『別にいい。ただ、アドシード頑張れよ』

「……ありがとう」

そして、電話を切った……

１０分後……

俺が部屋からリビングに出ると、ものすごく香ばしい匂いがする。

焼き魚かよ……

まあいいや……

「あ、薫先輩。もう少し待っててくださいね」

「ああ、気にしないでいい」

すると、ピンポンとチャイムが鳴る。

そのすぐ後に、ゴトツと何かが落ちる音がした。

来たか……

俺は玄関に向かい、床を見た。

そこには、銀色のアタッシュケースが落ちていた。

by camellia という紙が上に載っていた。

「普通に椿って書けよな・・・」

俺はそう呟き、アタッシュケースを持って、リビングに戻った。

テレビの前のテーブルにアタッシュケースを置いて、俺はソファに座り、開いた。

中にはマガジン八つ、裸弾の入った箱が四つ、サイレンサー一本、そして本体が中央にある。

俺は手に取って見る。

ベレッタM92Fより少しだけ重いが…、フィット感はある。

長さもベレッタM92Fより12mmも短い。

装弾数も16+1とベレッタM92Fより一発多い。

母さんが愛用するのわかる気がする・・・

「薫先輩、できましたよ」

と堇葵が俺の後ろに来た。

「そうか……。なら食べるか」

俺はアタツシユケースを閉めて、ソファを立ち上がり、ダイニングテーブルに座り、堇葵と食事を始めた。

旨い……。てか料亭の味ってやつだな……

「おい……。堇葵……」

「なんですか？」

「お前の実家って……」

「はい、料亭ですよ」

やっぱりな……

通りで旨いはずだ……

「お前は立派なお嫁になるな」

「そんな〜、立派なお嫁さんだなんて〜」

「お、おい……」

「はッ！！すいません！取り乱したりして」

「気にすんな……」

そして、食べ終わり、シャワーを浴びて、寝る用意をした。

俺はソファに座り、TVを見る。

「おい、董葵」

「はい、なんですか？」

「今日は泊まってけ。もう夜がふけてるから危ないだろ」

「わかりました。それではお言葉に甘えさせていただきます」

そして夜10時・・・

俺と董葵は眠りに着いた・・・・・・・・

11弾 Amico（後書き）

すみれぎ 堇葵 みずき 水姫（15）

髪：ミッドナイトブルーのストレートヘア

身長：148cm B：A58

眼色：サファイアブルー

所属：アサルト強襲科

ランク：Eランク

携帯武装：ベレッタM8000“クーガー”、ダガーナイフ

装備場所：クーガーⅡ右足太もも、ダガーナイフⅡ左足太もも

一般中学から入学して来たため、あまり武偵としての知識がない。
その為、Eランクなのである。

彼女が武偵高に入った理由は、少しでも強くなりたいからである。

12弾 Immer Zeit

翌日……

俺と堇葵は朝起きて、制服に着替える。

そして、堇葵の作ってくれた朝食を食べて、昨日届いたIMIジェリコ941を持って、部屋を出た。

ちなみに、俺が女子を連れて登校するのは初めてである。

堇葵は俺の横に並ばず、左斜め後ろを二歩分空けて歩いていた。

てか……逆に不安になるっての……

ハア……

俺が立ち止まると、堇葵も立ち止まる。

「あのな、堇葵、なんで後ろを歩いてんだよ……」

「だ、だって、薫先輩の横に並ぶのは恐れ多くて……」

「ふざけんな……。俺は後輩であろうと、ランクEでも平等に接してやる。だから、横に並んでもいいんだぞ」

俺がそういうと、なぜか堇葵が目をうるうるさせて、俺を見上げて

いる。

「やっぱり先輩は尊敬します！こんな私でも平等に扱ってくれるなんて…優しいです！」

「はいはいわかったからさっさとバス停に行くぞ」

「はい！」

俺と堇葵は再び歩き出した。

堇葵も横に並んでいる。

こっちの方がいろんな意味で安心する。

堇葵の表情を見れるからな・・・

そして、バス停に一番乗りした。

「誰もいませんね」

「そりゃそうだ。だって、みんなゆつくりだからな」

現在の時刻は午前7時39分・・・

大体みんなが動き出すのが午前7時48分だ。

まあ、始発が58分に着くのだが・・・

「でも、始発が58分と書いてるんですが・・・」

「まあ、この時間に来て、最初に乗って席を確保しないとな」

「あ、あるほど」

そして、どんどん男子寮の奴らが集まりだす。

数分後、始発のバスが来た。

俺と堇葵は後方の席に着いた。

もちろん、堇葵を窓側に座らせた。

ちなみに、一番安全だからだ。

もし、ジャック犯が乗り込んできても、姿を隠せるからな。

まあ、このバスをジャックするようなバカは居らんだろ。

「よゝ薰！」

武藤が来やがった・・・

「なんだ？武藤」

「お前もつれないな。彼女が居るんなら居るって言えよな」

「かか彼女！？」

おい董葵．．．湯気が出てんぞ．．．

「あんな、KY武藤」

「誰がKYだ！」

「お前だつて。てか、この子は俺の．．．」

「嫁ですか？」

不知火．．．

「よよ嫁！？」

おい．．．顔から火が出そうくらいに真っ赤だぞ．．．

「不知火．．．。お前だけはそんな冗談を言う奴じゃないと信じていたが．．．どうやら武藤菌に感染したみたいだな」

「んだよそれ！？」

「まあまあ、冗談は置いて．．．。その子は？」

「俺の戦妹だ」
アヒカ

「は、初めまして！董葵 水姫と申します！」

「初めまして。学科は確か．．．」

「はい、強襲科です」
アサルト

「へえ」

「てか不知火、お前も強襲科なら知ってるだろ」
アサルト

「まあそうなんだけどね。けど、滅多に1年と会うことないし」

「それもそうか……。まあ、俺も少ししか知らないからな」

そんなこんな話しているうちに、バスは武偵高に到着した。

俺は堇葵を教室まで送り届けた。

「んじゃあ、また、午後な」

「はい。わざわざありがとうございます」

そういうと、堇葵は軽く一礼して教室に入って行った。

さてと、俺も教室に行くかな……

俺が振り返った瞬間、一人の少女がこけた……。盛大に……

「おい……。大丈夫か？」

恐る恐る歩み寄る……

俺はこける瞬間を見ているだけに、心配だ……

「は、はい・・・なんとか・・・」

その少女は、ゆっくりと起き上がった。

「だ、大丈夫ならいいんだ。今度からは気をつけるよ」

「はい・・・。気をつけます・・・」

少女は額を打ったのか、額を押さえながら教室に入って行った。

あの子が強襲科なら恐らく・・・いいや、確実に足手纏いだ。

「ハア」

俺は溜息を一つつき、教室に向かうことにした。

午後に奇跡的な再会をするなど・・・思っではいなかった・・・

13弾 Figlia Recover

午後になり、俺は強襲科実習場に向かった。
アサルト

中に入り、俺は射的シューティングに行き、ジェリコを試射撃してみる。

反動はベレッタの1・5倍くらいだ。

「なるほどね…」

すると、何者かの視線を感じた。

恐る恐る後ろを振り向くと、朝、盛大なこけをした少女がこっちを睨んでいる。

「さっきからなんだ…」

俺は振り向いた。

「先輩…朝のことは…」

あゝあのことか…

「ばらしてない。てか、あんなこと話すこともない。だから安心して」

「そうですか。よかった」

「それより・・・」

「あかり！何サボってんのよ！？」

アリアが来た・・・

「す、すみません！アリア先輩！」

おいおい・・・まさかアリアの戦妹^{アミカ}かよ・・・

「ちょっと、まさか薫が呼びとめたんじゃないでしょうね？」

「んなわけあるか・・・それより、そいつはお前の戦妹^{アミカ}か？」

「そうだけど、悪い？」

「いやいや別に構わんさ」

すると、薫葵が現れた。

「あ、薫先輩。射撃教えてください・・・ってあかりちゃん、何してるの？」

「べ、別に何もしてないよ！」

「そう・・・。薫先輩を奪ったら殺す・・・からね」

に、にこ——！？

恐ろしき董葵・・・

「それより、射撃だろ。教えてやつから・・・」

「よろしくお願いします！」

こうして、あかりという少女はアリアに連れられていき、俺と董葵は射撃の練習をやって、授業は終わった。

董葵は女子寮に帰って行った。

俺は寮に帰った。

部屋の前にたどり着き、鍵を開けて入る。

すると、とあるやつの気配がした。

俺が玄関の明かりをつける。

「来てるんだろ？ローザ」

すると、部屋の奥の闇から一人の女性が現れた。

「よく気づいたわね、アルジエント。さすが、アルジエント・ルーポ」

「その名で呼ぶな、ローザ」

俺はリビングの電気をつけると、もう一人、少女がソファで本を読んでいた。

こいつだけは気配がまるで感じられない・・・

「ロツソも居たのかよ・・・。つまり・・・ロツソが居るってことは奥の部屋にロツソ・スカルラットも居るんだな・・・」

すると、部屋のドアが開いた。

やっぱりロツソの双子姉妹の妹が居た。

ロツソ姉妹は一言もしゃべらない。

だが、俺たちは何を考えているのかなぜかわかる。

「まあいい。お前達がそろって俺んとこにだ来るんだ。なんか任務ミッションだろ？」

俺はそう呟きながらキッチンの冷蔵庫を開き、ミネラルウォーターを四人分取り出して、テーブルに並べた。

俺が座ると、ローザ、ロツソ、スカルラットが順に座った。

ローザは運屋、ロツソ姉妹は畏師トラッパー・・・

そして俺は盗屋ヴァラヴァーチャー・・・

まあ、ロッソ姉妹は14歳である。

ローザは教えてくれないが、外見は18歳ぐらいだ。

「で、任務内容ミッションはなんだ？」

「局長の娘さんが誘拐されたわ…」

俺はその言葉に耳を疑った。

「おいおいマジかよ…。でもそんな連絡は入ってないぞ」

「そりゃあ、局長は今、連絡手段をすべて絶っているわ。それに、武偵局員全員のことを信用できないで居るわ。盗聴されているかもしれないし、グルになっている局員が誘拐犯に作戦を知らせるかもしれない…。そう思って、一般人であり、武偵局員の私に伝書鳩で知らせてくれたのよ。で、ロッソ姉妹に連絡して罠を張ってもらったの。そしたら、誘拐犯はまだこの東京都内に潜伏しているのよ」

「なるほどな。ってことは、今のうちに捕まえないとな。都外に逃げられると管轄的に厄介だ」

ちなみに、俺とロッソ姉妹も一般人であり武偵局員である。

俺達を合わせて、20人も一般人を装った武偵局員が居るらしい。もちろん、俺達のようにコードネームが付けられている。

俺のコードネームは<銀狼>
アルジェント・ルーボ

ローザのコードネームは<桜色乃鷹>
ローザ・ファルコ

ロッソのコードネームは<赤乃獵師>
ロッソ・カッチャトーレ

スカルラットのコードネームは<緋乃獵師>・・・
ロッソ・スカルラット・カッチャトーレ

と言ったところだ・・・

すると、隣に座っているロッソが俺の目を見ている。

その目はこう語っている・・・

「その誘拐犯は、仕掛けたセンサートラップに何度も引っ掛かっている。どうやら東京23区を回って様子を窺っているよ。だから、次に出てくるとしたら、首都高速新環状線右回りだと思う・・・」

「なるほどな、なら、今から仕掛けるか？」

すると、左斜めに座ったスカルラットが俺の目を睨んでくる。

その目はこう語っている・・・

「落ち着いて…。確かに早く仕掛けた方が無難だよ。だけど、相手の素性が分からない以上、下手に動かない方がいいよ」

「だがどうする？このままだったら埒が明かんだろ」

「確かにそうね。でも相手のことを知らないよね。まだ顔しかつかめてないし……」

「顔はつかめてんのか？」

「ええ。スカルラット、写真を見せてあげて」

スカルラットはポケットから a u a n d r o i d R E G Z A
P h o n e I S 0 4 を取り出し一枚の写真を写しだした。

俺はその写真の奴に見覚えがある。

「アルカナ・アントニーだ……」

「こいつを知ってるの!？」

「ああ。昔、こいつとは一度だけ闘ったことがあるから知ってるが……、弱い。頭脳戦では強いが実践はカラッキシ弱い。だから、大丈夫だ」

「そう……。なら……ミッションスタート任務開始ね」

「そうだな。制裁の時間だ」

俺は顔に手を翳して、銀狼の仮面を付けた。

ローザ、ロッソ、スカルラットも持っていた仮面を付けた。

ローザ「鷹の仮面、ロッソ「金色の狐の上半仮面とスカルラット」

銀色の狐の上半仮面を付けた。

そして・・・俺たちはローザの運転するメルセデス・ベンツE350カブリオレに乗り、首都高速新環状線右回りに向かった。

首都高速新環状線右回りで待機していると奴の乗ったクラウンが通り去った。

「作戦開始！」

ローザが車を発進させた。

そして奴のクラウンに並んだ。

ローザは屋根を開けた。

そして、俺は銃をアルカナに向ける。

アルカナは驚いて居るようだ。

後ろには少女が眠らされているようだ・・・

恐らく、彼女が局長の娘だろう・・・

「地獄で俺達を敵にしたこと、後悔すんだな！」

俺はベレッタM92Fを放った。

弾丸は、アルカナの頭を貫いた。

俺はクラウンに乗り移り、少女を抱え、クラウンからローザの車に飛び乗った。

クラウンはそのまま、壁にぶつかり、炎上した。

俺たちは東京武偵局に向かい、局長の娘を送り届けて、解散した。

俺は寮に帰り、眠りに就いた・・・

14弾 Secret

翌日、俺は午前から射撃練習シューティングをしていた。

そして、放課後となった。

その途中、アリアとキンジが掲示板を見ていたため、俺も見に行く。

「誰か呼ばれてんのか？」

「あ、薫。実は白雪が呼ばれたみたんだよ」

「ふーん、珍しいこともあるもんだな。成績優秀、生徒会長までやってる白雪がねエー。まさか…アリアの仕業か？」

「なんであたしよ!？」

「だって、白雪がお前の愚痴をメールで送ってきたぞ。泥棒猫×800個ぐらいな。一応、勘違いだらって返信はしておいた」

「そうか」

「キンジ…これはあの凶暴女を遠ざけるいいチャンスだわ!この件を調査してあいつの弱みを握るわよ!」

あらら…悪い顔してますね、アリアさん

「弱みって……。白雪はあれから来てないだろ？」

「来てるじゃない！」

「来てるって…何か危害を加えられたのか？」

「一般校区で渡り廊下から水がかけられたり、どこからともなく吹き矢が飛んできたり！落とし穴に落と

されたり！『泥棒ネコ！』って書かれた手紙が猫のイラスト付きで送られてきたり！！とにかく！あたしは

あの女に嫌がらせを受けてるのよ！」

「あゝ、なるほどね。でもなあゝ、あいつの弱みを握ったとしてもなあゝ……」

と俺がアリアに忠告しようとしたら、俺の携帯がなった。

渋々携帯を取り出し、見ると<綴先生>と表記されていた。

「悪い、ちよつと俺も呼ばれた。んじゃあな」

俺は走ってそのまま、職員室に向かった。

職員室の前のたどり着き、ノックをする。

「入れエ」

と綴の声がしたため、ドアを開けて中に入る。

すると、白雪がすでに居て、こちらの振り向いた。

「あ、薫君!」

「よー白雪。なんで呼ばれてんだ?」

「ちょっとね・・・」

「まあ、いいけど…。綴先生、俺はなんで呼ばれたんですか?」

「実はなあ、星伽を護衛してもらいたんだよ」

「護衛・・・ですか?」

「ああ、ちょっと厄介なことになってな」

「護衛って、俺じゃ練習があって無理ですよ」

俺がそういった瞬間、通気口のフタが落ちてきて、アリアが降ってきた。

わあゝ命知らずだ・・・

「その護衛、あたしがやるわ!」

「は?」

俺がそう漏らした瞬間、キンジが降ってきた。

キンジ・・・かわいそうに・・・

だが、守る気はない。

面白そうだからだ！！

そして・・・二人は綴に捕まり、壁に投げつけられた。

「ん——なにこれえ——・・・あ、なんだあゝ。こないだのハイジャックのカップルじゃん」

綴はアリアの髪を掴んだ。

「これは神崎・H・アリア……。ガバメント二丁拳銃に小太刀の二刀流……。二つ名は『双剣双銃（カドラ）』。欧州で活躍したSランク武偵……。でも、アンタの手柄は、書類上ではみんな倫敦武偵局が自ら

の業績にしちやったみたいだね。協調性が無いせいだ、マヌケえ」

へえゝ・・・流石だな・・・

やっぱり綴には敵わん・・・

「そういえば欠点・・・そうそうアンタおよ・・・」

「わあ——！！！」

アリアがピー音的な雄叫びを上げた。

「そ、それは弱点じゃないわ！！浮輪があれば大丈夫だもん！！」

おゝいアリア、それは明らかに泳げませんと強調しているみたいだぞ

ちょっとイジってみようかな・・・

「そうか・・・アリア。お前泳げないんだな。今度教えてやろうか？」

「よ、余計なお世話よ！！ていうか、泳げるわよ！」

そして、ターゲットはキンジに変わった

「んでえ、こちらは遠山キンジくん。あ・・・」

「俺は来たくなかったんですがアリア（コイツ）が勝手に・・・」

「性格は非社交的。他人から距離を置いているが、^{アイツ}鷺宮とは結構信頼関係がある・・・。強襲科^{アサルト}の生徒には鷺宮を始め、遠山に一目置いている者も多く、潜在的にはある種のカリスマ性を備えていると思われる。解決した事件は、確か青海の猫探しとAWA600便のハイジャック...ねえ、なんでアンタ、やることの大きい小さいが極端なのさ？」

「俺に気かないでください・・・」

「^{えもの}武装は違法改造のベレ・M92F...3点バーストどころかフルオートも可能な通称・キンジモ

デルってやつだよなあ?」

「あ——いや……」

もうキンジの負けだ……

「それはハイジャックで壊されました。今は米軍払下げの安物で間に合わせてます」

「へへえ……^{アムド}装備科に^{イジリ}改造の予約入れてるだろ?」

綴は吸っていたヤバイもんで、キンジの手に根性焼きを入れた。

「うわちっ!」

キンジは手を引っ込めて、手を見ている。

「でえ——どう意味だ?『護衛やる』ってのは」

「言った通りの意味よ」

俺はそろそろ立っているのが疲れた為、壁に凭れかかり、話を聞いている。

「白雪の護衛、24時間体制あたしが無償で引き受けるわ!」

「お、おいアリア!」

「……星伽、なんか知らないけどSランク武偵が^{口ハ}無料で護衛してくれ

るらしいよ?」

「い…いやです!アリアがいつも一緒だなんてけがらしい!」

「白雪…空気読んどいた方が…」

あゝあ…やりやがった…

アリアはキンジに銃口を突き付けた。

「あたしに護衛させないとコイツを撃つわよ!」

「ちょ…!」

「き、キンちゃん!」

俺は干渉しないように見ていると、綴は俺を睨みながら念じていた。

「おいおいこいつら三角関係か?」
トライアングル

と目が語っていたため。俺は親指を立てた。

すると、綴は納得したようだ。

「で、どうすんのさゝ星伽は?」

「じよ、条件があります!キンちゃんも私の護衛をしてツ!24時間体制で!」

「私も…私もキンちゃんと暮らすう——!」

マジでかよ・・・

「んじゃあ。俺は帰りますよ」

俺がドアに手を掛けた瞬間、綴に肩を掴まれた。

「鷺宮あゝ…。お前も手伝ってくれよオ」

「俺は忙しいんです。護衛なら二人に任せればいいでしょ？」

「お前がそれでいいならいいけど…。お前の秘密をバラすぞ？」

「俺の秘密なんてそんな・・・」

「ベレ・M92Fのフル替可能改造……。それ銀……」

「し、仕方ないですね！親友が困ってるのに見ているだけではいけないですよ！やってあげますよ！無料ロハでやります！」

「そうかそうか…。なら頼んだぞオ」

毎回のことながら・・・綴の笑みは恐ろしい・・・

こうして、綴先生の希望おとしにより、俺は巻き添いを食らった・・・

翌日…

俺は1トトラックを運転していた。

助手席には白雪を乗せている。

しばらくして、第三男子寮に到着し、荷台の荷物をキンジと一緒にキンジの部屋に運んだ。

すべての荷物を降ろし終えた俺は、キンジの部屋に向かった。

部屋に入り、簡易金属探知機を取り出し、怪しい物がないか、確認していた。

すると、アリアが背後に来た。

「薫、なにか見つかった？」

「いいや。持ち込んだものにはなんにも仕掛けられていない」

「そう、ならいいわ」

「そう言えば、キンジはどこに行った？」

すると白雪がひょっこりと部屋に顔を出した。

「キンちゃんなら、出かけたよ」

「逃げたな・・・」

「あのバカキンジ！あたし探してくる！！」

アリアは怒り奮闘でキンジの部屋を出て行った。

「騒がしい奴め・・・」

俺は愚痴を垂れた。

そして、俺は全部屋全家具等を調べ終えて、盗聴器サーチも終えた。

俺はリビングのソファに倒れこんだ。

「疲れた・・・」

白雪は料理をしている。

あ、そうだ。

確か、冷蔵庫にミネラルウォーターが入っていたような・・・

俺は勝手にキンジの部屋の冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、飲む。

ふ・・・

すると、白雪が何かを探している。

「あれ？白雪、どうした？」

「ええつとね、砂糖と塩を間違つて持って来ちゃったみたいなの。それで代用できそうなのないかなって・・・」

「砂糖って白砂糖か？」

「うん、そうだよ」

まあ俺も買い物に行こうと思ってたしな・・・

「なら、買いに行くか？どうせ、まだ準備段階だろ？」

「え、でも迷惑じゃ・・・」

「んなことねエよ。俺も買い物に行こうと思ってたし、それにお前一人置いていつてなんかあったらキンジになんて言われるか分からんからな」

「わかった。なら行こう」

俺は白雪を連れて、ムーブカスタムに乗ってスーパーに向かった。

スーパーにたどり着き、白雪の顔が真っ青であった。

「白雪、どうした？」

「財布・・・忘れちゃった・・・」

びっくりさせないでほしいものだ・・・

俺は自分の財布の残金を確認した。

残金10万6千円・・・

余裕である。

「俺が払ってやるから安心しろ」

「ありがとう！」

俺たちは一通り買い物を済ませた。

俺はミネラルウォーター500mlの24本入り段ボール5ケース買った。

俺と白雪は再びムーブカスタムに乗って寮に帰った。

15弾 Cuore Voce

俺はミネラルウォーター5ケースを自分の部屋に置いて、キンジの部屋に行った。

キンジの部屋に入ると、白雪は料理を再開していた。

まあ、護衛の為だから仕方ないからこの部屋に来ているが…

あのバカ二人はなんで二人して出て行くかな！！

仕方ない…

俺は携帯を取り出し、キンジに電話を掛けた。

しかし、通話中だ…

まったく…

そしてアリアに掛けようとした時…

ダシュッ！と包丁がまな板に突き刺さったような音がした。

恐る恐る振り向くと、電話をしながら、白雪がR指定の怒りを露わにしていた。

こ、怖え——！！

多分電話相手はキンジだな・・・

それにアリアと二人つきりなんだろうな・・・

「し、白雪…何か手伝いましょうか？」

「ううん！大丈夫だよ」

白雪は振り向いてにつこりとほほ笑んでくれた。

「そ、そうですか」

白雪・・・恐ろしきかな・・・

そして、キンジとアリアが戻ってきた。

夜食を食べて、俺は自分の部屋から持ってきた小説をリビングのテーブルで呼んで、アリアとキンジはチャンネル争奪戦を繰り広げていた。

ほのぼの家族だな・・・

「ねえキンちゃん、あのね、これ…巫女占札っていうんだけど…。あ、薫君も占ってあげようか？」

「いいよ。占って嫌な結果が出たら不安だし・・・」

てか、正体がばれるのが怖いんだよね・・・

俺はそのまま継続的に小説を読み終えた。

その時、俺は魔剣^{ヤッ}の気配がした。

今・・・玄関の前に居る・・・

しかし、その気配も2分ほどで消えた。

「おい、薫！」

「な、なんだ？」

「アンタ、なんでベレ抜いてんのよ!？」

あ・・・反射的につい抜いてしまっていた・・・

「悪い、ちょっと怪しい気配がしたからついな・・・」

「怪しい気配って？」

「さあな。でも、もうしないから安心しろ」

「そうか・・・」

正直、怪しい気配など日常茶飯事だ。

「んじゃあ、俺は部屋に帰るわ。行くぞアリア」

「なんで私が・・・」

俺はアリアに近づき睨む。

「くうき読めや…」

俺は綴の真似みたいなことをして、アリアの首根っこを掴んで玄関に向かう。

アリアは暴れまくっている・・・

「じゃあ、白雪、キンジ。明日は俺が車で送ってやるから」

「おお、頼んだぞ」

そして、俺はアリアを引きずりながら俺の部屋に入れ、鍵を閉めた。

「ちょっと薰！！なにすんのよ！」

「こつち来いよ」

俺はとある部屋にアリアを招き入れた。

アリアは渋々、部屋に入った。

「なによ・・・これ・・・」

「盗聴・盗撮機器だ。アムド装備科から一式借りてきた。もちろん、キンジも白雪も知らない」

「これ犯罪よ！！」

んなことは俺には関係ないさ。

「大丈夫だ。ばれなきゃなにもない」

「いい加減じゃない・・・」

まあいいや・・・

俺はその近くに置いてあったパイプ椅子に座り、ヘッドホンを付け、もう一つのヘッドホンをアリアに渡す。

アリアも渋々・・・てか自ら付けた。

気になるんだろうな・・・

『男子はみんなアリアのこと可愛いって言うてるけど…私はキライ！！』

その言葉にアリアはピクリと少しだけ反応した。

『なあ…、お前アリアのこと本当に嫌いかな？』

俺はその言葉に興味があった。

憎い子ほど嫌いになれないというような感じだ。

白雪はそう思っているのかな？

『えっ？』

『いや…なんていうかな…。お前、アリアには結構はつきりモノを言うじゃんか。俺にはキョどるくせに。それに…的外れかもしれないが、俺…、お前が自分の感情をこんなに表に出してるの見たことない気がするんだよ。俺やみんなに対しては白雪よりアリアに対しては白雪のほうがなんか本音の白雪ってカンジがして…な。いや…ケンカしないでほしいとは思うけどさ、ケンカしながらも実はある一面で噛み合ったりするんじゃないか？』

ふん…流石カリスマ性ある遠山キンジだ…

まるで教師みたいだな…

確かに白雪は思ってることを出さないタイプだ。

だが、アリアと言い合ってる時は本心を出しているように感じられた。

「流石だ…」

『キンちゃんは…本当に…私のこと、よく分かってくれてるんだね』

『そりゃまあ、ガキの頃から一緒にいたからな。途中ブランクもあるけど』

『きっと私以上に私のことが分かってる。アリア…は私とキンちゃんの世界にまっすぐ踏み込んできた…まるで銃弾みたいに。そして、私の全力を正面から受けても一歩も退かなかった。キンちゃんの言

う通り全体的にはキライなんだけど、ある一面では凄い子だな…っ
てそう思ってるよ』

俺はちらりと横目でアリアを見た。

真剣に聞いていた。

『でも、だからこそ、キンちゃんを取られたくないの。あの子は
魅力的だから』

『取るとか・・・取られるとかって・・・。俺とアリアは武偵同士
で、チームメイトみたいなモノなん
だよ。薫も居るし…。幼なじみのお前とは違うだろ』

『幼なじみ——、そうだよねっ。キンちゃんはずっと昔から私のこ
とを知ってくれてるんだもん。私、そ
れがとっても幸せ。星伽神社を出たことがなかった頃の事からずっ
とずっと覚えてるよ・・・』

「はあ・・・これ以上の詮索は願い下げだね・・・」

俺はヘッドホンを取った。

「そ、そうね！くだらないわ！」

「んじゃあ寝るかな・・・」

「ええ…」

はあ・・・

寝るかな・・・

俺は立ち上がり、寝室に入り、ドア側左上のベッドで眠りに着いた。
アリアもシャワーを浴びて、寝室に来て、ドア側右下で眠ったみたいだ・・・

16弾 Durandal vs Argentolupo

翌日・・・

俺は、キンジ、アリア、白雪をムーブカスタムに乗せて、学校に向かっていた。

運転「俺、助手席」アリア（強制）、後部座席「キンジ、白雪というような配列である。」

無言の車内・・・

いやだなあ・・・一応、音楽は流している。

流しては居るが、なんだか逆に恐ろしい・・・

そのままであつたが、やっと学校に着いた。

三人が降りるのを確認した後、俺は車を駐車場に停めて、教室に向かった。

そして、白雪がアドシアード準備委員会会議に参加しているため、キンジ一人を中に行かせ、俺は廊下で待機していた。

「はあ・・・」

俺は溜息を一つついた。

デュランダル
魔剣はどこから来るかな・・・

まあ、あいつの能力は確か・・・ああ！思い出せん！

すると、会議が終ったらしく、続々と生徒が出てきた。

その瞬間、俺は魔剣ヤツに気配を感じた為、周りを見渡した。

そして、一人のショートヘアの女子武偵が俺と目が合った瞬間、にやりを笑った。

あいつか！！

俺はその女子武偵を追いかける。

しかし追いつけない。

てか、体の古傷がぶり返して来やがった・・・

それは、已む終えず、追跡を諦めた。

そして俺は、キンジと白雪より先にキンジに部屋に帰った。

もちろん、誰も居ない・・・

よし、テレビ見よう・・・

俺は勝手にソファに座り、テレビを点けて、＜ワイドニュース＞を見ることにした。

それから、少しして、キンジと白雪が帰ってきた。

「遅かったな．．．」

「なんでいんだよ!？」

まあ、まともな反応だな。

「どうせ暇だからな」

「だからって勝手に入んなよ．．．。それより、さっきお前の部屋の前に一年のガキが居たぞ」

誰だ？

「どんな奴だよ?」

「ええつとね、暗い青色のストレートヘアの子だよ。背はアリアくらいい」

はいはい董葵ですね・・・てかなんで来てんだよ・・・

「あいつか…。何しに來たんだよ・・・」

俺は愚痴を溢しつつ、キンジの部屋を出る。

すると、俺の部屋の前に鞆を持って、董葵が立っていた。

「なにしに來たんだ？」

「あ、薰先輩！今日は・・・」

「あれだけ来るなと言っただろ…。さっさと帰れ」

俺は恐らく、董葵には初めて見せた表情になってるだろう・・・

銀豹の時の顔に・・・

「す、すみません！でも・・・」

「でもなんだ？」

董葵は脅えていた・・・

「薰先輩、最近なんだかヘンですよ・・・」

ヘン？俺はちゃんとポーカークォフェイスで隠していたのに・・・

「ヘン？どついう風にだ？」

「なんて言うか・・・脅えているというか、周りを警戒しているよ
うな・・・」

確かに、俺は魔剣に脅えているかもしれない。
デュランダル

「はあ...。お前は俺の事、ちゃんと見てんだな・・・」

俺が少し微笑みながら言うと、薰は少し安心したのか、微笑んだ。

「だって私は薰先輩の戦妹ですから！」
いもうと

こいつ・・・けど、頼もしい・・・

だからこそ、コイツを戦徒に選んだ。
アミカ

「そうだったな。よし、今から女子寮まで送ってやるよ」

俺の部屋に居るよりかはそっちの方が安心だ。

「えッ！でも・・・」

「今は俺の部屋に入らなくてくれ。任務中なんだよ」

「あつ！そういうことですか。今、誰かを護衛してるんですね。忘れてました」

堇葵はニツコリ微笑んだ。

「んじゃあ行くぞ」

「はい！」

俺は堇葵を寮に送ることにした。

女子寮は公園を挟んで向かい側にあるため、そんなには遠くない。

が、この公園は夜になると、人っ子一人通らない。

だから、逆に怖い。

今まで何も起きていないのだが、今は魔剣^{ヤッ}と出くわしたりするよう
な予感がしていた。

しかも、気配がする・・・

俺は周りを警戒した。

「薫先輩、どうかしたんですか？」

「い、いや・・・特にはないが・・・」

すると、林の奥からパキツと枝が折れるような音が聞こえた。

俺は、堇葵を庇いながら茂みを見る。

「誰だ？」

「そんなことをしてて大丈夫なのか？」

その声が聞こえてから、あの時の女子武偵が現れた。

「お前は何者だ？」

その女子武偵は不気味に微笑んだ。

「余裕みたいだな」

女子武偵はそう言いながら、剣を取り出して来やがった。

こつちの話も聞いてくれないのかよ・・・てか、その剣見ればわかるんだが・・・

デュランダル
「魔剣・・・」

俺は堇葵を後ろに隠すよう庇う。

「堇葵、お前は下がってる・・・」

俺はベレッタM92F を取り出し、堇葵に言った。

「でも！」

「こいつは俺でも勝てるかわかんねえ相手だ。逃げろって言いたいところだが、もう一人仲間が居ないとも限らん…。だから、俺の目の届くところに居ろ」

堇葵は少し脅えていたものの、真剣な眼差しになった。

「わかりました。負けないでください！」

できれば勝ちたいが、自身はない・・・

でも、堇葵だけは守らねえとな！

「いつでも掛って来いよ、魔剣！」
デュランダル

「言われずとも…いつてやる！！」

デュランダル
魔剣は剣を槍の如く突き出しながら俺に突進してくる。

俺は魔剣デュランダルの足を狙い撃つが中らない。

「チッ！」

俺はベレを放り投げてサバイバルナイフをとっさに取り出し、剣先を刃腹で受け止める。

「やるな貴様」

「そりゃどうも！」

俺ははじき返した。

魔剣^{ヤツ}は後ろに下がった。

「意外と貴様はあいつに似ている」

「アイツ？」

「銀狼^{アルジャン・ルイ}… 名ぐらいは聞いたことはあるだろ？」

それはフランスの呼び方だ。

「それは銀狼の事か？」

「日本ではそういう名らしいな。まあいい・・・」

魔剣^{デュランダル}は剣を構えた。

俺もサバナイを構える。

そして、魔剣^{デュランダル}は切りかかってきた。

俺は咄嗟にサバイバルナイフで受け止めようとしたが・・・騙され

た。

デュランダル
魔剣はすぐさま突き出し体制に入り、俺の肩に剣を刺した。

「グッ！」

俺は激痛に襲われた。

そして、思い出してしまった・・・

魔剣コイツの能力・・・氷だ・・・

剣が刺さった方から流れる血が少しずつだが凍り始めた。

そして、皮膚まで凍り始めた。

「おいおい・・・俺を冷凍にする気か？」

「それもいいかもな。壊してしまえば跡型もなくなる」

ヤバイ・・・

「董葵！逃げろ！」

しかし、董葵はショックのあまりか、震えながら脅えて、動ける様子ではなかった。

「安心しろ。あの子もお前と同じとこに送ってやる」

この野郎・・・

しかし、銃はないし、サバナイも地面に落ちている。

大ピンチだ・・・

すると、シュツと何かが俺の肩に刺さった剣に中った。

デュランダル
魔剣は咄嗟に剣を抜き、逃げて行つた。

おいおい・・・刺さったもんはすぐに抜いちゃだめなんだよ・・・

俺はそう思いながら、何かが飛んできた方向を見る。

そこにはレキがドラグノフを肩から掛けて、部屋に入ってくのが見えた。

「サンキュー・・・レキ・・・」

俺はそう呟き、堇葵に近寄る。

「か・・・薫・・・先輩・・・」

堇葵は泣きながら呟いた。

「安心しろ……。死んじやいない。だから、泣くなよ」

「う・・・うえ———！」

と堇葵は泣きながら、俺に泣きついてきた。

俺は堇葵の頭を軽く撫でてやった。

その後、レキに呼ばれたのかはわからないが、レキが救護科アンビュラスそれに衛生科（メデイカ）の女子生徒3名を連れて来てくれた。

俺は、救護科アンビュラスと衛生科メデイカ3人の応急処置を受け、救急車で武偵病院に運ばれた……

救護科アンビュラスと衛生科メデイカの3名が応急処置をしてくれたおかげで、腕を切断するこ

とだけはなくなった。

しかし、アドシアード出場は已む終えず辞退した。

翌日、腕は使えるが、動かすと少しばかり痛みがある。

まあ、それくらいならいいんだが……

「で、なんで昼休みになって、お前がすぐに来るんだよ」

「あの時、私は何もできなかった…。だから、その償いです」

堇葵よ・・・付きまとうのは勝手だが、殺気を放たんでほしい・・・

俺はそう思いながら、屋上にたどり着いた。

「うわぁ」

堇葵はまるで憧れていたように感動している。

「もしかして、屋上ははじめてか？」

「はい！ずっと行ってみたいとは思ってたんですが、先輩がたくさん集ってるって聞いてたんで行き辛くて・・・」

「そうか…。悪いな、俺たちが占領しちまってるみたいで・・・」

「いいですよ。だってこうして来れましたから」

そう言ってる堇葵はとても輝いていた。

俺はそんな堇葵を見ていた。

「それじゃあ、食べましょうか」

堇葵は重箱を包んでいると思われる風呂敷を見せながら言うてくる。

「そうだな」

俺と堇葵は近くの段差に腰をおろして、堇葵が作ってくれた弁当を

食べ始めた。

董葵の作るモンは本当に旨い・・・

考えてみると、俺が一度死にかけたところを見てんだよな・・・コイツ・・・

心配してくれてんだよな・・・

「ありがとうな、董葵」

俺がそう言つと董葵はうれしそうな表情をする。

「はい！どういたしまして」

と董葵がうれしそうに言った。

しばらく、喋ったりして、教室に戻った・・・

17弾 Familyia

俺は、デュランダル 莖葵を魔剣が捕まるまで俺の部屋に匿うことにした。

まあ、莖葵にそのことを伝えた時は大喜びしていた。

現に、今、うれしそうに夕食を作ってくれている。

俺は部屋に籠って、ベレッタM92Fを改造していた。

あの時、放り投げたせいでどこも彼処も傷だらけになってしまった。というわけで、ベレッタ専用のカメオ装着可能グリップに替えることにした。

てか、カメオを着けるだけで5mm程度太くなってしまった・・・

まあこのくらいは想定していたが・・・

それはカメオ装着可能グリップに替えたベレを手にとってみる。

しかし・・・カメオのデザインがなんで銀薔薇なんだ？

あの椿ってヤツにメールでお任せオーダーメイドして貰ったけど・・・

まあいいか・・・嫌いじゃないし・・・

（ちなみにメアドはあのジェリコを持って来た時、アタッシュケイ

スの上に載っていた紙の裏に書かれていた)

すると、机に置いていた携帯が鳴りだした。

携帯を見ると、親父からであった。

渋々、電話に出る。

「もしもし」

『あ、薫か？アドシアードは・・・』

「悪い…、出れなくなった」

『はあ…。怪我かなんかしたのか？』

「まあそんなところだ」

『実は、椿から聞いている。魔剣に負けたんだろ』

デュランタル

「知ってるなら、聞くなよ・・・」

『すまん…。だがな、お前なら勝てるさ』

「・・・そうかもしれない。だが、事実油断して負けた。そばには後輩が居て、本気が出せなかったからな・・・」

『次は負けるなよ』

「わかってる」

そして、親父は電話を切った。

俺も電話を切って、携帯を置いた。

「進路、考えようかな・・・」

俺はグリップの入っていた段ボールを折りたたもうとした時、中からナイフが一本出てきた。

そのナイフを手にとってみると、何らかの仕掛けがあることに気付いた。

「なるほどね・・・。ここに着けんだな」

俺はそう思って、グリップに隠された隙間に入れてみていた。

ピッタリだ・・・やっぱりこういうことだったんだ・・・

あんがとよ・・・camelilia

俺はベレを銃庫に入れて、鍵を閉めた。

コンッコンッ！（ドアをノックする音）

「薫先輩、食事の用意が出来ましたよ」

「分かった、すぐに行く」

俺はそう言って椅子から立ち上がり、ドアを開けてリビングに出た。

「こりやまた手の込んだ料理なこと・・・」

テーブルには、料亭ででてくるような小さな鍋にすき焼きが煮込まれている。

他にはご飯を始め、味噌汁、ホウレン草と菜の花のお浸し、刺身が並んでいる。

「はい！先輩には早く治ってほしいですから」

「ありがとよ」

「それじゃ食べましょうか」

「そうだな」

俺と董葵は、椅子に座り、夕食を食べ始める。

すると、董葵の携帯が鳴り、董葵は携帯を持って、ベランダに出て行った。

まあ、魔剣^{ヤッ}も今のところ気配もないし、大丈夫だろう。

でも、今日一日は何もなかったからいいものの・・・

アリアとキンジがケンカしたらしいからな・・・

今のキンジだけで白雪の護衛を任せるのは気が引ける。

明日にでも護衛に復帰するかな・・・

俺はそう思いながら、お浸しを食べるのであった。

そして、堇葵はステップを踏みながら戻ってきた。

「なんかうれしいことでもあったか？」

「はい！先輩、明日東京ウオルトランド花火大会があるんです。それであかりちゃん達と行こうと思うんですが良いですか？」

そう言えば、そうだったな・・・

「別に構わないが、念には念を入れて武装して行けよ」

「ということは・・・」

「ああ、行って良し」

「ありがとうございます！！」

堇葵はうれしそうに、ていうかワクワクしている。

まあ、あの子も居るだろうし・・・いいだろ・・・

そして翌日、俺は堇葵をスズキ・GSX1300Rハヤブサの後ろに乗せて、茨城県にある堇葵の実家に向かっていた。

俺と堇葵はブルートゥース内臓のフルフェイスヘルメットを装着していた。

『すいません、わざわざ浴衣の為に・・・』

「気にすんな。どうせ暇だからよ」

『すいません』

しばらく走ると、茨城県竜ヶ崎市にある堇葵の両親が経営している料亭<堇と葵>に到着した。

ヘルメットを取り、バイクに掛けて、和風のガラス戸をガラガラと開けて中に入り、閉めた。

「いらっしやいませ。・・・て水姫？」

最初に居たのは、見た目20代前半の着物姿の女性であった。

「ただいま、お母さん！」

はい！？

この人が堇葵のお母さん！？

「その方は？」

「あ、この人は鷺宮 薫先輩だよ」

「どうも・・・」

気まずいな・・・

「そうですか、初めまして」

「初めまして…鷺宮と申します」

俺は戸惑いながらもお辞儀をした。

「これはご丁寧に…。私は水姫の母で、春姫と申します。わざわざ東京から娘を連れて来てくださり、ありがとうございます」

「いいえ、どうせ暇でしたし」

「そうですか。ちょっと夫を呼んでまいりますので少々お待ちくだ

さい」

そう言つて、春姫さんは奥に行つてしまった。

「お前の母さん何歳だ？」

「女性に歳を聞くのはタブーですよ」

確かにそうだが・・・若過ぎないか？

訳アリつてわけじゃなさそうだし・・・

まあ、世の中にはいろんな人が居るんだと実感した。

しばらく待っていると、奥から春姫さんがまた若い男性を連れてきた。

あり得ないつて・・・見た目20代後半だ・・・

「鷺宮さん、紹介しますね。この人は水姫の父で、晃さんです」

「いつも娘が世話になつてゐみたいで、すまん」

「いいえ、私のほうが食事を作ってくれたりして逆にお世話になってますよ」

「昔から水姫は気が効くからな。まあ、これからもよろしく頼むわ」

「分かりました」

「はいはい自己紹介も済んだところで……、お母さん、浴衣なんだけど……」

「ちゃんと用意してますよ」

「ありがとうございます！それじゃあ先輩、浴衣を取ってきますね！」

「ああ」

堇葵は、春姫さんと共に奥の方に消えて行った。

取り残される男二人……

気まずい……

「なあ……。お前はなんで水姫を選んでくれたんだ？」

「強いて言うなら、目的がハッキリしているから……ですかね。今の世の中、あれだけ真剣に目的に

向かって真面目に取り組む彼女を見ていたら、組んでみたいと思っ
たんですよ」

「そうか……。実はあいつ、昔虐められてて……。最初は軽く考えて

居たんだが、益々、エスカレートして
いって、最終的にはひきこもりに成っちまった。俺と春姫で学校
に行かせようとしたが行かず、途方
に暮れていた時に、アドシアードっていう大会で、お前の事を見か
けてな。それ以来、武偵になるって張り切り出してよ……。ホン
ト、お前には感謝してる。ありがとな」
なるほどな。

だから申請試験の時、あんなに粘ってたのか……

「別に俺は何も……」

すると、ガラガラと和風のガラス戸が開いて、少女が入ってきた。

「たっだいま」とテンションが高い……

「おゝ、夏姫。お帰り」

「ねえねえ外の高そうなおートバイってそちらさんの?」

その少女は俺を見ながら、晃さんに問いかけた。

「そうだぞ。悪戯すんなよ」

「しないよゝだ!それよりお客さん、あのオートバイはお幾らする
んですか?」

「確か新車で買って、カスタマイズしたから総額160万だったと思うけどな」

「そうなんですか！？驚きです！」

「おいおい夏姫、自己紹介しないか！」

「え！？なんで？」

「水姫が通ってる武偵高の先輩だよ！」

「ええー！この人がお姉ちゃんの言ってた鷺宮さん！？すみませんでした！失礼なことばかり言つて・・・」

「いや・・・別に気にしちやいないが・・・」

「私は水姫の妹で、夏姫って言います！どうか姉の事をこれからもよろしく願います」

おゝい、この家族はめんどいほど礼儀正しい・・・

「あ、ああ・・・」

すると、水姫が奥から浴衣を持って、戻ってきた。

「あ、夏姫。今帰ったの？」

「うん、ねえお姉ちゃん、今日はどうしたの?」

「ああ、今日はね、東京ウオルランドで祭りがあって、浴衣を取りに来たの」

「へえ、いいな」

ハア・・・

俺は腕時計を見る。

そろそろ出ないと間に合わないかもな・・・

「おい、そろそろ出るぞ」

「はい!それじゃあ、また今度の週末に帰れたら帰ってくるね」

「おお」

「楽しみにしてるね」

「気をつけてね」

「うん!」

俺は堇葵の家族との絆の強さを感じた。

そして俺は、董葵を後ろに乗せて、寮に帰った・・・

18弾 O g g i

寮に帰り、菫葵は浴衣を着て、東京ウォルトランドの花火大会に行
って、今は俺一人だ。

というわけで、俺は一人寂しく、ソファで小説を読んでいた。

カチカチと時計の針が動く音だけが部屋中に響き渡っている。

あゝ．．．なんだか落ち着くなあゝ

すると、ピンポーン．．．

「誰だよ…。まあムシするかな．．．」

ピンポーン．．．．．ピンポーン．．．ピンポーン・ピンポーン
ピンピンピンポーン．．．×3回

しつこいな．．．

俺は渋々、玄関に行き、覗き穴を見た。

誰も居ない．．．

「悪戯．．．か？」

「悪戯じゃないぞ」

俺は後ろから声がしたため、慌てて振り向く。

そこには、黒髪のツインテールで女子武偵高制服を着た少女が居た。

「誰だ！？てか、不法侵入だぞ！」

「すまない、私は局長より、お主にあいさつしておくようにと言われ、参上した」

「武偵局って・・・まさか、最近入局したくヴェント・アークイラ風驚>って前か？」

「如何にも私だ」

「にしても・・・どうやって入った？」

「私は瞬間移動テレポートを持つ超偵だ。どこであろうと忍びこめる」

こりゃまた面倒な奴が増えたな・・・

「ということは、男子更衣室に忍び込むのか？」

「もちろんだ。・・・ってそんなことはせん！！」

こりゃ天然だな。

まあいじり様によっては面白い、反面、コイツの能力も恐ろしい・・・

「冗談だ。それより、よろしくな」

「よろしく頼む。ちなみに私は情報屋だ。インフォルマ何かあれば、この番号に

連絡してくれ」

そう言うと、ヴェントは、携番とメアドを書いた紙を渡し、瞬間移動^レで帰って行った。

「そう言えば、俺の教えてないな・・・」

俺はそう思い、ヴェントのメアドに、俺のメアドと携番を書いて、送った。

そして、10秒もしないうちに、返信が帰ってきた。

しかも、絵文字を多く使っている。

人は見かけによらないという言葉は、こついつことをいうのだろう。

俺はそう思いつつ、再びソファに座り、小説を読むことにした。

翌日、俺はソファで寝てしまったらしく、毛布が掛けられていた。

「いつ寝ちまったんだろう・・・」

俺は眠気をこらえながら、起き上がる。

時計の針は午前7時00分・・・

てか、今日からアドじゃねえか・・・

綴には、でるなと言われたから辞退したが・・・

正直、出たかった。

去年は総合競技で準優勝というおいしい成績で終わってしまった。

そう言えば・・・堇葵とあったのって、いつだったか？

俺があの時あった一般人は、ロングストレートヘアで眼鏡を掛けた女の子だぞ。

・・・いや・・・待てよ・・・

引籠り〓インドア〓外に出ない〓髪が伸びる。

インドア〓暗い部屋〓暗闇での生活〓目が悪い。

この二つを展開すると・・・

髪は堇葵と一致、眼鏡は掛けていないがコンタクト〓目が悪い・・・

・・・

まさかな・・・

俺はそう思いながら、寝室に顔を出した。

「なんだそりゃ……」

寝室のベッドはすべて制圧されていた……

右下「堇葵」、右上「佐々木」、左下「あかり（アリアの戦妹^{アミカ}）」、左上
「火野……」

なんで寝てんだよ……

俺は頭を押さえながら、寝室から、自室に戻った。

そして、銃庫からカメオを装着したベレッタM92Fを取り出し、
懐のホルスターに容れ、リビングのソファに座り、小説の続きを読み始めた。

そして、時間は午前7時21分……

そろそろ起こすか……

俺はそう思い、寝室に再び入った。

「朝だぞ〜」

と俺は標準のヴォリュームで言った。

それでは起きない……

「起きないと風穴あけるぞ〜！」

すると、火野が一番に素早く起きた。

「よう、火野」

「おはようございます!」

よしよし、火野は起きたな。

「次はサバイバルナイフで喉元を切り裂くぞ!」

その言葉に、残り3人も起きた。

「すぐに制服に着替えて、各自、朝食を取ること!俺は先に行つて
るからな」

と俺は言い残し、部屋を出た。

俺はスズキ・GSX1300Rハヤブサに乗って、武偵高に向かった。

いつもはムーブカスタムで行くのだが、今、ムーブカスタムは車検
整備に出している。

そのため、当分はスズキ・GSX1300Rハヤブサに乗ることになる
だろう。

そして、武偵高に到着した。

18弾 O g g i (後書き)

後ほど、ローザ、ロッソ、スカラット、ヴェントについての説明を20弾にします><

俺は隼を許可を取って、車輛科^{ロジ}の駐車場に停めた。

すると、俺の携帯が鳴る。

携帯を取りだし見てみると、＜神崎・ホームズ・アリア＞であった。

俺は渋々、電話に出た。

「なんだ？」

『今すぐ屋上に来なさい。話があるわ』

「話し？」

俺は屋上を見る。

そこには、携帯を持ったアリアとドラグノフを肩に掛けたレキがこちらを見ていた。

「なるほどね……。分かった、すぐに行く」

俺は通話を切り、急いで屋上に向かった。

そして、屋上にたどり着き、アリアとレキの元に向かう。

「話つてのは、魔剣デユランダの事か？」

俺がそう言つと、アリアは俺の胸ぐらをつかんだ。

「どうして魔剣デユランダを捕まえなかったの！？アンタ、ヤツと会つたんでしょ！？」

「それは無理だつて…。第一、奴が魔剣デユランダだつたとして、どうやって捕まえる？ヤツは魔女だ。あんな奴を安物の手錠で拘束したところで、俺が凍らされるツての」

「でもアンタならヤツに勝てるでしょ！！」

「勝てる？ハッ、誰がそんなデマ流してんだ？俺は一般武偵だ。Sランクであろうと人は人だ。死にたくねえんだよ」

「そう・・・」

アリアはその一言を言つて、手を放した。

「だから、俺に期待しない方が良い。俺はヤツに一度負けたんだ・・・」

「負けたわけではありません。あなたにとって、生きていれば勝ち…。あなたは私にそう教えてくれました」

いつもは喋らないレキが、そういった。

「確かに、俺はお前にそう教えた。だが、あの場合、お前が居なかったら死んでたんだ。負けだよ」

そうやって、俺は切り抜けた。

「わかったわ。アンタにはもう期待しない…。あたし一人で捕まえる」

アリアはそう言って、屋上から去った。

残されたレキは無言で俺の目を見てくる。

「俺だつて、こんなことはしたくはなかったんだが・・・、俺たちが一緒に居たら、魔剣（デュランダール）は姿を現さねえからな。まあ、レキも巻き込まれたんだろうが、あいつを捕まえんのは俺たちに任せろ。お前はお前のやるべきことを頑張れ。んじゃあな」

俺はそう言い残して、屋上から飛び降り、地面に着地した。

こんなのは、泥棒にとって当り前なことだ。

なんていうか、誰も居ないからやってるんだが・・・

俺はそう思いながら、ぶらつくことにした。

そして、時間が経って夕方前・・・

携帯が鳴った。

しかも、緊急時の着メロだ。

俺はすぐに携帯を取り出し、開く。

<星伽 白雪が失踪した。ケースD7で対処せよ>

マジかよ……

バカキンジがミスったのかよ……

俺は急いで、レキに電話を掛ける。

「レキ、単刀直入に聞く！ジャンクション地下倉庫のドアは開いてるか？」

『はい』

「サンキュー！」

俺はそう言っ、通話を切って、ジャンクション地下倉庫に向かった。

ジャンクション地下倉庫まではおよそ1.8km……

走っても10分は掛る。

その間にあの二人が居てくれればいいのだが……

期待しないことにしよう。

そして、地下倉庫^{ジャンクション}に到着した。

やはり、誰かが入って行ったような感じだ。

しかし、地下倉庫^{ニム}には火薬や弾丸などの国家的危険物が山のようにある。

ヘタしたら、学園島の半分が粉々だろう・・・

というわけでベレは抜けない。

だから、ダイヤモンド刃のサバイバルナイフを取り出し、忍び足で中には居る。

「やれやれ・・・。ここには来たくなかった」

俺は心の声が少し漏れてしまった。

さつさと、白雪を見つけて、連れて帰らないとな・・・

俺は不意に周りを見てしまった。

KEEP OUT DANGER などと書かれたテープやカ

ラースプレーで書かれた箱がたんまりと積まれている。

見たくなかった・・・

すると、微かに靴底がすれるような音がした。

しかも、鎧のような金属音がする。

魔剣^{ヤッ}がいる！

俺は携帯を取り出し、カメラ機能を立ち上げ、レンズを危険物箱山積みの死角に向ける。

そこには白雪がいた。

奥には魔剣^{ヤッ}が居るのだろうが、闇で見えない。

「どうして私を欲しがるの、魔剣^{デュフンダル}。大した能力もない・・・私なんかを」

白雪の声は怯えきつている。

やっぱり、あいつが主犯か・・・

襲われた時、声で分かっていたが・・・

「裏を、かこうとする者がいる。表が、裏の裏であることを知らずにな。和議を結ぶとして偽り、陰で、備える者がいる。だが闘争では、更にその裏をかく者が勝る。我が偉大なる始祖は、陰の裏——すなわち光を身に纏い、陰を謀ったものだ」

「何の、話・・・？」

「敵は陰で、^{ステルス}超能力者を錬磨し始めた。我々はその裏で、より強力な^{ステルス}超能力者を磨く——その大粒の原石——それも、欠陥品の武偵にしか守られていない原石に手が伸びるのは、自然な事よ。少々、鷲宮という奴が邪魔だったから消そうとは思ったが、邪魔が入ったがな。不思議がることではないのだ。白雪」

なるほどね・・・やっぱり、俺たちの罠に引っ掛かったな・・・

「欠陥品の、武偵・・・？誰のこと？」

その声は怒りが染み出していた。

「ホームズには少々手こずりそうだったが——あの娘を遠ざける役割を、私の計画通りに果たしてくれたのが、遠山キンジだ。ヤツが欠陥品ではなくて、何と云うのだ？」

「キンちゃんは——キンちゃんは欠陥品なんかじゃない！」

「だが現にこうして、お前を守れなかったではないか。それに、もう一人、厄介なヤツが居たが・・・お

前を守るほどの力はなかったみたいだな」

そろそろ出るかな・・・

「そ、それは・・・」

「そのくらいにしとけよ、デュランダル魔剣！」

「か、薫君！」

「これは驚いた…。よくあそこまで凍らせて無傷とはな・・・」

「ハッ、たったあんぐらいで、死んでたまるか。俺はその原石を横取りしに来ただけだ」

「横取り？まるで昔逢ったアルジャン・ルー銀狼のようだな」

「そうそう、お前はそいつに負けたんだよね？デュランダル魔剣」

「なぜ知っている！？」

デュランダル魔剣の声から余裕が消えた。

「さあな。だが、俺は俺で、キンジはキンジ、アリアはアリア・・・。
だよな、お二人さん」

俺がそう言つと、後ろの暗闇から、アリアとキンジが現れた。

「目的は違つけど、まあ、白雪を奪還するのは一緒だな」

「まったく、なんで薫が一番乗りなのよ……」

「キンちゃん！アリア！」

白雪は少々、安心したみたいだ。

しかし、暗闇に白雪が吸い込まれていく。

「そこに居るんでしょ！？魔剣！未成年者略取未遂の容疑で逮捕するわ！」
デュランダル

「ホームズか……」

これでキャストは揃ったな。

「で、魔剣さんよ。素直に姿を現せよ」

俺は銀狼の眼差しで暗闇を睨む。

しかし、静寂が続いた。

「逃げたわね……」

「そのようだな。んじゃあ、奥に行くかな」

俺は一步踏み出そうとしたが、何か違和感を感じた。

「おいおい……洒落になんねえよ……」

俺はアリアの首のあたりのピアノ線……正確には恐らくTINKワ

イヤー……

首すら切れる優れもんだ。

俺はダイヤモンド刃のサバナイで切った。

恐らく……………

俺はアリアの首元ぐらいに張られたピアノ線の上から下へサバナイを振り下した。

すると。プッン……プッン……プッン……と、俺、キンジ、アリアの首元の高さ位でピアノ線が切れるような音がした。

「キンジ、アリア。これは宣戦布告だ。死にたくなかったら帰れ」

これは本気出さないと、殺られる。

「今更帰るか！俺のせいで白雪がさらわれたんだ……」

キンジは俯く。

「それなら俺も同じだ。ヤツの能力を甘く見過ぎていた……」

「薫、デューランドルアンタ、魔剣について何か知ってるんでしょ？」

はあ……話しても損はない……か。

「歩きながら話してやる」

俺はピアノ線に警戒しながら、奥に進むことにした。

今から3年前……

俺は泥棒時代、フランスのとある屋敷に忍び込んだ。

俺は毎度のことながら計画性がない。

突飛的な思考しかないのだ。

だが、俺にとってはどうでもよかった。

とにかく、金が必要なんだ。

だから、俺はこの道に進んだ……

その屋敷に忍び込んで俺は、デュフンタル魔剣と出逢った。

「お前はいったい何者だ？」

俺がそう問いかけると、魔剣は不気味な笑みを浮かべた。

「名乗る必要はない……。アルジャン・ルー銀狼、どうせ貴様はここで消える運命

なのだからな」

「つまり……、俺を消すってことか？」

「そういうことだ」

魔剣^{ヤッ}はそう言つて、魔剣を取り出し、剣先を俺に向けて構えた。

もちろん、俺はドロで何も武装という武装を持っていなかった。

かといって逃げるほど俺はビビりでもないからな、コートで闘った。

魔剣^{ヤッ}は、俺に剣先を向けたまま突っ込んできた。

俺は咄嗟に、コートを盾にして、避けた。

そして、そばにあつた金属類を粒子分解して、ナイフに再構成した。

そのナイフを扇状に広げ、魔剣^{ヤッ}に向けて投げた。

それを回避しているうちに、魔剣^{ヤッ}の後ろに回り込んで、気絶させ、俺はまんまと逃げた。

そして、俺はいまに至つたわけだ……………

「ならアンタは銀狼ってこと!？」

アリアが俺に問いかけてきた。

「そうだよ。そして俺は去年、日本で盗みに入った美術館でキンジに捕まって、務所に入った。が、司法取引で俺は東京武偵高に千葉武偵高より転入してきたことになっている」

アリアは訳が分からないような表情である。

「でもまあ、今は何もないぞ。今は一般武偵高生だ。普通に接してくれ」

「そうじゃないのよ……。まったく想像と違ったから吃驚してるだけよ」

コイツが想像していた銀狼ってどんな奴だったんだろう……

しばらく歩いて、下の階につながる梯子の掛った空調ダクトから何かくん——ん——！>というような声が聞こえた。

俺はダクトの格子蓋を外し、飛び降りた。

キンジとアリアも梯子を使って、降りてくる。

俺はゆっくりと奥に進むと、白雪が口を布で塞がれ、壁に立ったまま鎖で拘束されていた。

「白雪！」

キンジは白雪に走り寄る。

俺はベレを抜き、アリアに瞬信号ウインキングで＜警戒＞するように言った。

アリアもガバを抜き、警戒する。

「薰！！来てくれ！」とキンジが呼んだため、行ってみる。

「どうした？」

「鍵がしてやがる！お前ならどうにかできるだろ？」

俺はその言葉に、すぐには答えられなかった。

「無理・・・だよね？薰君でも・・・」

白雪がそう言った。

「…ああ。これは俺の専門外だ。三重施錠トリプルなんて始めて見たっての・・・まあ、やってみる」

俺はピッキングツールを取りだし、最初のカギ穴にチャレンジした。

だが、思ったより複雑だ…

「この調子じゃ、一日かかるな・・・」

すると、何かが壊れたような大きな音がして、水の音が聞こえる。

しかも勢いよく流れてきたし……

「おいおい……この臭い……海水だ」

「どうすんのよ!？」

「アリア、キンジ！お前等は先に行って魔剣アイツから鍵を掏って来い！
それまで俺がやっておく！」

「でもどこ行っただのかわかんねえぞ！」

「キンちゃん、恐らくハツチを開けたような音がしたから、多分、ダクトを通って上に行ったんじゃないかな？」

「ダクト？」

「キンジ！ここが開いてるわ！」

「じゃあ早くいつて来い！」

俺はキンジに言った。

「分かった！出来るだけ早く戻る！」

アリアとキンジはダクトを通して、上の階に行った。

「はあ…。白雪、ほんとにキンジと居たかったんじゃないのか？」

「…うん。だけど、キンちゃんには迷惑かけたくないし」

俺ならいいのかよ……

「まあ、そうだな。俺もキンジに迷惑かけたくないし…。というわけで、ちゃっちゃと開けちまうか……」

「でも無理なんだよね？」

「盗人をなめるなよ、白雪」

俺は白雪にそう言いながら、ピッキングツールをあと二つ取り出し、3つ同時に刺した。

そして、あっという間に開けた。

「流石だね。でも、なんでキンちゃんとアリアには言わなかったの？」

「俺が居たら恐らく魔剣デュランダルは現れないだろう？だから、敵を誘い出すの為に二手に分かれた方が良く、というわけで、行くぞ白雪」

「うん！」

そして、俺と白雪はダクトの梯子を上り、上の階に上がった。

「ここは確か、銃保管庫だったよな？」

「うん。今は使われていないけど・・・」

「そうか・・・」

俺は昔、ここにも忍び込んだような気がした。

だが思い出せん・・・。

「どうかしたの？」

「いや、ちょっとな。それよりキンジとアリアはどこ行っただ？」

すると、奥の方からキンジとアリア、それに、ここに居るはずの白雪の声がした。

「こっちだ！」

俺は白雪を引き連れ、奥に向かった。

そこにはキンジとアリア・・・白雪がいた。

「キンジ！アリア！そいつから離れろ！」

俺はベレをアリアの近くに居た白雪デュランダルに向け、放った。

魔剣は旨く避けた。

「キンちゃん！アリア！大丈夫？」と本物の白雪が二人に歩み寄った。

「白雪！なんで・・・」

「てことはあつちの白雪は魔剣か」

「そうだよ！まったく…。まあいい・・・」

気付くと、さっきまで居た魔剣は居なくなっていた。

「逃げたか？」

「フフツ、なぜ逃げる必要がある？お前たちは私の素顔を知らない」
その声は闇の中から聞こえ、そして、周りがどんどん凍りつき始める。

「残念だったな、魔剣？俺はお前の姿を見たことがある」
デュランダル

「貴様はいつたい何者だ？」

気付くと、空気の水分まで凍り、銀氷が舞い始めた。
ダイヤモンドダスト

「名乗る必要はない・・・だったよな、魔剣」
デュランダル

俺はベレの銃口を向ける。

「まさか銀狼か？まさか再び会えるとはな…。まあいい、今お前と闘う気などない」

「

「薫君、下がって。ジャン又は私一人で斃すから。だから、キンちゃんとアリアを守ってあげて」

ふざけんな…。って昔の俺なら叫んでたけど、今は白雪の言うことを聞いてやらないとな…

「わかった。だが、ヤバくなったら、無理矢理でも割り込むからな」

俺は白雪の目を見て言った。

「わかった」

白雪は少し不安なのか、震えている。

俺は振り返り、キンジに近寄る。

「キンジ、お前はアリアを守ってる。俺はあっちに回ってくる」

「分かった。作戦は…。アリアに任せる。いいな？」

「分かったわ！」

俺は急いで、ジャンヌの居る側に周りこむ。

ここは保管庫がたくさんあるため、回り込むのは簡単だ。

しかし、さっきから、白雪の刀と魔剣のぶつかり合う音がさっきから響いている。

「急がねえとやばいか・・・」

俺は保管庫に背を着けて、覗く。

すると、ヤツが居た。

久しぶりに魔剣の姿を見た。

「相変わらず、てか、あのまま大きくなってるだけじゃんか・・・」

俺は、奥に居るアリアとキンジを見る。

まだ・・・か。

まったく、白雪も星伽の掟を破る奴らに逢ってしまったよ・・・

嫌うなよ・・・キンジ！

俺は昔、星伽に侵入したとき、白雪と闘った。

もちろん、俺が勝ったが、まさか、武偵高で再会するとは思わなかった……

ばれたときは互いに口止めしていたが、もう、良いだろ。

すると、ジャンヌが技を放とうとした時、アリアとキンジが動いた。俺もベレの仕込みナイフを出して、走りながらジャンヌに手裏剣の如く、投げた。

ジャンヌは素早く反応して魔剣で弾いた。

その際に、アリアのコルガバとキンジのバタナイを二人はジャンヌに突き付けた。

「ジャンヌ！未成年者略取略取の罪で逮捕するわ！」

「フツ！武偵ごときが……。この私を捕まえられなくても思っているのか？」

「なに？」

俺は二人に足元を見る。

凍り始めている。

「二人とも！！ジャンヌから離れろ！」

俺の言葉に、キンジとアリアは気付き、離れた。

「チツ！これじゃ近づけねえ！」

「フツ、武偵法9条、武偵は人を殺せない。だが、私は殺せる！」

ジャンヌはなぜか俺に魔剣を槍の如く突き出し、突っ込んでくる。

俺は、白雪を一瞬見た。

白雪は意味がわかったみたいだ。

そして、俺は魔剣を脇で挟み、固定する。

「私の力を知ってて・・・」

「知ってるからこそ、動きを封じて、止めを緋巫女様に刺していた
だこうと思っただけ。白雪！」

すると、白雪は走ってきた。

「緋緋星伽神！」と言いながら、刀をしたから上に振り上げて、魔
剣を真つ二つにした。

ジャンヌは絶句している。

俺は懷のサバナイを取り出し、ジャンヌの首元に突き付ける。

「逮捕だ」

そしてその後、俺は教務科に連行されるジャンヌと共に護送車に乗って、収容所に向かった。

ホントはこの後、アドの閉会式なのだが、俺は一般武偵局員の為、犯人護送を優先しろと言われたのである。

「あゝあ……。ジャンヌのせいで、閉会式に出れなかったじゃねえか……」

「なら行けばよかっただろ」

「そうはいかなのよね、アルジエントは……」

「やっぱりお前か、ローザ」

「ええ、アド期間中、武偵高に雇われてたから」

「だろうとは思っていたが……」

すると、ジャンヌの視線が俺に来る。

「何だよ?」

「貴様はいつたい何者だ？」

「東京武偵局特殊任務部隊の一人だ。まあ、それほど偉い立場ではないがな」

「怪盗が武偵局員とは前代未聞だな」

ジャンヌは微笑みながら言った。

「ジャンヌ、俺は怪盗じゃない！泥棒だ」

「どう違う？」

「そ、それは……。とにかく、俺は怪盗じゃない！」

すると、護送車の無線から、武偵局の通信コネクトが入る。

ローザが出たが、すぐに俺に回してきた。

「なんですか？」

『ジャンヌ・ダルクを局長室に連れてこい』

「了解」

そして、無線は切れた。

相手は局長だ。

どうせ、お得意の司法取引とやらで仲間を引き込むのだろう。

俺はそう思い、ひと眠りした。

眠って大体30分だろう・・・

武偵局に到着した。

俺はジャンヌを連れて、武偵局長室前にたどり着いた。

局長室では、手錠をしたものを入れてはならない。

というわけで、俺はジャンヌの手錠を外した。

「こんなことをしていいのか？」

「ああ、お前が局長に勝てるわけないからな」

それはそう言っつて、ドアをノックする。

「入れ」と帰って来たので、中にジャンヌを連れて入った。

「そこに座ってくれ」と局長は応接用のソファに座るように勧めた。

「ジャンヌ、座れ」

俺は近くの壁に凭れかかった。

ジャンヌは言われたとおり、ソファに座った。

「やはり、お前だけだな。私に警戒してソファに座らないのは・・・
薫君」

「別にいいだろ。それより早くしてくれ、俺は忙しい」

俺は言葉と矛盾するようにあくびした。

「そうか、ならば単刀直入に聞こう、ジャンヌ・ダルク30世。君は武偵高に入るつもりはないか？」

「ちょ！何言ってんだよ！」

「少し黙っててくれるかい？」

局長がそういうと、言葉が出せなくなる。

ていうか、息苦しくなる。

その為、黙るしかない・・・

「私は構わん。通ってみるのも悪くはなさそうだ」

「そうか、なら、明日からでもフランス武偵高よりの転入生として
武偵高には連絡しておくよ。今日は
薫君の家に泊まるといい」

ふざけんな——！！と言いたいが、息苦しくて反論できねえ！

俺は落ち込むしかなかった。

というわけで、ジャンヌは今日、俺の部屋に泊まることとなってしまった……

20弾 SDA squadra

ローザ・ファルコ(?)

ローザ・ファルコ

コードネーム<桜色乃鷹>

運屋

年齢不詳だが、見た目は18歳。

口調は普通であり、容姿も普通。

女子高生のような見た目であるが、ドラテク運転技術は相当なものだ。

噂では、元Sランク武偵で、武偵局にはエリート入局らしい。

本名は成瀬桜。
なるとせ 桜

ロッソ・カッチャトーレ(14)

ロッソ・カッチャトーレ

コードネーム<赤乃獵師>

トラッパ

獵師

無口で、スカルラットと共に居る。

スカルラットの双子の姉である。

トラップに関しての設計は凄腕である。

本名はメアリ・ウォルコット

ロッソ・スカルラット・カッチャトーレ(14)

ロッソ・スカルラット・カッチャトーレ

コードネーム<緋乃獵師>

トラッパ

獵師

ロッソと同じで無口である。

ロッソの双子の妹である。

トラップを仕掛けることに關しては凄腕である。

本名はメリア・ウォルコット

ロッソ姉妹はロシアの工作武偵であったが、薫の支援もあって、東京武偵局に引き抜かれたのである。

ヴェント・アーキライ（15）

コードネーム＜風鷲＞
ヴェント・アーキライ
インフォルマ

情報屋

武偵局に入っただばかりの新人。

忍者としての素質と瞬間移動を旨く利用して、テレポート情報を集める。
以外に武偵高に居た。

1年B組に所属しており、董葵とは違うことはあまりない。

その為、はるかぜ みお薫の事がばれる心配はないだろう。

本名は春風美桜

21弾 Riunione

そして、俺とジャンヌは俺の部屋に誰にも見つかることなく、何とかが入ることができた。

「はあ。なんで自分の部屋に入るのにこんなに緊張しなきゃいけないんだよ・・・」

「そんなこと、私が知るわけがないだろ」

それもそうだが・・・

すると、すぐにチャイムが鳴った。

「ジャンヌ！この部屋に隠れてろ！」

俺はジャンヌの腕を引き、寝室に押し込んだ。

「い、いきなり何をする！？」

「お前がこの部屋に居たら、俺までイ・ウーの関係者に思われんだろが！」

「だが、そこまで手荒く扱うな！」

「分かったから！とにかく黙ってる！」

ジャンヌは今にも俺を凍らそうと睨んでいる。

「あとで、なんか買ってきてやるから」

すると、ジャン又は了承したみたいに睨むのを止めた。

「仕方ない、今回だけはそれで手を打ってやるう」

意外に女の子らしかったことに少し驚いた。

俺はさっきから鳴りっぱなしのチャイムを鳴らす張本人の元に向かう。

「はい・・・」と俺はドアを開ける。

そこには、誰もいなかった。

「椿か・・・」

俺はそう呟き、下をみた。

やはり、頼んだ女子武偵高制服とCZ100と折れた魔剣を改良してもらったエストックが置いてあった。

そしてもちろん、`<by camellia>`と書かれた紙があった。

あの・・・早すぎませんかね・・・

俺はそう思いつつ、その服と銃と剣を持って、部屋の中に戻った。

「もう出て来ていいぞ」

と俺が云うと、ジャンヌが寝室から出てきた。

「もういいのか？」

「ああ。それより、ほら。お前の制服と装備品だ」

俺はそう言いながら、服とCZ100、エストックを渡した

ジャンヌは驚いたように目を見開きながら受け取った。

「早いな・・・」

「俺も驚いた。だが、これで武偵高に通うための準備は整った。ホントに行くんだな？」

「なんで聞くんだ？」

「もし、何かあっても手助けはできないぞ」

「そんなの、最初から期待などしていない。そもそも貴様に心配されるほど私は弱くはない」

ジャンヌはそう言いながら、寝室に入って行った。

なんだか、結構強がりというかなんというか・・・

まあいいか・・・

シャワー浴びよう・・・

そして俺はシャワーを浴びて、寝室ではなく、改造専用室にある仮寝台で眠った。

しばらくして、懐かしい気配がした。

「理子か？」

俺は目を瞑りながら、行ってみる。

「そっだよ！さっすがさっきー！」

「あんまり大声出すなよ…。ジャンヌが寝てるんだからよ」

「なんでジャンヌがさっきの部屋に居るのかな？まさか食べちゃった！？」

「んなわけあるか…。てか、俺の体質知ってんだろ」

「さあ、なんだったけな？」

白々しい……

「まあいい、用件だけ言って帰れ」

正直、ものすごく眠いんだ。

だから、目を開けることすらしたくない。

「つつめたいな〜！いいよ〜だ！ええつとね、明日から武偵高にまた通うから、詳しいことは明日の昼休みにでも話すよ。それじゃあ、お休み〜！」

と理子は言つて、気配が消えた・・・

そして、再び眠りについた。

翌日、起きて寝室に行くと、ジャンヌはすでに居なかった。

ベッドの上には置き手紙が置いてあった。

<昨日は世話になった。この借りは必ず返す>
と書かれていた。

「一言掛けて行けよ…。まったく困った奴だ」

俺はそう言いながらも、少し安心した。

そして、俺も身支度を済ませ、バス停に向かった。

バス停にはキンジが居た。

「キンジ」

俺がそう言つとキンジは振り向いてくれた。

「おお、薫」

俺はその声で少し違和感を感じた。

なんだか、学校に行くのを躊躇っているような・・・

「キンジ、理子が帰って来たのか？」

「なんで知ってる？」

「あいつからメールが来てな、＜明日にでも学校に顔出す＞って」
実際のところ、夜中にあいつが俺の寝ているところに来たんだがな・・・

「そうか」

「まあ、何かあった協力してやるよ」

俺はキンジの肩を軽くポンと叩いた。

そして、バスに乗り込み、武偵高に向かった。

俺とキンジは武偵高にたどり着き、教室に入る。

そこにはすでにアリアと理子が居た。

俺は席に座り、鞆を掛けてノートを取り出し、予習を始めた。

しばらくして授業が始まった。

一時限目：世界史。 二時限目：数学。 三時限目：国語。 四時限目：
英語。

すべて、居眠りで叩かれた。

まあ、何時もの事だが……

成績は上位3位以内に入ってるため、成績が悪いなどと言われたことがないが、授業態度でよく注意される。

そして授業が終わり、俺は屋上に向かった。

屋上には誰も居ない為、その辺に仰向けに寝転んだ。

空は晴れと言えない様な雲行きである。

てか、雨が降るんじゃないか？

俺がそう思っていると、入り口のドアが開いた。

「来たか…。遅いぞ、理子」

「ごめんごめん！みんなとしゃべってたら忘れちゃってた」

おいおい、迷惑な奴だ。

「で、詳しい話ってやつを聞こうか」

俺は起き上がり、立ち上がった。

「実は、盗んでほしい物があるんだ」

「盗む？俺の専門外だが・・・」

こいつには銀狼と教えていないからな。

へタに俺の正体をばらすわけにもいかない。

「えゝ、協力してくんないの？」

「だって、武偵であつても犯罪だ。てか、どこに盗みに入るんだ？」
すると、理子は真剣な眼差しに変わった。

「ブラドの屋敷だよ」

俺はその前に聞き覚えがあった。

ブラド…。

確かイ・ウーのNO・2＜無限罪のブラド＞。

ドラキュラ伯爵で、イ・ウーの情報では銀、ニンニクなど吸血鬼の嫌いなモンを克服していて、再生能力があり、不死身だ。

だが、魔臓と呼ばれる呪いが掛けられた目玉模様が四つ体に記されている・・・というのが、俺の調べることのできた範囲である。

「誰だそれ？」

「イ・ウーNO・2…。嫌なら来なくてもいいから」

そう言うと、理子は俺に背を向けて、教室に戻って行った。

「正直、あいつとは面識あるから逢いたくないんだよね…」

というわけで、俺は行くのを止めた。

そして、午後の授業が始まり、俺は強襲科アサルトの闘技場コロッセオに居た。

てか、呼ばれた。

蘭豹に・・・

「蘭豹先生、今月もやるんですか？」

すると、蘭豹は背中に装備してあった長刀を取り出した。

「もちろんや。まめに本気出さんな鈍ってまうからな」

「はあ、分かりました。いつものようにお相手しますよ」

俺はサバイバルナイフとベレッタM92F<銀薔薇カメオ仕掛けナイフ装着>を取り出した。

「お前、おもしろいモン持つてるやんけ。装備科アムドに改造イジリ入れたんか？」

「そんなことはしませんよ。ちょっと知り合いが趣味でやってるものでね」

「まあええわ。ほな、始めるで！！」

蘭豹はいきなり切りかかってきた。周りの生徒達ギャラリが騒がしくなってきた。

俺は冷静にサバイバルナイフで受け止め、ベレで蘭豹の腹部を撃った。

しかし、寸前に蘭豹は避けた。

「なんや、何時もより火力が弱いやないか。弾間違うたんか？」

「んなわけないでしょ！まだ慣らしが完全じゃないんです。しかも、ちよつとアレに換えようと思いましてね」

「アレ？まあええわ。ほな、次で決めたる！！」

蘭豹は俺に走ってくる。

俺も蘭豹のところまで走る。

そして、蘭豹の長刀と俺のサバナイがぶつかり合う。

キーン！というような金属がぶつかり合う音と火花が散った。

俺は片手にベレを持っているため、片手で受け止めているような感じだ。

「流石ですね…。前より重く感じますよ。あ、まさか体重増えました？」

「ほほ、驚宮あ。死にたいらしいな」

すると、更に体重を掛けてきた。

重い……

「そんな事実を言われたからって怒らないでくださいよ」

「ホンマに死にたいみたいやな!!」

更に体重を掛けてきた。

仕掛けるなら今かな……

俺はそう思い、体を90°捻った。

すると、蘭豹はそのままサバナイから長刀が滑り落ち、体重がかかった為か、地面に刺さった。

「終わりです」

と俺がベレに銃口を蘭豹の頭部に突き付けた。

しかし、蘭豹はすぐに俺の腕を掴んで、捻り、俺の体は一回転して、仰向けで倒されて、蘭豹が馬乗りになり、手を鳴らした。

「覚悟はできてるよな？」

「悪いんですが、今回も引き分けですよ」

俺はベレの仕込みナイフを出して、蘭豹の首に突き付けた。

「そりゃ卑怯やろ……」

「武偵はいかなる時も、先の先を読め……ですよ」

すると、蘭豹は立ち上がり、床に刺さった長刀を抜いて、背中の鞘に戻した。

俺も立ちあがる。

「言っておくが、体重なんぞ増えとらん。逆に減ってわ!」

と一言だけ言っコロッセオて、闘技場から立ち去った。

あの言動は嘘じゃない。

まさか、長刀の重量アップしたのか？

それなら恐ろしい・・・

あんな長い刀だから余計に怖い・・・

遠心力・重力を利用すれば、近づくことも防ぐこともできないだろう。

桑原桑原・・・

俺は闘技場コロッセオのガラス張りのギャラリエリアを見ると、一年全員が見ていたみたいだ。

幸い、2・3年生はいない。

董葵・火野・間宮も見ていたみたいだ。

こつちを眼見してやがる。

俺はベレの仕込みナイフをしまい、懷のホルスターに直し、サバナイも懷に直した。

そして、寮に帰った。

寮に帰り、入ると、なぜかジャンヌが居た。

「おお、遅かったな」

「なんで居るんだよ・・・」

「居たら都合の悪いこともあるのか？」

「別にねえけど・・・ハア」

俺は溜息を吐き、ネクタイを緩ませ、ブレザーを脱いだ。

そして、そのブレザーをハンガーラックに掛ける。

「そんなに落ち込むな。幸せが逃げるぞ」

お前のせいで逃げてる気もするんだが・・・

「まあいい。それより、お前の知ってるイ・ウーのメンバーを教えてくださいませんか？」

「何故知りたい？」

「いいから教えろよ」

「教える権限などない」

俺は、ソファに座っていたジャンヌを押し倒し、馬乗りになりサバナイを喉元に突き付ける。

「教えろつつてんだよ…。どうせ、フランスの屋敷で、俺をお前に襲わせたのもあいつなんだろ？」

すると、ジャンヌは笑みを浮かべた。

「やはり気付いていたのか。流石だな、アルジャン・ルー銀狼」

「早く、お前等のメンバーを教えろ！！」

「私を殺すか？元イ・ウーN O . 2、アルジャン・ルー銀狼」

その目は、覚悟を決めているというか、どうせ、いつかは消されるというような考えを持っているような眼であった。

「ハア…。もういい」

俺はジャンヌから離れ、サバナイをホルスターにしまった。

「残念だったな、殺すチャンスはあったというのに・・・」

ジャンヌは少し、俯いていた。

「なら、なんで落ち込む？」

「どうせ裏切り者は消されるような世界だ。まだお前に殺された方がジャンヌ・ダルク30世として誇り高い……」

「ざけんなよ、ジャンヌ。お前はもうイ・ウーのメンバーじゃない。今は武偵高生だ。お前が俺と同じ学校に居るのなら、お前は仲間だ。さっきはつい頭に血が上った。すまない」

アルジャン・ル
「銀狼……」

「その名で呼ぶな。俺は今、鷺宮 薫だ。ドロじゃない」

「しかし今更言い方を替えるのはちょっと恥ずかしいのだが」

恥ずかしい割には真顔だな

「別に鷺宮が薫って呼んでくれればいい。俺だってジャンヌって呼んでるだろ」

「そうだな……。よし、ならば今度から貴様を薫と呼んでやろう」

うわー上から目せーん……

「それでいい。それより、ジャンヌの寮の部屋は決まっていけないの

か？」

「いいや、決まったぞ。あそこだ」

とジャンヌが指さした先は・・・

「コネク通信科中空知と相部屋か？」

「なんだ知っているのか。なら話が早い。そうだ、縁なつてあの部屋になった。なにかあつたらモールス信号で知らせてくれ」

「まあ、向かいだからな・・・」

てか、中空知に部屋つて通信機器がたくさんあつて、足の踏み場もないほどにコードが床一面に蔓薔薇の如く茂っている。

一度あの部屋に行った時、中空知とは目を合わせてもらえなかった。

あいつだけは苦手というか、相手するのがめんどくさい。

だから、あの部屋には二度といかず、用事があれば電話で済ませる。

それが得策だ。

「それでは帰るとするか」

とジャンヌは立ち上がり鞆を持って、玄関に向かう。

そして、ドアノブに手を掛けて、振り返った。

「そう言えば、ブラドの魔臓の目の模様の位置を薫には教えてなかったな」

「なんで教える必要があるんだ？」

「お前は、ブラドを捕まえるのだから、イ・ウーのメンバーを知りたがった…。違うか？」

流石といったところか……

まあ知ってて損はない。

「念のために教えてもらおう」

「うむ、少し待ってろ」

とジャンヌは再び部屋に戻り、鞆から紙とペンを取り出し、ブラドの絵を描き始めた。

俺もよく、犯人の似顔絵を描いたりしていて画力はあるつもりだ。

「よし、我ながら力作だ」

とジャンヌが自信満々で見せてきた絵……

小学生以下の画力だ……

俺が無言で見ている……

「そんなに私の絵が上手いか？」

「い、いやその・・・」

「そんなに遠慮するな、たかが絵の一つくらいいつでも書いてやる」

コイツは本音言ったら、深く傷つくタイプだ。

「さ、さすがジャンヌだ。ありがたく貰っておく」

俺は満足気の様子をしたジャンヌからブラド(?)の絵を受け取った。

しかし、大体の場所は分かった

「ジャンヌ、まさかこの魔臓は同時攻撃じゃないと効かないのか？」

「そうだ。だが、薫にとってそんなのは容易いことだろ？」

「そうだな、ジャンヌに見せたナイフパレードなら簡単かもしれないな」

「死なない程度にしておけよ」

「分かってるって」

そして、ジャンヌは向かいの中空知の部屋に帰って行った・・・

23弾 Blood the Infinito Delitto

俺は昔あったブラドの姿を無理やり記憶から掘り起こし、絵を描いてみる。

確か、狼男のような体つきで……顔つきも狼っぽい……

そして、出来た。

「我ながら恐ろしき画力だ……。リアル過ぎた……」

次にジャンヌに教えてもらった魔臓の目玉模様の位置を書いてみる。

おいおい……残り一つはどこだ？

背中か？

いや、記憶では背中なんぞにはそんな模様なかった。

ならどこにあるんだ？

俺は悩んだ……。悩み……。悩んだ……

仕方ない……。ブラドの屋敷に侵入するかな……

こうして、理子達とは別に、ブラドの屋敷に潜入することにした。

そして、今日はもう眠りに着いた……

翌日……雨が降っていた。

まあ、このくらい普通だ。

俺は変装&変声して、準備した。

一応、＜紅鳴館＞に電話して、仮でいいから使用人として雇ってもらえないかと少し強引に言ってみた
ら、容易く了承を得た。

正直驚いた。

簡単すぎる……一応警戒しておこう……

そして、タクシーを呼んで、ブラドの屋敷に向かった。

そして、俺はブラドの屋敷で仮使用人として、交渉に来た。

玄関に向かい、ドアの呼び鈴を鳴らした。

「は……い……」と出てきたのは、非常勤の小夜鳴であつた。

「すみません、今朝お電話した、萌咲諒もはな せいりょうと申します。突然の申し出、お許しください」

「別にいいですよ。それより、どうしてここに仮使用人として働きたいんです？」

「はい、昔からこのような場所でご奉仕したいと考えていたものですから」

なぐんてな・・・

コイツは嫌いな人種なんだよな・・・

「そうでしたか。なら、細かいことは中で説明しますので、お入りください」

と小夜鳴が中へと案内され、ついていく。

そして、小夜鳴は俺が屋敷ですべき仕事の説明をして、小夜鳴は武偵高に向かった。

つまり・・・ここには今、俺一人だ・・・

「さてと・・・まずは書斎の本を本棚に直す…だな」

俺は小夜鳴の部屋に行き、散らばった本を順序どおりに並べていく。

本はすべて日本語ではなく、ルーマニア語で書かれていた。

「こんな本のどこがおもしろいんだか……」

そんなこんな思いながらも、片づけは終わった。

次は廊下の掃除や部屋掃除をして、一日が終わり、この作業を2日続けた。

そして、ここに来て3日後、アリアとキンジ、それから恐らく理子であろう女性が来た。

応接間に3人を案内し、小夜鳴を呼んで、俺は紅茶を入れて、四人に出し、小夜鳴の横に立った。

「それでは、そちらの方が3日前にお雇いになった方ですか？」

と理子が小夜鳴に問いかけている。

「ええ。萌咲 諒君です」

俺は一応お辞儀だけしておいた。

「彼はとても優秀で、お二人の指導も任せて見ようと思っています。いいですよね、諒君」

「ええ、構いません」

と応えておく。

そして、理子も帰り、小夜鳴も書斎に行くと言って、書斎に行った。
俺はキンジとアリアを部屋に案内する。

「では、こちらが神崎さん、そちらが遠山さんのお部屋となっています。あと、制服もクローゼットに各サイズございますので、合うものを着用してください。それと・・、あなた方が武偵というのなら銃をお持ちですよ？弾はきちんと込めておいてくださいね。奇襲があつた場合、我々が対処しなくてはならないので…。それでは、私はあちらの部屋の掃除をしていますので、準備できらご声掛けください」

「「わかりました」」

そして、アリアとキンジは各部屋に入って行った。

俺も部屋に行き、掃除を始めた。

しばらくして、アリアとキンジが部屋に入ってきた。

「それでは、ミーティングを始めましょうか」

そして、キンジに料理の作り方、アリアには書斎の整理の仕方を教えた。

俺はキンジに付き添い、肉の焼き方を教えた。

まあ、毎日肉を軽く炙る程度なのだが、それが難しい・・・

「これくらいでいいですか？」

「ええ。あとは食べやすいように・・・」

俺は見本として、切って見せる。

「と、このくらいに切ってくればいいので・・・。盛りつけは、重ねて並べず、花弁のようにしてください」

「わかりました」

「それでは、後は任せます。私は少し部屋に籠りますので、暇になったら遊戯室でビリヤードでもやって構いませんので・・・」

俺はそう言って、自分の部屋に戻った。

部屋に戻り、ベレッタM92Fで・50A E（・50 A c t i o n E x p r e s s）を撃てるようにするため、ベレのバレルを抜いて、鞆から特殊鋼でできた銃身バレルを取り出し、装着した。

だが、これでは射速が伸びない為、補助銃身サブバレルを取りつけられるように改良して、デザートバレルトイグル並の銃身になった。

もちろん、重量は重くなるが、デザートトイグルよりは軽い。

そして、薬莢口も大きくして、排薬莢効率を良くした。

これは武偵法に反している。

その為、見つかったらタダじゃすまんほどにな……

そして、改造を終えた。

それを鞆に隠して、飯銃<コルト ガバメント クロムメツキ仕様
(3点バースト&フルオート切り替え
可能)>を懐のホルスターに容れ、遊戯室に行ってみることにした。

遊戯室に入ると、キンジとアリアがビリヤードをしていた。

「あ、萌咲さん」

「お二人も来てたんですね。どうですか?ここの仕事は」

「まあ、大抵はわかりました」

「そうですか」

俺はアリアとキンジがプレイしているテーブルの隣のテーブルでビリヤードを始める。

球を三角形に置き、手球をキューで打った。

球は手球以外すべてポケットに入った。

だから、余りプレイしない。

「すごいですね…」

とアリアが褒める。

「小さい時に少しかじる程度やっていたものでね…。あと、私に敬語は使わなくていいですよ。こう見えて、私も武偵ですから」

俺がそういうと、二人は驚いた。

「ど、どういう…」

「ま、ここは盗聴されてないみたいだからいいつか…」

俺は喉に付けた変声機のスイッチを切り、いつもの声に戻った。

「よう、アリア、キンジ」

「「薰!?!」」

「ピンポン! 正解だ」

「でもなんでアンタがここに居るのよ!?!」

俺はアリアの問いかけに、素直に答えられなかった。

「ちょっと、ブラドについて調べただけだ。それより、アリア。理子が言ってた盗んでほしい物ってのは何なんだ？」

「ロザリオって言ってたわ」

ロザリオ・・・か。

「分かった、協力してやる。だが、俺はあくまでもブラド目的だ。ブラドが居たらそっちを優先する。いいな？」

「ええ」

「あ、理子には黙っておけよ」

「なんでだ？」

「アイツにバレたら厄介なんだよ…。とにかく黙っといてくれ」

俺はキンジとアリアに言っで、遊戯室から出て行った。

そして翌日、俺は朝食を小夜鳴に持っていき、いつものように掃除をしたりして、一日を終えた。

そして・・・アリアとキンジの作戦が始まった。

「いいか？アリア。制限時間は30秒、あつちまで行くのに20秒・
・帰りはワイヤーで引き戻すが、余
裕時間は・02秒だ。センサに触れんなよ」

「分かったわ！」

「キンジ、小夜鳴はもう行ったか？」

「ああ、今は俺たちだけだ」

「よし、行くぞ！」

俺は全電子ロック及び赤外線センサを解除した。

アリアは走りだし、金庫内に走って入る。

アリアの体は小柄な為、速い。

そして、アリアはロザリオを取った。

それを見て、俺はすぐにワイヤーを巻き、アリアを引き戻す。

どんどん、赤外線センサが奥から戻りだす。

そして、アリアが出た瞬間、扉を閉め、何事もなかったように戻せた。

そしてすべて終わり、アリア達は夕方になり俺と小夜鳴で見送り、

帰って行った。

その日の晩、俺は書斎に向かい、ドアをノックしたが、小夜鳴は居なかった。

ドアを開けると、金庫が開いていた。

バレちゃった！！

俺は部屋に戻り、ベレッタM92Fデザートイーグルカスタムとコルガバを持って、紅鳴館を飛び出した。

もちろん、武偵高制服を着ている。

俺はとにかく、走った。

どこだ！？

どこに居るんだ！ 小夜鳴！！

まさか、ブラドと接触しているんじゃない・・・

俺は自然と、ラウンドマークタワーを見上げた。

すると、そこにはブラドに驚掴みにされたぼろぼろの理子が居た。

その時、俺は怒りに駆られた。

ラウンドマークタワーの非常階段を、駆け上がるというか・・・口

ツククライムのように手擦りを利用して、最短で屋上に着いた。

「ブラド!!」

俺はコルガバをブラドに向ける。

「誰だてめえ？」

「薰! どうしてここがわかったの?」

アリアが問いかけてきた。

「んなことは後で説明してやる。小夜鳴はどこだ!？」

俺が問いかけると、あっちのキンジがブラドを指さした。

「あいつが小夜鳴だ」

「マジかよ…。どおりで俺が嫌いなわけだ!」

「ああ、思い出したぞてめえ! アルジエントか!」

ブラドは不気味な笑みを見せて、俺を睨んだ。

「理子を放せ! 出ないと、ぶっ殺す!」

「やれるもんならやってみろよ」

ブラドはそういうと、理子を盾にした。

「覚悟はできてんだよな？ブラド！！」

「それはこっちのセリフだ」

「アリア・・・キンジ・・・さっき・・・たす・・・けて・・・」

「言うのが遅い！！」

俺とアリアは左右に並走しなふがら、理子を避けて、ブラドのコルガバを撃ちまくる。

だが効かない・・・

「おらどうした？全然痛くねえぞ」

ブラドは余裕の表情だ。

だが俺の狙いはお前じゃないんだよな・・・

「アリア、いったん退け！」

「えっ！？」

「いいから退け！」

「わ、わかったわ！」

アリアはいったんキンジの元に戻った。

俺は隠し持っていたベレッタM92Fデザートイーグルカスタムを取り出し、理子を驚掴みにしているブラドの腕を・50AEを放った。

流石のブラドも驚いている。

そりゃそうだ・・・ベレで・50AEを撃つなど無理だ。

だから、俺は改造したんだ！

ブラドの腕は理子を掴んだまま、どさりと落ちた。

俺は落ちる寸前の理子をお姫様抱っこをして、ブラドの脇を走り抜けた。

その時、ロザリオを掏った。

俺は理子を安全な場所に寝かせ、ロザリオを理子に渡し、ブラドの元に戻るうとすると、理子が袖を掴んだ。

「逃げよう！ブラドに勝てるわけないって！」

理子の目は怯えていた。

「ふざけんなよ、理子。ブラドが例え強かろうと、俺は理子にあんな仕打ちをしたヤツを・・・許さない。ただそれだけだ。お前だって、自由が欲しいだろ？だから...待

っている」

俺はベレデザにロンマガを装着した。

「いやだよ……。さっきには死んでほしくない……」

「死なないさ。俺は、元イ・ウーN o . 2だからな」

俺はそういつて、ブラドの元に向かった。

そこではキンジとアリアが応戦している。

がやはり、効いていない。

「キンジ、アリア」

俺はそういつて、アリアとブラドの間に立つ。

「薫、理子は？」

「安心しろ、アリア。安全なところに連れて行った」

「そう。なら心おきなく闘えるわね！」

「アリア、キンジ。悪いが、俺一人で相手させてくれ」

俺の言葉にアリアは驚いた。

「どづいう……」

アリアが言い返そうとしたが、キンジが止め、俺の目を見て頷いた。

「おうおう、アルジエント！わざわざ死にに来たのか？」

「死ぬ？この俺がか？んなことあるか雑魚ブラド。お前の汚れた家計に興味はない」

「けっ！まあ俺も見くびられたものだな。たかがガキが俺に勝てると思ってるのか？」

ブラドは余裕の笑みで俺を見下している。

「そこまで吠えるからには自信があるんだな。まあいい、掛つて来い」

俺は懷からサバナイを取り出し、構える。

「ヘッ！今更命乞いしたって許さねえからな！！」

ブラドはそういうと、そばにあった避雷針を？ぎ取り、俺に投げつけた。

しかし・・・そんな子供だましが俺には効かねえよ・・・

俺は避雷針を受け止めた・・・

この感じ・・・何かはわからない・・・

ただ・・・今の俺なら何でもできる・・・

俺はそう確信し、避雷針を受け止めて、そばに置いた。

「ハッ！やるじゃねえか」

「お前の力はその程度か？フッ、笑わせんなよ・・・」

俺は溜息をつきつつ、サバナイをブラドの頭に投げつけた。

ブラドは口元を庇うようにして、サバナイを腕で受け止めた。

サバナイは旨い具合に腕に突き刺さったが、すぐに傷は塞がった。

やっぱり効かないか・・・

まあ、さっきの行動から、口の辺りに四つ目の目玉模様があるのだから・・・

「やっぱり効かねえか・・・。なら、次はどうかな？」

俺はそばにあった避雷針を粒子分解し、複数のナイフを錬成した。

ナイフパレード・・・

そしてナイフをブラドに投げつけた。

ナイフはブラドの体に隙間なく刺さった。

もちろん、顔も狙った。

やっぱり口元を守ってやがる・・・

そして、その傷口はすぐに塞がった。

「厄介だな・・・」

一人ではどうにでもできん・・・

アリアとキンジを入れても難しいだろ・・・

これは理子の回復を待つておくか・・・

となると、時間稼ぎしねえとな・・・

「お前、イ・ウーN o . 2らしいな？」

「それがどうした？」

「俺も、元イ・ウーN o . 2だ！」

俺はブラドに余裕な笑みを見せつける。

アリアとキンジは驚いた表情をしている。

「ハッ！嘘つくんならもつとましな嘘を言いやがれ」

ブラドは笑いながら、俺を見下している。

「嘘じゃないよ・・・」

俺はその声に振り返る。

アリアとキンジの後ろから、理子が歩いてきた。

「早い回復だな・・・理子。それより、お前も闘うか？」

「当り前だ！」

あらら、男気のある裏理子になりましたか。

「ちょっと理子！」

「私は大丈夫だ。ヤツを斃すためなら立てなくてもやってやる！」

「フツ、なら、一発で終わらせるぞ」

俺はベレデザをブラドの口元に向ける。

「キンジ、アリア、理子。協力してくれ・・・」

「当り前だ、薫」

キンジはそういうと、俺の横に並び、ベレの銃口をブラドに向けた。

「しょうがないわね・・・」

アリアも微笑みながら、キンジの横に並び、白銀のガバメントの銃口をブラドに向けた。

「この前の借りはきっちり返す！」

理子は、キンジとは反対の俺の隣に並び、胸の谷間からデリンジャ―を取り出し、銃口をブラドに向ける。

「キンジ、お前は右肩の目玉模様。アリアは左腹部にある目玉模様、理子は左肩の目玉模様だ」

「「ちょっと待て、薫。もう一つはどこだ？」

そうキンジが聞いてきた。

「なぐに、それは任せろ。再生できいくらいに吹っ飛ばしてやる！」

「まったく…、薫、あとであんたに事情聴取するから覚悟しなさいよ！」

アリアもコルガバの銃口をブラド左腹部の目玉模様に向ける。

理子もデリンジャの銃口を左肩の目玉模様を狙う。

キンジもベレを右肩の目玉模様を狙う。

「へっ！そんなの効くわけねえだろ」

俺はニヤリと笑みを見せた。

「撃て！！」

俺の掛け声と同時に俺、キンジ、アリア、理子が放った。

ブラドは腕で口を庇った。

残念でした……それは武偵弾だ！

俺の撃った弾は、回転しながら、腕を貫通して、ブラドの舌に書かれた魔臓の目玉模様を貫いた。

スバイラル
回転像即回転弾……。

武偵局から配給される武偵弾の中で、殺傷能力が高く、直に食らうと、スピン力により、肉が引き千切られる。

しかし、ブラドに撃ったのは、回転力を最大限に抑えたやつだ。

死にはしない……。

「ばか……な……」

ブラドはもがきながら言い、後ろに倒れこんだ…。

「…やったの？」

「ああ。死んではないが斃せた。イ・ウーNo.2をな」

俺はブラドに近づき、確認して言う。

「よかったな、理子。これでお前は初代リュパンを超えたんだ」

「曾お爺様を…超えた？」

「そうよ。アンタは理子になったのよ」

そういうことか……

「てことは、イ・ウーよりもこっちに居る方が強くなれるってことだな。俺と同じだ」

俺は理子に微笑みかける。

理子はうれしそうにしていたが、すぐに切り替えた。

「勘違いするな！私はお前等と慣れ合うつもりはない！」

理子の目は鋭かった。

「別に俺も慣れ合うつもりはないが、仲間だってことは忘れるな」

すると、理子は笑みを浮かべた。

「神崎・H・アリア。^{ホームズ}遠山キンジ。そして鷺宮薫。私はお前たちを下に見ない。騙したり

利用したりする敵じゃなくて、対等なライバルと見なす。だから、
した約束は守る」

こっちに背を向けた理子に、さあつ、と、海風が吹いた。

その風の押されて、理子の長い後ろ髪が解けるように流れ、髪の内
に隠されてあった小さなリールが露
出した。

電動式のようなリールは、小さな火花を上げて高速回転している。

目には見えないほど細いピアノ線か何かをたぐり寄せているようだ。

「バイバイ、ライバルたち。私以外の人間に殺られたら、許さないよ」

少し赤くなって、俺たちに言った、理子は十字架のように両腕を広げ、ぱつ、とビルから飛び降りた。

またな・・・理子・・・

そして、その翌日・・・

俺は普通に学校に通っていた。

キンジとアリアは何やらたんまりと書類を眺めていた。

俺には関係ない。

関係あるのは、銀狼だ。

俺は関係ない・・・関係ないのだが・・・なぜだ・・・

俺は学校から寮に帰り、入った瞬間、アリアとキンジが俺の部屋に

居た。

「なんで居るんだよ？」

「言っただでしょ、事情聴取させなさいって」

「確かに言っただが……まあいい。何が聞きたい？」

「アンタ、本当にイ・ウーのNo.2だったの？」

「正確にはなる予定だった……」

「予定だった？なれなかったのか？」

「正直なところな」

「なんでなれなかったの？」

「理子をブラドの手が届かないようにしていたことと、理子を匿っていたことが響いてな。まあ、今では正しい判断だったと思ってる」

「ふうん、で、アンタはイ・ウーのメンバーを知ってるの？」

「俺が知ってるのは、理子、ブラド、パトラってヤツだけだ。ジャンヌがイ・ウーのメンバーだった事

は俺も知らなかった。恐らく、俺の代わりに入っただと思う」

「なら、お前はイ・ウーのアタマの名前を知らないのか？」

「知らない…、顔だけは覚えているんだが…はつきりとはな…」

「そう…」

アリアは残念そうな表情をする。

「悪いな、力になれなくて…」

「別にいいわ。アンタだって、ブラド戦で頑張ったじゃない」

「俺は…弱いだ…」

俺はそう言って、キッチンの冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、飲む。

「戻る気はあるのか？」

キンジは俺を睨むように目を見てきた。

「そんな真似はしねえよ。お前等と出会って、こっちのほう天国だっと思ったからな。話はそれだけか？」

「え、ええ」

「なら帰れ。特にアリア」

「な！なんで私だけそんなに言うのよ!？」

「ここは男子寮だ。とつととかえ・・・れ・・・」

俺は体に入らなくなり、その場に跪いた。

心臓の辺りが苦しくなり、抑える。

「薫! どうした! ?」

キンジとアリアが近づいて来るような気配がした。

「きゅ・・・きゅ・・・しゃ・・・」

俺はそう言い残して、ブラックアウトするのであった・・・

23弾 Blood the Infinito Delitto (後書き)

ベレッタM92Fで・50AEは撃つことは現実的にできません。
てか、改造できません

24弾 F e n i c e

俺は、小さい頃の記憶がない……

恐らく、八歳の頃からの記憶しかないのだ。

実は……ハッキリとは覚えていない……

記憶がある時から俺は言語を話していた。

たまに俺はわからなくなる。

自分は本当に人間なのか……怪物^{モンスター}なのか……と……

まあ、親父と母さんとそっくりだから、怪物の選は薄い。

だから、今までそう信じて、生きてきた。

だが、あの時感じた痛みはなんだ？

なんかこう……握りられているような……そんな感じが……

俺は心臓のあたりを擦ってみる。

痛みはない。

どうせ、ただの発作みたいなものだったのだろう……

俺はそう思い、ベッドから立ち上がる。

すると、ガラリとスライドの扉が開き、なぜか白い菊の花を飾った花瓶を持った看護婦が入ってきて、俺と目が合った。

その瞬間、看護婦の手から花瓶が滑り落ちた。

「ゆ・・・・・・・・」

ゆ？

「幽霊エー！！」

と叫びながら看護婦はものすごい速さで走り去った。

「ちょ・・・・・・・・」

俺の言葉は届くはずもなく、ハア〜とため息を吐き、その部屋を出た。

「なんで幽霊なんだよ・・・・・・・・」

と俺は呟きながら、振り向き、表札を見た。

<霊安室>と書かれていた。

「おいおい冗談じゃねえぞ…。俺、死んだことになってんのかよ！」

俺は自分の格好をしてみる。

良く見たら、患者用の服ではなく、死に装束じゃねえか・・・

「マジかよ・・・」

俺は頭を抱えた。

すると、アンビュラス救護科の教師、矢常呂 イリンが走ってきた。

そして、急に止まり、お経を唱え始めた。

「先生・・・死んでませんから・・・」

というわけで、矢常呂は再検査すると言って、いくつもの検査を俺に受けさせた。

「どこにも異常がない…。なんで・・・」

「あの、どうして俺は死んだって判断されたんですか？」

「それは、貴方の心臓が停止して、再起動しなかったから…。20分以上も心臓マッサージと電気ショック

処置を続けても戻りそうになかったから、死亡と判断したの」

「そうだったんですか・・・」

やっぱり俺は怪物なのか？

「まあ、昔、火葬しようとして火葬場に連れて行く途中に息を吹き返したり、死んだと思われた人が生きて

いたり・・・って、貴方みたいな事例はないとは言えないけど・・・
。でも、実際に見るのは初めて
よ。感謝するわ」

「こんなことで感謝されても嬉しくないですって・・・」

「フフツ、そうね。それより、早くみんなのところに行かないと、
もう二度と学校に通えなくなるわ
よ」

つまり、死んだままになるということだ・・・

「行きたいんですが、制服がないです・・・」

「それなら、ここにあるわよ」

と矢常呂は隅にあつた<遺留品>と書かれた箱から、ガバメントと
サバイバルナイフの容れているホル
スターと防弾防刃の武偵高制服を取り出した。

遺留品って・・・まあいいか・・・

俺は急いで制服に着替え、学校に向かった。

学校につき、俺はどうしたものかと考えつつ、2年A組の教室に向
かっていた。

しかし、死んで一日は遺体を安置するってことを決めた人に感謝だなあ・・・

下手したら、今頃火葬死していただろう・・・

だが、なんで俺がこんな思いをせななんのだ・・・

俺は愚痴をこぼしながら、教室の前にたどり着いた。

さて、なんて言ってるのか・・・

？、普通に「おはよー」と入る。

？、「生き返りました」

？、「なにかの手違いで死んでいました」

？、「お前らを呪いに来た」

？、「遺言を言いに来た」

？、いい加減に、何も言わず入る。

これはやっぱり、？だろ・・・

俺はそう思い、ガラッとドアを開けた。

丁度、SHRだったみたいで、みんな座って高天原のほうを見ていた。

まあ、泣いてるのは2割以下、暗いのは8割・・・

というわけで、教室内は暗かった。

俺の席には、ユリが置かれていた。

やっぱり殺されている・・・

高天原も何言ってるかわからん位に泣いていた。

そんなの俺のことを想ってて・・・

「私の唯一の話し相手の生徒があゝ」

と言っている。

「そんな理由かよ！！」

俺はつい、高天原に突っ込んだ。

すると、全員が俺に注目する。

まあ、驚くわな・・・9割9分9里は、後ずさる。

「幽・・・霊!？」「本人か？」「双子だったりして」「生き返ったの!？」「そんな非現実的なことを・・・」

「でも、実例で生き返ったって・・・」「そんなの生きてたやつを死んだって思わせれば簡単だ」

あの・・・いい加減にしてよね・・・

「俺は正真正銘の鷺宮薫だ!!」

「でもあんた死んだはずよ!?あたしとキンジもその場にいたのよ!」

アリアがキンジの後ろに隠れながら、言った。

「そつだ!お前は死んだはずだ!」

とキンジまでんなこと言っている・・・

「ハア・・・。まあいい、死んでないからそんなに避けないでくれるか?さつき、矢常呂先生に聞いた
が、死んだと思っていた人間が生き返ることは稀にあるらしい。だから、その類だ」

といって、説得し、いつもどおりに授業を受けた・・・

その後も疑いを晴らすのに苦労した・・・

25弾 L u c e

そして、すべての授業を終えて俺は寮に帰って、寛いでいた。

すると、チャイムが鳴った。

しかし、俺は無視することにした。

どうせ、ヴェントだ。

「チャイム鳴らさんでいいから入って来いよ」

と俺が言つと、やはりヴェントが瞬間移動^{テレ}で現れた。

「よくわかったな。局長より文を預かった」

ヴェントはそういつと、文を取り出し、俺の渡す。

その文を受け取り、開く。

その文には、<君の刑期はもう終わった。明日より君は一般人である。そのため、自宅への帰宅を明日

より許可する。銀狼の名はもう捨てよ。これからも元気で過ごせ

東京武偵局局長より>と書かれていた。

つまり……

「釈放……か」

「それでは、アルジェント．．．じゃないな。それでは、また明日。鷺宮先輩」

ヴェントはそう言っ、て、テレで帰って行っ、た。

「そうか．．．あいつは一年だったな．．．。なんだか複雑だな．．．」

俺はそう思いながら、キッチンに行き、ミネラルウォーターを冷蔵庫から取り出し飲む。

そう言えば、最近水しか飲んでないな．．．

と俺はくだらんことを思いつつ、TVをみることにした。

が．．．．面白くない．．．．

「今時、いきもの奇想天外など見るガキがいるのだろうか．．．」

正直、番組枠の無駄遣いだと感じる。

そして、チャンネルを一周する。

クイズ番組．．．．ニュース．．．音楽番組．．．アニメ．．．．
バラエティ．．．．

おもしろくない．．．．

俺は呆れ過ぎて、TVの電源を切り、ベランダに出た。

外はまだ肌寒い・・・

だから、すぐに部屋の戻った。

「今度の休みにでも、家に帰るかな・・・」

俺はそう思いつつ、寝室に向かい、眠りに就いた。

翌日、俺はいつものように武偵高で授業を受けていた。

今日が、普通の学生生活として最初の日となる。

まあ、一般の学生からしたら普通すぎるのだが、俺からしたら嬉しいことだ。

夜中や危険な任務ミッシェンをしなくて済むのだからな。

でも、反面、援助バックアップが無い分、なにかあった時の対処がめんどくさいだろうな・・・

「はあ」と俺はついため息をついてしまい、教師に教科書の角で叩かれた。

まあ、今日に始まったことではないため、慣れている。

そして、午前の授業が終わり、午後の専門教科、強襲科アサルト練習場の射撃練習場（シューティ

ング)でガバメントを撃っていた。

ガバメントは……

アメリカ合衆国の銃器設計者であるジョン・M・ブローニングの設計に基づき、銃器メーカーのコルト社によって軍用に開発された大型自動拳銃である。

1911年3月29日にアメリカ軍に制式採用され、軍用拳銃としての制式名称「M1911」、のちに1926年に改良が加えられたものは「M1911A1」を与えられた(具体的な改良点は後述)。その後1985年、後継となるベレッタM92Fが制式採用されるまで、実に70年以上にわたってアメリカ軍の制式拳銃であった。今なお、一部の特殊部隊では改造されつつ使用され続けている。

.45ACP(.45Auto Colt Pistol)という大口径弾を使用するこのモデルは、ストッピング・パワーの高さによって信頼された。軍用のM1911およびM1911A1の口径は.45ACP、装弾数はシングル・カラム・マガジンによる7+1発であるが、その後の民間でのバリエーション展開によって9mmパラベラムや.40S&W弾など各種の弾薬に対応したバリエーションが存在し、競技用にはパワフルかつフラットな弾道の.38スーパーの人气が高い。

現代の自動拳銃に広く用いられるティルトバレル式ショートリコイル機構の元祖であり、20世紀における世界各国の自動拳銃開発に対し、非常に大きな影響を与え「大型自動拳銃の形を決定付けた銃」と言える。

誕生以来大半のパーツの設計が変わっていないため、非常に豊富なカスタムパーツが存在し、使用者の好みに合わせてカスタムしやすい銃である。

大きな特徴として、握ったときの親指と人差し指の間に安全装置があり、それをしっかり握らないと撃てない仕組みになっている。グリップ
俺が昔、使っていたベレッタM92Fは・・・

世界中の警察や軍隊で幅広く使われており、現在はコルト・ガバメントに代わりアメリカ軍の制式採用拳銃になっている。なお、米軍では「M9」のモデル名で呼ばれている。

正式名称はピエトロ・ベレッタM92。より詳細には、M92S・M92SB・M92SB-F（M92F）・M92FSなど複数のモデルが存在する。米軍のM9は採用当初はM92SB-Fであったが、今はM92FSに切り替わっている。現在最も一般的なモデルはM92FSで、後述のように外見上の違いがほとんどないことから、これがM92Fと呼ばれることも多い。

フルサーP38の流れを汲むプロップアップ式ショートリコイル機構を持ち、ダブルカラムマガジン複列弾倉に15発の9mmパラベラム弾を装填する。

同社の拳銃の特徴である遊底の上面を大きく切り取ったデザインは、スライドイタリアの銃器デザインのひとつの到達点とも呼ばれ、見た目の美しさから映画やTVドラマ、アニメなどでも主人公などの使う拳銃として、よく登場する。作動方式には前作のベレッタM1951で採用したフルサーP38を参考にしたプロップアップ式ショートリコイル機構を採用しているが、これはこの特徴的なスライド形状により他の方式を取れなかったという面もある。しかしこのスライドは、上部を切り取ったことにより軽量になり、スライド後退時の衝撃を和らげ、排莢口の拡大によりジャム（弾詰まり）を防ぐ効果もある。この形状により耐久性があまり無さそうに見えるが、適切な熱処理を施すことで十分な強度を持たせることが出来る。（ただし、本銃のスライド破損事故が3件発生している。）また、使用弾薬が9mmパラベラム弾のため比較的反動が小さく、アンビ・セーフティや左右差し換え可能なマガジン・キャッチなどの利き手を問わない装備によって、開発当時としては格段に扱いやすい銃であった。

そして、アドのために貰ったジェリコ941は・・・

イタリアのタンフェリオ社がチェコのCz75を元に開発したTA90の技術提供によって開発された。Cz75と比べて、スライドマウントセーフティー/デコックを搭載したモデルの存在、独特の台形のスライドによりCz75の弱点である剛性不足を解決、メンテナンヌも容易といった特徴を持つ。

さらに、同じスライドとフレームながら銃身や弾倉を交換することで9mmパラバラム弾だけでなく、41Action Express弾（以下、41AE弾）や、40S&W弾、バリエーションのジェリコ945では、45ACP弾も使用可能。販売当初は、41AE弾と9mm弾の交換キットがセットで販売されていた。しかし、40S&W弾が急速にシェアを伸ばしたことから同等の性能を持つ、41AE弾は市場から駆逐され衰退していき、ジェリコ941発売よりわずか一年程で、41AE弾の交換キットは生産終了している。後に9mm弾と、40S&W弾の交換キットモデルが販売される事となった。

初期はスチール製モデルのみであったが、後にポリマーフレーム製もラインナップされている。また、各種オプションを装着できるよう、マウントレールを備えたモデルも用意されている。

あと、隠し銃で所有しているのはDE14インチ。
デザートイーグル
DEは・・・

・50AE版は50口径（0.5インチ）と表記されるが、使用弾薬である、50AE弾の弾頭径は0.54インチとなっている。S&W M500の使用弾薬の弾頭径0.492インチを上回り、拳銃用弾薬としては最大となる。

発射された弾丸の運動エネルギーはAK-47等に使われている7.62x39弾と同等であり、NIJ規格レベルIIのボディアーマーを貫通する能力を持っている。

銃身上部にはレイルを装備しており、スコープ、ドットサイト、レーザー照準機等の搭載が可能な為、スポーツ射撃や狩猟での運用に

も対応している。

・50AE版で全長269mm、全高149mm、重量2053gであり、通常の6インチモデルの他に10インチ、14インチの長銃身型も存在する。この中で、6インチモデルと10インチモデルは現在も市販されているが、14インチモデルは1999年に生産が中止された。

全長の長い弾を使用することもあつてグリップは前後に長いが、マグナムオートの種類でカービン弾を使用するオートマグEIIなどと比べれば、グリップの前後幅は短い。銃の外観前半を占める銃身は固定式であり、ガス圧により作動するボルト、スライド部の重量は見た目より少ない。

銃本体の大きさ故に、安全装置やスライド・ストップなどの操作が片手では行いにくいといった点が指摘されることもある。

マグナムにありがちな「小柄な人間や女性、子供が撃つと肩の骨が外れる」など誇張した表現がまま見受けられるが、現実には射撃姿勢や扱い方に注意を払えば、非力な人物でもデザートイーグルを撃つことは可能である。逆に姿勢を崩すと腕力が強くてもバランスを崩しやすく事故の原因となる。

射撃時の反動は非常に大きいが、銃自体の質量も大きく、ボルトやスライドの後退動作によって、射手への反動の伝達が遅延され体感される反動は同種の弾薬を使用する回転式拳銃に比べれば小さい。

自動車を破壊するなど、50AEや44マグナムの威力は誇張して描かれることがあるが、実際には自動車のエンジンなどの厚い鋼鉄製の物体は、フルサイズ小銃弾クラスのエネルギーで徹甲弾を撃ち込まなければ貫通できない。

正直、ベレの弾は装備科の平賀に特注で作ってもらったマグナム弾^{アムド}を装填していた。

そのため、装填可能弾数が16+1に対し、俺のベレは13+1と

減っているため、平賀にノーマルマガジンを改良してもらい、16発まで引き延ばした。

sonだけで40万円も掛った。

だが、ベレはもう使えない。

ブレイクショット
強制発砲を2発も撃ってしまった。

バレル
銃身は熱で歪み、撃鉄は焼きついてばねも熱ではねとして役に立たなくなり、処分した。

イジリ
ジェリコ941は今、マグナム弾を装填できるように改造を依頼している。

見積もりでは30万円、フルオート&3点バーストにするためには+10万円と言われ、渋々40万円を即金で払った。

デザートイーグル
家にあるDEは14インチで、スコープを装着している。

取り外し可能だが、弾が武偵弾と.50Action-Expressしか撃てない。

だから、持ち歩くのには面倒くさいため、あまり使わない。

てか、親父のお古だからメンテが大変で、しかも現在は生産中止になっているため、マガジンから何まで自作しないといけないのだ…。

平賀に頼むとマガジン一つに対して70万円という高額請求してくるし、銃身バレルに至っ

ては、150万円とありえん価格を突き付けられた。

まあ、後で平賀の同学科生に聞いたが、現行系のモデルならまだしも、生産中止のモデルのパ

ーツを作成するには、設計図か現物のパーツの情報を把握しないといけないらしい。

だが、あれは武偵高に持ってきていい品物ではない。

恐らく、威力測定したら、間違いなく、アンチマテリアルに入る。

だから、持ってこれないのだ・・・

「はあ、これからどうやって稼ぐかな・・・」

俺はそう呟きながら、ガバのマガジンに弾を込める。

武偵高に来る依頼クエストでは、少なすぎるし、単位すら卒業単位達成済みだ。

わざわざ、行く必要もないし・・・

あ、確か口座の残金は¥789,681,000だったな。

なら稼ぐ必要は無いか・・・

というわけで、自由気ままに生きることにした。

その後、俺はある程度射練をして帰り支度をしていた。

「アンタ、いつからガバに替えたの？」

俺は振り返ってみる。

「なんだ、アリアか…。この前のブラド戦で壊れたんだよ。それでおじゃんになったから、前

から持っていたガバに替えたんだ。お前と同じカスタマイズだがな」

俺はガバを懷のホルスターに容れる。

「でもあの時アンタが持ってた銃ってなんだったの？」

「教えるほどのもんじゃねえよ」

「ふーん、まあいいわ。今日、アンタの部屋にあかり達を連れていくから」

「なんでだよ!？」

「別にいいでしょ。それに、アンタに話したいことがあるし・・・」

そう言ったアリアは、悲しい表情になった。

「…わかった」

俺がそういうと、アリアは少し微笑んで、その場を去った・・・

26弾 Attacco a sorpresa

俺は寮に戻り、適当に過ごしていると、チャイムが鳴った。

恐らく、アリア達だろう・・・

俺はそう思いつつ、玄関のドアを開けた。

すると、アリア達が荷物を持って、立っていた。

「おい・・・まさか泊っていく気か？」

俺は嫌な予感がしたため、聞いてみる。

「当然よ」

「ふざけんな！てか、ここは男子寮だ！女子が居たら周りからなんて言われるか・・・」

「アンタの場合なら考慮してくれるでしょ。大丈夫よ」

確かに、この男子寮を始め、同学年の奴らには俺が女に興味がないことは知られている。

まあ、大丈夫か。

「それもそうだな…。まあいい、上げれ…」

俺は渋々、アリア達を部屋にあげた。

まあ、女子を泊めることは今に始まったことではない・・・

「鷺宮先輩、今日は何の話ですか？」

はい！？何を言っているんだ佐々木！

「そうですよ、薫先輩。いきなり私たちを呼ぶなんて・・・」

薫葵まで・・・なんでだ！？

「ま、待て！俺はアリアに場所提供を・・・」

「え？でも、アリア先輩が鷺宮先輩から話があるって・・・」

おいおい・・・火野も頷いてやがる・・・

「アリア！どいうことだ！？」

「フフッ、今日から1週間、アンタの部屋であたし達と暮らすのよ」

なんでだ
———！！

いや・・・待てよ・・・

まさか・・・

「オールタイムキルレックスン
油断大敵訓練・・・か？」

俺がそういうと、火野が驚いたように俺を見てきた。

オールタイムキルレックスン
油断大敵訓練・・・Sランクにしか許されない後輩教育訓練の一つ。

Sランクの先輩を、とにかく、戦闘不能にするか、ギブアップさせるかしたら、後輩の勝ち。

また、逆の場合も期間が過ぎるまで、戦闘不能またはギブアップしなかったら、先輩の勝ち。

襲うのは、オールタイム二十四時間、食事中でも、入浴中でも、睡眠中でも、学校でも・・・
と、いつでもいいのである。

ただし、先輩・・・つまり、今回の場合は俺とアリアなのだが、俺たちは攻撃されない限り、
攻撃してはならない。

「よくわかったわね。さすが、薫」

「それ本当ですか!？」

「そうみたいだな。まあ、ガンバレや」

俺は火野に哀れなものをみるような、目で見てみる。

「あの・・・オールタイムキルレックスン油断大敵訓練ってなんですか？」

薫葵と佐々木、間宮は何の事だかサッパリだったらしい・・・

「ええつとだな・・・オールドタイムキルレックス油断大敵訓練てのはな・・・」

以下、説明中・・・・・・・・

「そ、そんなの無理ですよ！」

間宮はやる前から弱音を吐き、

「そんなのがあるんですね」

と堇葵は感心する。

佐々木は・・・・間宮を見ているだけ・・・

「無理って言わないの!!」

そういえば、アリアの禁句用語にあつたな・・・『無理』

「んじゃ、俺は寝るが・・・」

「ちょっと待ちなさい薫。アンタ、何処で寝るのよ？」

あ、そういえばこの部屋にベッドは4つ・・・俺の改造工房に仮眠ベッドが1つ・・・。

もう一つ、実は俺の書斎に仮眠ベッドがある。

「工房だ。お前たちは好きに寝ていいから。あと、アリアは書斎に

ある仮眠ベッドで寝てくれ」

俺はそう言って、工房に入り、仮眠ベッドに入る。

仰向けになり、奇襲に備えて、枕元にガバとサバナイを置いておく。

「まあ、一週間なんてあつという間・・・だよな・・・」

俺は右に寝返りを打つと、カスタマイズ台を見る。

台に取り付けられた固定バイスには、銃身と骨組みしか完成して
ない銃があった。

ベレッタM8000“クーガー”・・・。

あの野郎・・・ジャンク品を送ってきやがって・・・。

まあ、タダだから文句は言えんな・・・

俺はそう思いつつ、眠りに就いた。

しばらくして、気配がした。

この気配・・・火野と堇葵だな。

俺は起き上がり、電気をつけて、ガバを二人に向けた。

「残念でした。さっさと寝ろ」

火野と堇葵は渋々、寝室に戻っていった。

そして朝になり、俺はさっさと学校に行く支度をしていた。

なぜなら、奇襲を受ける前に出てしまえば安全だ。

が、アリアが許してくれるはずもなく……、朝食を作らされた。

まあ、適当に洋風朝食の定番、トーストとベーコンエッグとサラダというものを作った。

そして、俺たちはさっさと学校に向かった。

もちろん、バスは満員に近い。

俺は隼に行くことにした。

アリアだけを後ろに乗つけて……

走行中、会話はBフルトウースも装着フルフェイスヘルメットでできる。

『そつえばアンタ、あの子とどうやって知り合ったのよ?』

「ああ、堇葵か……。俺も知らねえよ。あいつがいきなり戦徒申請しアミカ

てきたからな…。

あいつの親父さんに聞いたが、去年、俺が出たアドの試合を見て、この武偵高に進んだらしい

…」

『ふ〜ん…。でもアンタ、水姫に結構信頼されてるみたいよ。会う度にアンタのことを話してくるもの』

「お前はあいつとどんな関係だ？」

『ただ特訓してるだけよ』

「ああ、間宮達と一緒に受けてるとは言ってたな…」

『あと、ライカもアンタの指導を受けたって聞いたわ』

「あゝ、ちよつとだけな。でも、ありや董葵が2対1特訓で火野を連れて来ただけで、あんまり教えちゃいねえがな」

『でもアンタはお人好しね…。』

「何がだよ…。？」

『普通、いきなり押しかけて嫌がることもなくあたしに協力してくれたじゃない。アンタには感謝してる』

アリアに感謝されるのは、何回目だったろうか・・・

まあ、どうでもいいが・・・

「別に俺はなににも・・・。てか、どうせ断ったら風穴シリーズの餌食だろ！」

『あたりまえじゃない』

こいつの思考も、なんだか読める気がする。

そんなこんな思いながら、学校に着いた。

そして、教室に入り、普通に授業を受け、あつという間に昼休みとなり、俺とアリアはあいつ

等が奇襲してきたときに他の奴らの迷惑にならないように、アサルト強襲科
実習場で昼食

を摂ることにした。

俺は、ピザバーを食べていた。

もちろん。アリアはももまんを食ってやがる。

「アリア、もうちょっと栄養バランスを考えろよ…」

「うるさいわね、別にいいでしょ」

アリアはそういうと、嬉しそうにもう一つももまんを食べ始めた。

こいつが成長しない理由がよくわかった・・・。

俺は少し、ため息を吐いて、ゴミをゴミ箱に捨てて、ぶらつく。

アリアももまんを食べ終わり、ゴミをゴミ箱に捨てて、近くのベンチに座った。

すると、火野と間宮と堇葵、佐々木の気配がした。

アリアも気づいたらしく、ベンチより立ち上がった。

規則上、こちらからの手出しはしてはいけない・・・

だから、待つことしかできない・・・

「薫、アンタは水姫と志乃の相手をしなさい。あたしはライカとあかりを相手するわ」

「んじゃあ、お互い殺さない程度に捻るってことで」

俺は懷から、ガバを取り出した。

そして、堂々と間宮、火野、佐々木、堇葵が入ってきた。

「さあゝて、さっさとおっぱじめようぜ！」

俺は堇葵と佐々木に銃口を向ける。

「アンタ達二人の相手はあたしがするわ！」

アリアはガバの銃口を間宮と火野にそれぞれ向けた。

「本気でいきますよ！薫先輩！」

薫葵はクーガーの銃口を俺に向けてきた。

「私も、やるからには本気で行かせてもらいます！」

佐々木は、物干し竿とやらの長刀を構えた。

「んじゃあ、ここはアリア専門のフィールドってことで、俺は闘技^{コロッセオ}場^{セオ}まで身を

退かせてもらっぜ！」

俺はそう言っで、とつと闘技場^{コロッセオ}に行った。

薫葵は追いかけるが、俺を撃ってくる。

しかし、中らない。

そして、闘技場^{コロッセオ}に到着した。

俺は振り返り、ガバを二人に撃つ。

二人は寸前に避けた。

そして、すぐに佐々木が俺に斬りかかってきた。

俺は素早く、懐のサバナイを取り出し、受け止める。

佐々木は驚いた表情になる。

「Bad Endだ。佐々木・・・」

すると、堇葵が俺の不意を突き、ダガーナイフで切りかかってきた。

俺は佐々木の刀を弾き飛ばし、ダガーナイフをバク転して避けた。

「流石、俺の戦徒^{アミカ}つてところだな、堇葵」

「先輩に何度も言われてますからね！仲間を信じ、仲間を助けよって」

ホント、こいつはやる奴だ。

ただ、人を傷つけるという概念を持ちたがらない性格だ。

だからこそ、強くなれる。

「そうだな。佐々木、堇葵が今考えてることが分かるか？」

「はい！」

それでいい。

チームなら相棒の考えを少しでも読めるようになれば上出来だ。

「なら、本気で来い！！」

俺がそういうと、堇葵はクーガーを俺めがけて撃って来た。

俺はそれをかわすが、佐々木の襲撃もある。

これは仲間を信じていないと出来ない芸当だ。

自分に当たるかもしれない佐々木、仲間を傷つけるかもしれない董葵・・・

ベストパートナーだ。

俺のサバナイも、何度も打撃を食らうとイかれちまうな・・・

しゃあねえな・・・

そろそろあれ、出すか・・・

俺は佐々木の後ろに回り込み、足を払った。

しかし、佐々木は転びかけた体制をすぐに立て直した。

董葵も俺めがけて、クーガーを放ってくる。

まずは、董葵を先に仕留めるか・・・

「え!？」

董葵はおどおどしている。

「董葵! いかなる時も可能性の限り、想定しておけ!」

俺はブレザーの袖に隠し持っていたバタフライナイフを取り出した。

サバナイ……は、そこらへんに投げ捨てた。

バタナイの刃先を堇葵の首元に突き付ける。

佐々木は、俺にH&a m p ; K V P 7 0を取り出し、俺に銃口を向けてきた。

「水姫さんから離れてください！」

佐々木は少し震えた声で言ってきた。

「佐々木、これはキルタイムだ。いうことを聞くわけないだろ。退くのはお前らだ」

俺と佐々木は睨みあう。

「そこまでよ！薫」

俺はそのアニメ声を聞いて、アリアだと確信した。

堇葵からバタナイを離し、袖に再び隠した。

「遅いな、アリア」

「ちょっとアンタの戦い方を見てたのよ」

「あつそ」

俺はガバのマガを取り出し、リロードしておく。

「でもアンタ、本気の1割も出してないでしょ？」

・・・バレた。

「そうなんですか!？」

と董葵が俺に問いかけてきた。

「あ、ああ・・・」

俺がそういうと、董葵と佐々木は力が抜けたように座り込んだ。

「あんなにがんばったのに・・・本気じゃないなんて・・・」

「悪いな、二割以上出すのは依頼クエストか緊急事態って決めてんだ」

俺はガバにマガジンを装着して、懐のホルスターに直した。

すると、チャイムが鳴った。

「んじゃあ、帰るかな・・・」

「授業受けないんですか？」

そう、間宮が聞いてきた。

「受けたところで、単位は修得済みだ。無駄な時間を過ごすより、帰って休んだほうがいい。」

アリア、今日は先帰つとくが、もしかしたら出かけるかもしれないねえ

から、合鍵渡しとく」

俺はポケットから出した、合鍵を投げて渡した。

「どこか行くんですか？」

「ちよいと、知り合いと会うことになってるんだよ。じゃあな」

俺は5人に手を振りながら、実習場を後にした。

27弾 A f o r e w o r d

俺は、隼で群馬武偵高等学校に向かっていた。

「まったく・・・ジャンク銃くらい持って来てくれねえのかよ・・・」

「

俺はそう愚痴を溢しながら、2時間かけて到着した。

群馬武偵高校・・・。

ここは寒冷地帯戦闘を想定した実習が毎冬、センブレ・インヴェル特別科目として行われる。

この寒冷地戦闘想定実習は、北海道・青森・秋田・山形・新潟と、雪が降り、氷点下超をするところではよくある。

だから、俺は群馬でその実習を1カ月受けたことがあり、少しばかり、群馬武偵高生とは交流がある。

俺は隼を駐輪場に停めて、徒歩で森林を横切って、アムト装備科の教科塔に向かうことにした。

ここは、東京武偵高と違い、自然あふれる土地に建っている。

とても安らぐ。

俺が普通に歩いていると、木の上から、少女が俺の真上の落ちてきた。

俺はただ、重さのままに倒れるしかできなかった・・・

「いてて・・・」

少女は俺に馬乗りになり、覆いかぶさるような形で、頭を押さえている。

「あの・・・退いてくれないか？」

「え？」

少女は今、状況を把握したみたいで、顔がどんどん赤くなる。

「い・・・いやあ——！！」と少女は重い拳で俺の顔面ぎりぎり
で地面を殴った。

おいおい・・・窪んでんぞ・・・

「とにかく退いてくれ！！俺は装備科アムトの須田に会いに行かねえとい
けねえんだよ！」

「す、すみません！！」

少女は慌てて、退いてくれた。

「ったく…。まあいい、今度から気をつけるよな」

俺は立ち上がり、制服についた落ち葉を掃った。

「あの…。さつき、装備科の須田アムドって言いましたけど…。先輩に何か用ですか？」

「あ、ああ。須田にクーガーとDE14インチのジャンク品が出たって聞いて、下見に来たんだよ」

「もしかして、貴方が鷺宮さんですか？」

「そうだが、須田の知り合いか？」

「はい！須田先輩とは戦徒アミカ契約しています」

「あ、なるほどな」

「せっかくですからご案内しますよ」

「別に道は知っているが…。まあ、頼む」

「はい！では、こちらです」

少女は歩き出したため、俺は少女の後についていく。

「あ、申し遅れました。私は探偵科1年Cランクの川神岬かわかみさきっていいいます。以後、お見知りおきを」

「はいはい。俺は、鷺宮薫だ。ランクと学科は教えるほどもない」

「別にかまいませんよ」

そして、教科塔に到着して、中に入った。

奥に進むと・・・居た。

相変わらず、熱心なこつて・・・

「須田先輩、鷺宮さんをお連れしました」

すると、さっきまでM60をイジっていた手が止まり、こつちを振り向いた。

「来てやったぞ、須田」

「おお、早いな。もう授業は終わったのか？」

「もう単位は揃えてるよ。それより、ジャンク品は？」

「ああ、ちょっと待ってる」

須田はそういうと、奥の部屋に行ってしまった。

奥の部屋に行つて、約3分・・・

大きな箱を持って、須田が戻ってきた。

「おいおい……何丁あんだよ……」

「クーガーが6丁、DE14インチが8丁、DE・50AEが3丁、DE10インチが5丁、おまけにベレM92Fが5丁……ジャンク品として、ここに運ばれた」

俺はDE14インチを箱から取り出し、手に取ってみる。

「あんまりだな……。まあいい、全部でいくらだ？」

「ただでくれてやるよ。お前には命を助けてもらった借りがあるからな」

そういえばそんなことあったな……

まあ、タダで貰えるんなら越したことはないな。

俺は持っていたDE14インチを箱に戻した。

「わかった。そんじゃあ、明日にでも俺の部屋宛てに送ってくれ」

「了解。届くのは3日後くらいだ」

「わかった。んじゃあ、頼んだぞ」

「おお、任せろ」

俺は、そのまま、帰ることにした。

「あ、送っていきますよ」

と川神がついてきた。

まあ、いいつか。

俺と川神は森林にある一本道を歩いていた。

そして、バイクを停めた駐輪場に到着した。

「そんじゃあな」

「はい、お気をつけて」

俺はヘルメットを被り、隼に跨り、寮に帰ることにした。

今の時刻は午後4時半……

そして一時間後、寮に到着した。

俺は隼を駐輪場に停め、部屋に向かった。

部屋に入ると、アリア達は夕食を食べていた。

「あ、薫先輩！遅かったですね、今から夕食の準備を……」

「別にいらない。疲れたから寝る」

俺はそのまま、工房に入り、仮眠ベッドで眠りについた……

翌日、俺は授業がすべて終わり、夜まで屋上にいた。

堇葵達の奇襲は今日だけで9回……

さすがに疲れた……

アリア達も疲れたらしく、仲良くアリアの部屋で今日は過ぐすと言
って帰っていった。

俺はポケットから携帯を取り出し、時刻を見る。

午後7時3分……

そろそろ帰ろうかな……

俺はそう思いながら、屋上から飛び降り、地面に着地した。

そして、俺は歩いて寮に向かった。

今の時間、武偵高生はすでに寮でのんびりしている時間帯だ。

俺にとっては、TVを見る時間だ。

俺はこの時、自分の忘れた過去を思い出すイベントが俟ち受けて
いるとは1ミリも思っていなかった。
た・・・

28弾 Partner

俺はいつも通る道とは、少し違う道を歩いていた。

うす暗く、何も無い……

それに、誰もいない。

故に何かあつたら、誰も助けに来てはくれないだろ……

しばらく歩いていると、視線を感じた。

それも、殺気ある視線……

俺は、ガバを取り出して、視線を感じる暗闇に銃口を向ける。

「誰だ？」

「フツ、威勢が良さそうですね。殺すには惜しい」

暗闇から、メイド服を着た少女が現れた。

それに……メイド服には似合わんエペと腕に付けたスクードが、こいつの目的を物語っている。

俺はガバでは不利だと思い、ホルスターになおした。

「いったい何者だ！？ 答えろ！」

「私は、主より、G?（ジーセカンド）である貴方を抹殺するように申し使ったただのメイドです」

G???なんだそりゃ……

「意味がわからん。だいたい、G?ってのはなんだ？まるで実験体みたいに呼びやがって……」

「そうです、貴方は実験体だった……。でも、貴方は失敗作となつてしまいました……。だから主

は貴方を殺すつもりでした。ですが、貴方は椿を連れて、研究所を破壊し、逃げてしまった。しかし、主は貴方を見逃すと仰つて、今まで目を瞑っていました。ですが、最近、G?とG?が逃げ出した為、貴方が二人に協力して私どもに刃向かう可能性があると思はれます、その前に、危険な芽は摘み取らないといけないと、私は主より貴方の抹殺を仰せつかったということです」

何言ってるか全然わからん……

「俺の記憶にはそんなメモリは微塵もないんだが……」

「おかしいですね、確かにあなたはG?のはず……。まあいいでしょう、貴方を殺して、間違えなら本物を新たに抹殺すればいいことですし」

こいつさりとやっぱいいこと言いやがった……

つまり……どっちにしろ殺されるってことかよ……

「というわけですから、貴方を抹殺します」

メイドはエペの刃先をこちらに向けてきた。

俺は懷からサバナイを取り出した。

「それでは、樂にあの世に送ってあげますよ！」

とメイドは言つて、突っ込んできた。

刃先を俺に突き出し、寸前に避けた。

脇をスウツと掠った。

それだけで、防弾防刃制服が切れた。

マジかよ・・・

メイドは一度下がった。

「なぜ避けるのですか？素直に食らっておけば、樂に死ねましたのに・・・」

「人違いで死んだら笑いもんだつての・・・」

「それもそうですね。ですが、今ので私も少しばかり貴方に興味がわきました。次からは本気で行かせてもらいます」

メイドはそういうと、メイドの目は、さっきとは違い、殺気に満ち

た目へと変わってしまった。

おいおい……さつきでも死にかけたのに…まだ上があんのかよ！！

しゃあねえな……俺も本気出すか……

俺も、蘭豹と戦うくらいの力で戦うことにした。

俺の最大限だせる力である……

「行きます」

メイドはそう言って、今度は連続で突きを繰り出した。

俺はサバナイでうまい具合に防ぐ。

しかし、長くはもたねえぞ……

「いつまで私の攻撃に耐えられますかね？」

こいつ……息切れすらしてねえのかよ！

化け物がこいつは！！

「クッ！」

「おやおや、息切れしていますね？なら次の一手で止めを刺させていただきます！」

止めだと……

今やられたら避けらんねえ……

サバナイももう罫が入っている。

いったん退くか……

俺は一度、バックステップで後ろに下がった。

しかし、メイドは懷にすでに入り込んでいた。

しかも、ガード体制に入れないほど近い……

殺される……

俺は覚悟を決めた。

「終わりです」とメイドは不気味な笑みを浮かべた。

俺は咄嗟に目を閉じた。

すると、カキンツと金属と金属がぶつかり合った音が聞えた。

恐る恐る目を開けると、俺の目の前で、日本刀の刃腹でエペの刃先を受け止めていた。

「あら、貴方から現われてくれるとは……」

「私は、薫様を護る為に居るんです。貴方のような方に薫様を殺さ

せたりはさせません！」

俺が横を見ると、ショートヘアの少女が、日本刀の柄を持って立っていた。

誰だ？こいつ・・・

メイドは一度、退いた。

「お久しぶりです、薫様。・・・と言っても記憶はございませんよね」

「誰だ・・・？」

「その話は後ほどゆっくりと・・・」

少女はそういうと、日本刀を構えた。

「おもしろいですね。やはり、貴女はそちらのG？に付くんですね。主を裏切って、どうしてそこまでG？を護るんです？」

「薫様は私を自由の身にしてくれました。だから私は薫様を護ると決めたんです」

「そうですか・・・でも、貴女は私に勝てませんよ！」

メイドは目にも止まらぬ速さでエペを突き出して、少女に突っ込んでいく。

少女は、突き出されたエペを弾き飛ばしたりと、攻撃を防いでいる。
どちらも息切れすらしていない……

いったい何者なんだこいつら……

「スワン・アサルト!!」とメイドが叫んだ瞬間、さっきのより倍に早い速度で突きを連打していく。

しかし、少女はそれを防いでいる。

すごい……

「葬銃碎!!」と少女も反撃する。

だが、メイドも防いでいる。

しかし、それもつかの間……

少女の動きが鈍くなってきた。

「お、おい!」

俺は少女に叫んだ。

「大……丈夫です……」

完全に体力がピークに来てる……

「もういい！逃げるぞ！」

「もう遅いですよ！」

メイドの声と同時に、少女の腹部から鮮血が流れ出た。

メイドは勢いよく、エペを抜いた。

サーベルには鮮血が付いていた。

少女はその場に倒れこんだ・・・

「これで、貴方だけですネ・・・」

メイドはエペについた鮮血を嘗めたながら言う。

俺は恐怖を感じた。

そして、スタングレネードを作り出し、地面に投げつけた。

メイドは遠くに下がった。

まるで計算外だったように・・・

俺は少女を抱えあげ、とにかく逃げた。

そして、廃墟ビルに身を隠し、少女の応急処置をすることにした。

俺は少女を床に寝かせ、携帯を取り出して、アンビュラス救護科に連絡しようとしたが、電波ジャミングのせい、圏外だ。

「チッ！こんまま学校に戻るしかないか・・・」

俺がそうつぶやくと、少女は俺の袖を掴んだ。

「私のことは見捨てて、早くお逃げください・・・」

「んなことできるわけねえだろ！」

「ですが、薫様。今のあなたではあのメイドに勝てません・・・」

「なんでアンタは俺の名前を知ってんだ！？」

「貴方は・・・私の命の恩人です・・・。忘れることなどできません・・・」

こいつは一体何なんだ・・・？

「わけがわかんねえよ・・・」

「なら・・・思い出させてあげます・・・」

少女はそういうと、俺の首筋に手を掛けて、引き寄せて・・・

キスをした・・・

柔らかい・・・。

だが、この感じはなんだか覚えがある・・・

ファーストキスなのに・・・

そして、少女は唇を離した。

「・・・椿？」

俺は、フウツと浮かんだ言葉を口に出した。

「はい・・・」

思い・・・だした・・・

俺は8歳の頃に誘拐されて、何かしらの実験体にされたのだ・・・

恐らく、あのメイドが言っていたG？というのが俺の仮名みたいだ。

それが関係している・・・

「なあ椿、俺はなんの実験体にされたんだ？」

「詳しくは後ほど話しますが、貴方は強襲専用の人工戦闘人形として遺伝子変換を

アサルトドール

施されたようです・・・。私も同じような遺伝子変換をされましたから間違いありません・・・」

てことは、遺伝子は俺と一緒になのかもしれねえな・・・

確かこいつには名字ファミリーネームが無かったような気がする・・・

護ってやりたい・・・・・・・・

俺がそう思うと、なんだか、心臓のあたりが煮えたぎったような感じがして、しかも熱い・・・・

何かしらの力が働いてんのか・・・？

「わかった・・・・・・・・。それくらい話してくれば、十分だ。ゆっくり休め」

俺がそういうと、椿は安心したように眠りについた。

ああ・・・・・・・・この感じ・・・・・・・・10年前と一緒だ・・・

殺したい・・・・・・・・殺したい・・・・・・・・殺したい・・・・・・・・殺・・・・・・・・す・・・・・・・・

俺は日本刀を錬成した。

「さうて、掃除でもするかな・・・・・・・・」

俺は日本刀を引きずりながら、廃墟ビルを出た。

すると、向こうの闇から、さっきのメイドが歩いてくる。

「おや？自ら現われてくるとは・・・・、死にたいみたいですな」

「その言葉、そっくりお前に帰してやるよ。この、G?がな!」

俺がそういうと、メイドは驚いたみたいに眼を見開いた。

「・・・。そうですか、やはり貴方がG? でしたか・・・。なら本気出しても死にませんね!!」

そうメイドが言うと、さっき、椿に食らわせたスワン・アサルトを放って来た。

俺はそれをすべて避け、エペを掴んだ。

メイドは驚いたように、俺を睨んだ。

「どうした?まさか掴むとは予定外だったか?」

「ええ、まさかここまでやるとは驚きました」

メイドはエペを抜こうと一生懸命に試みるが、俺は握力の限りで掴んでいるため、抜けるわけがない。

もちろん、俺も手から血が流れだしている。

メイドはあきらめたようにエペを放した後ずさった。

俺は奪い取ったエペを両手で二つに折った。

「次はこっちのターンだ!!」

俺は、メイドに斬りかかった。

メイドは、腕に付けたスクードで受け止めたが、すぐにスクードに罅が入った。

「チッ！なかなかやりますね！」

メイドは少しだけ、刀をはじき返し、後ずさった。

「どうやら、俺はアンタに勝てそうだ」

俺は、心の底からそう思えた。

今の俺ならこいつに負けることはない。

「自身があるみたいですね。ですが、貴方のお連れ様は瀕死の状態では？」

「ああ、確かにそうだな。だからさっさとアンタを殺して、椿を治療しなきゃいけないんでね」

「フツ、私を殺すことなど、例え貴方であつたとしても無理ですよ。私は・・・無敵です！-」

「無敵？ハッ、人間である限り無敵なんてこの世に存在しねえよ！」

「言い遅れましたが、私も元実験体です。貴方ほどの実力は持ち合わせています」

そうメイドが言うと、どこに隠してか知らんが、エペを取り出した。

俺も、刀を構える。

「行きますよ!!」

メイドはそう言い、突きを繰り出した。

俺は刀でエペを両断し、そして、そのままメイドの脇腹を切った。

しかし、手応えが無い・・・

まるで、金属を切ったような感触だ。

「甘いですよ!!」

メイドは俺の首目掛けて、折れたエペを投げてきた。

俺は寸前に避け、後ろにさがった。

「おいおい・・・お前、アルマトウーラ着けてんだろ・・・」

「メイドは如何なる時も守りは固くしておくものです」

いやいや・・・そりゃ執事バトラの場合だろ・・・

「まだやるか？」

「いいえ、今日のところは退かせていただきます。もう、武器が無いものですから」

すると、ホンダ CBR1000RRのエンジン音が轟き、暗闇から執事服を着た男性の乗る一台のバイクが現れた。

顔はフルフェイスと暗闇で見えないが、強い力を感じた。

「それでは、また逢う日まで・・・」

・
そうメイドは言って、バイクの後ろに乗って、その場を去った・・・

メイドサイド・・・

『どうした？負けたのに嬉しそうだな』

とバイクを運転する執事がインカム越しに言う。

「少し、面白い方だと思ひましてね・・・。G？（ジーセカンド）
・・・、彼はこちら側に戻っていた
だきたいですね」

『お前がそこまで興味を持つとは、それほど気に入ったんだな』

「ええ。主がG？の抹殺を躊躇った理由がわかった気がします」

そして、二人は東京の街に姿を晦ました・・・

薫サイド・・・・・・・・

俺はすぐに武偵病院に連絡し、病院に連れて行った。

到着してすぐさま、連絡を受けて待っていてくれた矢常呂先生を始め、数人の救護科^{アンビュラス}生徒が、治療にあたってくれた。

俺は、椿のおかげで手の怪我だけで済んだ。

しかし、椿はあんな大怪我をした・・・

すべて俺の弱さが生んだ結果だ・・・

俺は、用意された一室で椿の治療が終わるまで待っていた。

待つこと3時間・・・

ようやく治療が終わり、俺は椿の病室で、椿が目が覚めるのを待つことにした・・・

28弾 Partner (後書き)

メイド(?)

薫をG?(ジーセカンド)と呼んでいて、主の命により、薫の命を狙っている。

エペの使い手で、得意技は、1秒間に100回以上の突きを繰り出す奇襲白鳥である。
スワン・アサルト

執事(?)

詳細は不明

椿(?)

昔、薫が誘拐され、監禁されていた研究所で共に暮らしていた。

実質、上記メイド並だが、少しだけ体力が低く、長期戦は得意ではない。

詳しくは以後、解説する。

29弾 A f i r s t c o u s i n

翌日、俺は学校を休むことにした。

まだ椿が目を覚まさないのである。

俺はどうしても、やらなきゃいけないことがあったが、今はそれどころじゃない……

すると、微かだが声がした。

「椿!」

俺は呼びかけてみる。

「薫様……ここは……?」

「病院だ。よかった、喋れるな……」

俺は安心して、胸を撫で下ろした。

「あの、クリスは……?」

クリス? ああ、あのメイドか……

「あいつなら退いたよ。さすがにサーベルが無きゃ只のメイドだな」

「そうですね。ということはHSSモードになったんですね……」

「HSSモード？」

俺は疑問形で復唱した。

「正確にはヒステリア・サヴァン・シンドローム。性的興奮を感じると発動する特異体質なんです、
薫様の場合、発動には他の条件があるみたいです」

「他の・・・条件？」

「はい。昔いた研究所で、薫様は性的な興奮状態になったことがありますし、脱走した時も性的興奮
状態でないときに発動しましたし・・・」

「つまり、俺はそのHSSの発動条件が特異体質ってことか？」

まあ、このHSSも特異体質だが・・・

「はい。ですから、その発動条件を見つければ、薫様は強くなる」

「条件・・・ねえ。まあ、それは後々分かるだろう・・・。じゃあ、先生を呼んでくるから、じっとしてろよ」

「わかりました」

俺は病室を出て、矢常呂先生のところに向かった。

そして、椿は全検査を終わらせて異常なしと診断結果が出た。

「というわけで、後は自宅療養を勧めるわ」

「いいんですか？」

「ええ、だけど貴方が面倒みなさいよ」

「なんでです？」

「彼女、貴方のことしか信用していないみたいだし・・・」

なるほどな・・・

「わかりました。あと、矢常呂先生に頼みたいことがあるのですが・・・」

そして翌日・・・

2 - A 教室・・・

「ええっと・・・、いきなりですが転校生を紹介します。イギリス武偵高から転校してきた鷺宮 椿さんです」

というわけで、椿を武偵高に通わせることにした。

俺の従妹として……

その為には血縁証明書というDNA鑑定調査書を出さなければならなかったため、矢常呂先生に鑑定を

依頼し、結果的に従妹辺りなら可能性ありというような遺伝子であったため、そのように記載してもら

い、都庁に提出し、椿はまんまと鷺宮家系に加わることができた。

ま、それよりも驚いたことが……矢常呂先生がたった30分で結果を出せたことである。

さすが……アンビュラス・マスター救護科教務……

「鷺宮 椿です。イギリスより転入してきました（棒読）」

ぎこちない……てか、部屋でも棒読みだったし……

「と、というわけですから、仲良くしてあげてくださいね。それじゃあ、鷺宮君の隣に座ってください」

椿はそう言われ、俺の隣にある席に座った。

もちろん、刀は風呂敷のようなもので覆っている。

まあ、武偵高では日常的に持っている者も居るため、気にしないのだが……

問題は・・・銃である。

普通は1丁、2丁が妥当なのだが、樁の場合、白銀のDE・50A
Eと漆黒のベレッタM93R、白銀のベレッ

タM92Fと白銀のコルト キングコブラが足のホルスターに容
れられている。

あと、他の奴らは知らんだろうが、スカートの裏にはダブルデリン
ジャーが10丁裏ホルスターに装備さ
れている。

恐ろしきことかな・・・

まあ、第一印象はヤバかったが、女子からも話しかけられたり、男
子からも話しかけられたりと一般高
校生の生活ができている。

しかし・・・俺が教室を出るたびについてくる。

まあ、ツッコむのもめんどいから好きにさせておくが・・・

そして、全授業を終えて寮に戻った。

まず始めに、俺はソファに倒れこんだ。

「薫様、ブレザーを」

と椿は俺に言ってきた。

俺は起き上がり、ブレザーを椿に渡した。

ついでにネクタイも……

「なあ椿」

「なんでしょうか？」

「学校では薫様と呼ぶなよ」

「なぜですか？」

おいおい……そんな謎的な目で見てくるなよ……

「あゝつまりだな、俺とお前は従兄妹同士になってんだ。様付けじや不審だろ」

「ですが、薫様は私の命の……」

「恩人でも、社会的目線ってのがあつた。その辺りを気をつけてくれねえと、俺が困る」

すると、椿はぷくうくと頬を膨らませた。

かわいいなあおい……

「なぜ頬を膨らませる！？」

「私も自己意識というものがあります。意見はして頂きたくありません」

こいつ・・・

「・・・わかった。お前がそこまで言うなら好きにしろ」

すると、椿は頬を元に戻した。

「ありがとうございます」

別に困ることではない。

ただ武藤がウザい・・・

すると、チャイムが鳴った。

椿が出ようとしたので止めた。

「なぜです？」

「ここは男子寮だ。ここにお前が居るってばれたら、お前は女子寮
息決定だぞ」

俺がそう半脅しで言うのと、こくりと頷いて、2〜3歩ほど後ずさっ
た。

やっぱ嫌なんだな・・・

俺はそう思いながら、玄関を開けた。

「やつほー！！遊びに来たよー」

宮澤テンション高ッ!!

「す、すいません薫さま!! 先ほどみなでお泊まり会のおやつタイムでお酒が入ったチョコレートを食べてしまって・・・」

「マジかよ!!」

「しっつれいしまっす!!」

「お、おい!!」

俺は部屋に入ろうとした宮澤を止めたが、その制止も虚しく入られた。

まずい・・・奥には椿が居る!!

俺は急いで中に入った。

「あっれっ、誰か居るうっ!!」

しまった・・・ご対面・・・

「薫様! そちらの方は!？」

ってお前も入ったんかい!!

と俺は心の中で石宮にツッコんだ。

「薫様、この方々は誰ですか？」

椿が殺気を放った目で俺を睨んでいる。

「誰なんですか!？」

「誰ですか？」

と椿と石宮が交互に俺を質問攻めしてくる。

ていうか近ッ!!

俺は二人に責められ、壁際に追いつめられる。

「あ——面倒くさい!! まずは、石宮の質問に答える! こいつは従妹の鷺宮椿だ! つぎに椿の質問に答える!

この酔ってんのは宮澤さくら、こっちが石宮りんで二人とも友人だ! わかったか!？」

すると、二人は納得したように俺から離れて行った。

「そうでしたか。はじめまして、鷺宮椿です」

と椿は石宮に一礼した。

「これはご丁寧に……。私は石宮りんと申します」

と石宮も返した。

てか……。宮澤をなんとかしないと……。・

宮澤は今もふらついている。

俺は宮澤をソファに座らせ、椿に冷蔵庫からミネラルウォーターを取るように言った。

そして、タオルに冷水を染み込ませ、額に置いた。

「う……………」

宮澤はうめき声を上げて寝ている……

「明日は二日酔い決定だな……………」

「そうですね……………」

「薫様、この方はそれほどお酒に弱いんですか？」

「ああ。気化した酒を一瞬でも吸ったら、二日酔いになるまでの酔いに等しいくらいにな」

「簡易検査でも、皮膚科が焦るほど赤くなっただって聞きました」

「尋常じゃありませんね……………」

お前が言つなよ……………椿が……………
おまえ

「そんじゃ、連れててくか……………」

「お願いします」

俺は宮澤を背負った。

「どちらに行かれるんですか？」

「ん？ああ、風見荘だ。こいつらが住んでいる一戸建ての家だ」

「そうですか。なら私もお供いたします」

「別にかまわん。なら行くぞ」

俺と椿、石宮は風見荘に向かった……

29弾 A first cousin (後書き)

さきのみや 椿 (17)

髪色：カメラア色 髪型：ショートヘア

眼色：カメラア色

身長：149cm B：B80

所属：2-A

専門教科：装備科^{アムド}Sランク

携帯武装：白銀のDE・50AE、漆黒のベレッタM93R、白銀のベレッ

タM92F、白銀のコルト キングコブラ、ダブルデリンジャー
×10、日本刀etc.

装備場所：両太もものホルスターに白銀のDE・50AE、漆黒の
ベレッタM93R、白銀のベレッタM92F、白銀のコルト キ
ングコブラ。スカートの裏にダブルデリンジャー×10 薫が助け
たパートナーで、武器調達のプロ。どんな武器でも手に入れられる
為、ランクはSランクである。

しかし、薫と同じで異性感情が無い。

薫への好意は、尊敬の意であり、恋愛感情ではない。

薫のパートナーは自分以外にあり得ないと思っており、薫と親しい
者に警戒心むき出しであり、薫も警戒心を解く為の説明が面倒らし
い・・・

俺は宮澤を背負って、LED街燈の青白い光で照らされている歩道を歩いていた。

風見荘は第三男子寮から1・2km離れている。

坪数300坪の3階建てであり、近くには車輛科生徒が羨む整備場がある。

この整備場はリフトを始め、エアコンプレッサーや天井クレーン、板金装置などの整備に関するすべての装置と工具を各リフトエリアに備えている。

まあ、羨むわな……

「あの、薫様」

「なんだ？石宮」

「さつきから椿さんが後ろを気にしているようなんですけど……」

あいつも気づいたか……

さつきからあの時、バイクに乗ってメイドを連れていった男の気配を感じる。

俺は立ち止った。

「石宮、ココから一步も動くなよ」

「え？それはどういう・・・」

俺は宮澤を近くのベンチに寝かせた。

「つまりこういうことだ」

俺は懷からサバナイを取り出した。

「椿！石宮と宮澤を連れて逃げろ！」

「残念ながら、そんな余裕はありません」

椿はそういうと、刀を取り出した。

俺は椿が睨む闇を睨んだ。

そこには、あんどき襲ってきたメイドがエペを持って、ヒールを鳴らし歩いてくる。

俺は後ろを見た。

こっちは執事だ・・・
バトラ

「まったく・・・お前らKYか・・・。昨日来て次の日に再チャレンジか？何焦ってんだよ？」

「うるせえよ・・・。さっさとおっぱじめようぜ」

執事はそういうと、クローを取り出し、右腕に装着した。

後ろを見ると、椿とメイドは武器を構え、睨みあっている。

俺は持っていたヴェントから貰った呼鉄キンを地面に投げつてた。

キンツという短い金属音が鳴った。

「んじゃあ、おっぱじめるか!！」

俺はそう叫んで、執事に斬りかかった。

執事は闇の奥に下がっていく・・・

どうやら、椿たちも同じように闇戦に入ったみたいだ・・・

石宮サイド・・・

残された私は、動揺している・・・。

いつ奇襲を受けるかわからないため、背中のホルスターからベレッタM84“チーター”を取り出す。

震えてる・・・私・・・

そうだよね・・・銃を握ったの一年ぶりだもん・・・

薫様に昔教えてもらった程度だし．．．人に銃口を向けたこともない．．．

怖いよ．．．薫様．．．

気づくと、私の額から冷や汗が流れてる．．．

でも、さくらを護らないと！

私は自分にそう言い聞かせる。

すると、突風が吹いた。

思わず私は目を閉じた。

「1年B組 春風美桜惨状仕る！」と声がした。

恐る恐る目を開けると、見知らぬ少女が立っていた．．．

「あの．．．どちら様？」

「薫先輩より、貴女方を護るように命を受けました」

最初は意味がわからなかったけど、薫様の名前が出た為、敵ではないと確信し、彼女に護ってもらったことにした．．．

椿サイド・・・・・・・・

「クリス・・・」

「椿、貴女はどうしてG？ に着くのですか!？」

「薫様は信頼できる。あの人よりずっと・・・」

クリスは騙されてる・・・

あの方は実験にしか目を向けていない・・・

クリスを救いたい・・・

「意味がわかりません！なぜ貴女方はG？のことを慕っているのですか!？私は信用なりません!」

「クリス、貴女はあの方から何を貰った？」

私がそういうと、クリスは言葉に詰まった。

「私は薫様からたくさん貰いました。心、感情、好奇心、生きることの大切さ・・・」

「うるさいうるさいうるさい!!そんなくだらないものを貰ったところで何のためにもなりません!!」

クリスはそう言って、私に斬りかかってきた。

だけど、昨日の私とは違う……

私は日本刀でエペを受け止めた。

そして、足でクリスの足を払った。

クリスは体勢を崩したけど、バックステップで後ろに後退した。

「卑怯ですね……。それもG？から学んだんですか？フツ、それなら人間としてどうかと思いますよ？」

「卑怯なのは、自分に嘘をついてるクリスの方です！」

私がクリスにそう叫んだら、殺気ある目が変わった。

やっぱり……。クリスの悪い癖……。でた……

ちょっとしたことで殺気を放つ……

「私が卑怯だと？」

その言葉はドスの利いた声だった……

「そうです。貴女は卑怯です」

「私を怒らせましたね……。死んでも知りません!!」

クリスはエペを突き出し、突進してくる。

私は数mmのところで避けて、クリスの懐に峰を打ち込んだ……

「グハッ！」

クリスはその場に倒れんだ・・・

ごめんね・・・クリス・・・

私は気絶したクリスの側に座った・・・

薫サイド・・・・・・・・

「おらおらどうした！！G?！」

執事はそう叫びながらクローで斬りかかってくる。

俺はそれをサバナイで受け止める。

「おいおい・・・執事ってのは素手で戦うもんじゃねえのかよ」

「だれがそんなこと誰が決めた？」

誰も決めていないが・・・

執事ってのは軽武装のはずだろ！！（想像）

いったん俺は、執事のクローをはじき返し、間合いを開けた。

「随分とまあ嘗められたもんだな……。まだヒスらないのか？」

ヒスる？こいつも知ってんのか……

「んなこといつでも条件が分からねえ限り発動したくても出来ねえ
ツツツの……」

「てことは半人前か……。まあいい。とつとと終わらせてやる」

執事はそういうとクローを逆手で突き出し構えた。

その構えはどこかで見たことがあった……

「鷺宮流八段構……」

「知ってんのか？なら、この構えがどんな意味かわかってるよな？」

その構えは、確実に人を抹殺するために考えられたと言われている。

俺も昔は親父から習っていたが、イタリア転勤になり、それ以来は
ご無沙汰である。

俺も大した知識はないが、ただ一つだけ、サバナイ用の形がある。

「鷺宮流禁書乃形……」

俺はそう呟き、サバナイを逆手で持ち構える。

これは禁書に書かれていた構え方で、鷺宮家では門外不出とされて
いる。

それを持ち出したとばれた暁には魚の餌決定だ……。

姉さんもやるよな……。

実家から禁書を持ち出すなんて……。

ま、俺も見ただからにはタダでは済まないんだがな。

「来いよ、執事さん」

俺がそういうと、ニヤリと微笑み、執事は俺に斬りかかった。

俺はそれをサバナイで受け止めて、執事の腹部を蹴った。

執事はクローから手を放し、吹き飛んだ。

いや……放さなかったら腕が切れてるからな……。

「何をしゃがった？」

「殺人形だ。運が良かったな、死ななくて済んだじゃないか」

「フツッ、面白い形だな。だが、お前にもダメージがあるみたいだが……。」

こいつ……気づいたか……。

この形は攻撃力が高い分、腕にかかる負担が尋常じゃない……。

まるで100kgハンマで叩かれたような振動がするからな・・・

これで右腕は使えない。

すると、執事は呆れたように頭を押さえた。

「お前・・・結構無茶するよな・・・。まあいい、今日のところは退いてやる。次会う時はちゃんとヒスれるようにしておけよ」

執事はそう言っ、闇の中に消えていった・・・。

なんだったんだ・・・あいつは・・・。

あ、早く石宮のところに戻らねえと！！

俺はそう思い、走って戻った。

石宮たちの居る所に戻ると、既に椿が来ていた。

「薫様！ご無事ですか!？」

と石宮が今にも泣きそうな目で問いかけてきた。

「大丈夫だ。それより椿、クリスは？」

俺がそう問いかけると、首を横に振った。

つまり逃げられたということだ・・・

「とにかく、今は安全を考慮し、速やかにここから立ち去ることが得策かと」

と春風が言つたため、俺たちは風見荘に向かった。

風見荘に到着し、宮澤を部屋に寝かして、俺は空き部屋で腕の手当てをした。

まあ、冷却スプレーをしただけだが・・・さっきよりはマシになった・・・

今日はここに泊ることにした・・・

ちなみにここは女子しか住んでいない・・・

男子は入室禁止なのだが、俺だけは特例で認めてもらっている・・・

しかし・・・あの執事がなんで鷺宮家の形を知ってんだ？

あの形は門外不出のはずだ……

また姉さんか……

「ハア……」と俺はため息をついた。

すると、ドアをノックする音が聞えた。

「誰だ？」

「私、杉浦よ」

杉浦……ああ、アンビュラス救護科2年か……

「入ってこいよ」

俺がそういうと、杉浦はドアを開けて入ってきた。

「アンタ、腕大丈夫？」

流石救護科！

バレちまつてる……

「ああ、大丈夫だ。それより、椿は大丈夫か？」

「アンタって本当に自分より他人優先ね……。あの子なら大丈夫よ。それより腕診せなさい」

俺は渋々、右腕を出した。

杉浦は俺の腕を手で触診する。

こいつと出逢ったのは、俺がキンジに捕まった時に命を助けた武偵だ。

杉浦は俺が銀狼だということは知らない・・・

「はい、終わりつと・・・」

「どうだった？」

「まあ、少し神経が麻痺ってるくらいで特に問題ないわ。念のため、できる限り右手は戦闘で使わないことね」

「わかったよ……。わざわざ悪いな」

「別にいいわよ…。この家をタダで住ませてもらってるし・・・」

「別にいいつて・・・」

すると、ドアが勢い良く開いた。

「あ・・・」

よくよく考えてみれば・・・この体制・・・杉浦が迫ってきているように見えなくてもない・・・

「か、か、薫さんが杉ちゃんに迫られてる!!」

「ちょっと！何勘違いしてんのよ！宮崎さん!!」

「そうだぞ、宮崎。ちょっと腕が痛んで診てもらってただけだ」

「そうだったんだ。良かった」

宮崎よ……

あんまり深読みしないでくれ……

「それより何？勢い良く入ってきたど、何か薫に用があるの？」

杉浦がそういうと、ハッと我に返った。

「そうだった！綴先生が薫さんと呼んで来いって……」

「ゲッ！綴先生居んのかよ！」

「はい。なんでお泊まり会を企画したのは高天原先生ですもの」

高天原ア！余計なことしやがって！

「で、なんで俺が呼ばれたんだ？」

「どうせ、奇襲した犯人に心当たりが無いか聞きたいんじゃない……」

」

「それだけかな・・・」

「まあ、とにかく行つてくださいね。あと、みんなもう寝なさいだつて。だから杉ちゃん、寝よう」

「もうそんな時間？それじゃあ薫、お休み」

「ああお休み」

そして、宮崎と杉浦は自室に戻っていった。

俺は立ち上がり、リビングに向かう。

リビングにたどり着くと、綴・高天原・矢常呂・蘭豹がビール瓶片手に騒いでいた。

生徒の模範となるべく先生ともあろうお方がよくもまあ酒を飲めるな・・・

「お、来たな色男オ」

誰が色男やねん・・・

「なんで俺が呼ばれたんですか？」

「そんなこと、自分で理解しとるやる？」

「・・・やっぱりの奇襲についてですか・・・」

「そうです。鷺宮君は心当たりはあるの？」

ある・・・が、正直に言わぬ方がいいだろ・・・

「あつたら言いますって・・・」

「まあ、貴方がそういうのならそうなんだろうけど・・・、最近貴方怪我しすぎよ」

と矢常呂は言い、ビールを飲んだ。

「好きで怪我してるわけじゃないですって・・・。てか、皆さん飲み過ぎですよ。明日二日酔いになっても知りませんから」

「うちらが二日酔いになるわけないやろ！」

「そうですよ。まだ3本しか飲んでませんし」

「そつだぞ、教師を嘗めるな。それともお前さんの秘密をバラそうか？」

「え？なにかあるの？教えて教えてエ」

矢常呂先生がキャラ崩壊した・・・

「知りたいです！」

高天原先生がキャラ崩壊した・・・

「気になるな」

蘭豹は酒に強いみたいだな・・・

「あゝ！！もう俺は寝ますからね！！」

と俺は言い残し、部屋に戻って眠りに着いた・・・

30弾 Butler & Maid the attack assassin

杉浦 すぎうら 愛美 いとみ (17)

髪色：ブラックカラー 髪型：ポニーテール

眼色：エメラルドグリーン

身長：160cm B：C90

携帯武装：S & amp; W M500、バタフライナイフ

装備場所：右太もも

所属：2年C組 専門所属：救護科 アンビュラス

ランク：A

一年の頃、銀狼の姿の薫に命を救われた。

薫が銀狼であることを知らない。

薫とは、薫が転校してきた頃より仲良しである。

風見荘に住んでいる。

宮崎 みやざき 美沙都 みさと (17)

髪色：シルバー 髪型：セミロングストレート

眼色：ミッドナイトブルー

身長：158cm

携帯武装：ベレッタM8000 “クーガー”、サバイバルナイフ

装備場所：ベレッタM8000 “クーガー” > 右足太もも、サバイ

バルナイフ > 左足太もも

所属：2年C組 専門所属：狙撃科 スナイプ

ランク：A

杉浦と同室の少女。

狙撃科ではレキとよく行動を共にする。

狙撃の腕はAランクなのだが、集中力が高過ぎて周りが視えない時が多々ある。

その為、任務の時は護衛として薫が同行したりする。

31弾 Riunione

翌日・・・俺は学校を休み、実家に帰ることにした。

綴には俺のことはバレているため、簡単に了解を得ることができた。

俺の実家は本家と支家があり、俺はその支家に住んでいた。

親父が支家の当主であつたから俺は住んでいたのだが、俺が盗みという犯罪をして、今は他界している

が、当時当主であつたく鷺宮乃京さぎのみやのみやこが俺を鷺宮家から破門した。

そりゃあ盗みなんぞやっていたんだ・・・。

俺には軽く思えた罰であつたが、妹の菜月をはじめとする妹3人が庇ってくれた。

あんなに怖い思いをしてまでも俺をなんで庇ったかね・・・。

あと、母方の家柄である豊臣家からも破門を申し付けられたが・・・
母さんが脅して当主に許しを貰った。

つまり、俺には親父・母さん・菜月なつき・美月みつき・葉月はつきの他に数人家系に仲間

がいるくらいだ・・・。

だが家系9割近くは俺のことを好ましく思っていない・・・。

が……今、菜月達は母方の本家に仮住まいしている。

支家の方は叔父が住んでいるらしい……

俺は上野駅で寝台特急「カシオペア」に乗り、母方本家のある北海道室蘭に向かった。

今回は健在の当主とよとみあきひと＜豊臣晃臣＞に会うため、椿は置いてきた。

もの凄く悲しそうな眼をされたが、今回ばかりは冗談が通じない……。

へたすりゃ殺される……

あゝ！！考えたくなかった——！！！！

俺はそう心で叫びながらも、指定された部屋に入った。

もちろん、独りで借りている。

ベッドは3つあるんだがな……

俺は軽装の武偵高制服にちよつとした着替えしか持ってきていない。

まあ、ちよつとだけ会ったら帰るつもりだ。

俺はそう思いながら、ベッドに倒れた。

「あゝ久しぶりの自由だ……」

よくよく思えば・・・独りで過ごすのって何日振りだろうな・・・

俺はそう考えながら携帯を取り出し開く。

時刻は朝の８時半・・・

今頃ならバスに揺られている時間だが・・・

<寝台特急 カシオペア 発車しまゝす>というアナウンスが流れ、
寝台特急は走り出した。

今は電車で揺られている・・・

カシオペアが北海道に入るのは翌朝の予定だ。

それまでは部屋で寛ぐことにしよう・・・

俺はそう思いつつ、眠りに着いた・・・

眠ってどのくらい経ったのだろうか・・・

ドアをノックするような音がする・・・

どうせ、売り子だ・・・

無視してもいいだろ・・・

しかし・・・いつまで経っても止まないノック・・・

そろそろイラツとくるぞ・・・・・・・・・・

俺は渋々起き上がり、入口に向かいドアを開けた。

そこには売り子ではなく、武偵高制服を着た少女が立っていた。

どこか脅えたような目で俺を見てくるが・・・武偵高でおなじみのガンチラでDEが見えている。

こ、怖エ——！！

「あ、あの・・・どちら様ですか？」と俺が少女に問いかけると、少女はビクツとした。

「す、すいません！！間違えましたア——！！」と叫んで隣の部屋のドアをノックして中に入った。

なんだったんだ・・・？今の・・・

俺はただ啞然とするしかなかった・・・

何が何だか分からなかったが、後から来た売子の話では、この寝台特急には俺を抜いて3人の武偵が乗ってるらしい・・・。

まあ、俺には微塵も関係ない。

俺はそのまま、ミネラルウォーターを買って、部屋に戻った。

持って来た鞆から、小型PCを取り出し、立ち上げる。

DE・50AE・・・この銃は普通、女性や子供、筋力が弱い人は扱うことができない。

なのだが、あの少女は普通に装備してやがった・・・。

タダの武偵で無いことは間違いない・・・。

まっ、俺には関係のないのだが・・・。

俺はそう思いながら、PCを閉じた。

そして、懐のコルトガバメントを取り出し、マガジンを確認する。

装弾数10発入り・・・チョイロンマガだ。

たった3発しかプラスされていない・・・。

まあいいかな・・・。

俺はマガジンを満タンにして、ガバに装着し、懐のホルスターに戻した。

俺は時計を見た。

時刻は午後6時半・・・

そろそろレストランに行くかな・・・

俺は立ち上がり、部屋を出た。

その時、二人の女子武偵が、隣の部屋から出てきた。

もちろん、DE少女もいる。

どうせ絡みなどないから無視するがな・・・

「あれ？薫じゃない」

と声が後ろからした。

それももの凄く知っている声だ・・・

俺は恐る恐る振り向いた・・・。

そこには、女子武偵高制服を着た少女が居た・・・

しかも、さっきのDE少女と並んでいる・・・

「茜姉さん・・・。なんでこんなところに・・・。」

「それはこっちの台詞よ。なんで貴方がココに居るの?。」

「ちょっと、菜月達に会いに行こうかと思って・・・」

「あゝ、ならもう終わったのね？」

「ええ」

「あのー鷺宮先輩。そちらの方は誰なんですか？」

とDE少女が茜姉さんに問いかけた。

「彼は私の甥の、鷺宮薫よ」

「そ、そうだったんですか。はじめまして、私は鷺宮先輩と戦徒を
アミカ
組ませてもらっています、
成瀬楓です」

「あ、ああ・・・。それよりさっさとダイニングカーに行きましょうよ・・・」

「あ、もう時間か・・・。急ぎましょうか」

「あ、はい！」

そして、俺と茜姉さん、楓はレストランがあるダイニングカーに向かった。

到着して、俺と茜姉さんと楓は席に着き、

俺と茜姉さんは懷石御膳、楓は興味本位でフランス料理を頼んだ。

「ねえ、薰」

「なんだよ？茜姉さん」

「貴方、タイミングが悪かったわよ」

「なにがだよ？」

「明後日、鷺宮家と豊臣家の会談日よ」

「マジかよ!!!よりによって会談日だなんて・・・」

俺は頭を抱えた・・・。

それもそのはず、鷺宮家と豊臣家に俺の味方は極僅かししか居ない・・・

味方と言えば、茜姉さんと北海道武偵局で救護科特殊武偵（アンビユラスDA）局員として働いている豊

臣家次期後継ぎである豊臣
命みことが俺の味方である。

「でも、丁度いい機会じゃない。アンタが信頼を取り戻すための・・・ね」

「今さら、俺なんかあいつ等の信頼を勝ち得たところで、姉さんたちみたいに信頼できる人なんていないって・・・」

俺は俯きうつ。

「ま、アンタができる限りのことをしなさい。私と命兄さんはアンタの味方だから」

「ありがとう・・・」

俺と茜姉さんの会話は、楓にとっては理解不能だろう・・・

そして、料理が運ばれ、夕食を始めた・・・

食事を終わらせた俺は茜姉さん達と別れて、部屋に戻り、シャワーを浴びて眠りについた。

32弾 P K O F a m i l i a

寝台特急【カシオペア】は、翌日早朝に北海道に入った。

そして室蘭に到着した。

寝台特急から降りた俺は、茜姉さんが結成しているチームの車輛科ロツの生徒が車で豊臣家の屋敷

まで送ってくれるというので、その言葉に甘え、茜姉さんと楓の後をついていく。

そういえば、売り子の人は武偵が3人乗っているって言ってたが・・・誰だろう・・・？

ま、考えたところでどうでもいいのだが・・・

俺は心の中でそう思った。

そして、武偵高制服を着た女子が立っていて、茜姉さんに気づくなり、歩み寄ってきた。

「おっつゝあつかね」と1人の少女が茜姉さんに言った。

「お疲れ、暦。わざわざ迎えに来てもらって悪いわね・・・」

「別にいいって。それより、そっちの御二人さんは誰？」

二人？ああ、楓と俺のことか・・・

「ああ、彼は私の甥の鷺宮薫と……誰？」

おいおい……戦徒アミカの名前くらい覚えてるよ……

「さあ、私も気づいたら横に居たんです」

つてなに寝ぼけたことを……

俺はため息をつきながら、振り向いた。

そこに居た楓の横には、居るはずのない少女が居た……

「はじめまして、私は薫様のパートナーの鷺宮椿です」

「なんでお前がここに居るんだよ!？」

「悪いですか？」

「当たり前だ!!てか学校はどうした!？」

「綴先生に言ったら簡単に許可を取れました」

あ、あの女アマア——!!余計なことしやがって!

でも……今さら帰すのも癪だな……

「ねえ薫、その子、さっき鷺宮を名乗ったけど……」

「実は……」

斯く斯く云々……と説明した。

「なるほどね……。まあいいわ。詳しい話は豊臣家で話しましょう」

というわけで、豊臣家に向かった。

豊臣家は、織田信長の後を継いで天下統一を果たした武將＜豊臣秀吉＞の子孫の集いで、結構、重役に就いている家系である。

軍・警察・自衛隊・国会議員・内閣というような公務委員系が多く、他にも武偵局・PKO部隊への所属人数も豊臣家は多い。

しかも……俺の母も元は日本武偵局副局長を任されていたほどだ。

だが、親父と結婚して辞めた。

なんでそんなおいしい仕事を辞めたかねえ……。。

そして、親父の家系である鷲宮家は、北海道先住民であるアイヌ民族の長であつたシャクシャインの妻＜雪姫様＞が作った、日本人として隠れ生き延びるために造られた家系である。

それほどすごい家系では無いものの、知識・戦闘能力が高い。

だが、アイヌの血をひいているだけに少ばかり周りの日本人とは

かけ離れたところもある。

例えば・・・身長がやけに高かったり、目が人並み外れて良かったり（家系平均視力 4.0）、素早さが隼並みだったり、射撃時の反動を片手で受け止められるほどの腕力があること、格闘武術・剣術・防術等の知識を生まれながらに体に染み込んでいること、感情的になりやすいこと等と結構ある。

まあ・・・俺はその間の血をひいている。

だから俺は、視力が5.0なのである。

しかし、驚くべきところはPKO活動だ・・・。

PKOの中にある、もっとも優秀な部隊<平和乃作手>^{ピースメーカー}は、全員が豊臣家と鷲宮家の家系である。

PKOというのは、国際連合平和維持活動（英：United Nations Peacekeeping Operations）は、紛争において平和的解決の基盤を築くことにより、紛争当事者に間接的に紛争解決を促す国際連合の活動である。日本ではPKOと略されることが多い。PKOに基づき派遣される各国軍部隊を平和維持軍（Peacekeeping Force、日本ではPKFとも略される）である。

PKOの活動内容には、2種類ある。

一つは監視。

監視活動（Observer Mission）の任務は休戦・停戦の監視拠点を運営することであり、非武装の将校によって編成さ

れる監視団（Observer Group）によって行われる。実際には監視団は監視だけでなく、重要な地域の巡察、敵対者間の交渉、特定の調査活動などを行う。

監視団が展開される地域に既に平和維持軍が配置されている場合は、その平和維持軍の指揮下に入ることになる。」
もう一つは平和維持。

平和維持（Peacekeeping）の任務は兵力引き離し、撤退監督などによって平和を維持することであり、武装した軍人で編成される国際連合平和維持軍（Peacekeeping Force, PKF）によって行われる。

具体的には、諜報活動、対ゲリラ作戦、外交援助、紛争当事者の調停、停戦および休戦の監視、兵力引き離し監視、戦争犯罪の調査、戦犯引き渡し監督、戦犯被疑者の逮捕、選挙監視、非武装地帯の建設維持、避難民の移動、人道救援活動、インフラの復旧などが挙げられる

ま、豊臣家と鷲宮家は、平和維持の方だろう。

茜姉さんも、高校二年生でイラクの戦場に駆り出された。

命兄さんも、高校時代に部隊一つを率いて、戦争一つを止めさせたことがあるらしい……。

それこそはず……命兄さんは人の傷つくようなことはしない・させない・許さないのだ。

茜姉さんも同じ考えを持っている。

俺もそう思う……。

くだらない争いで、多くの罪のない人が死んでしまう・・・。

そんな地域があるってだけで、俺は許さねえ・・・。

俺は無関係な人を護りたい・・・。

俺がそう思うと、なんだか血が煮えたぎったように熱くなった・・・。

まさか・・・HSSって奴か！？

しかし、その衝動も、すぐに収まった。

なんだったんだ・・・？まあ・・・いいか・・・

そして、豊臣家屋敷に到着した。

豊臣家の敷地は広い・・・。

恐らく、東京ドームが100個は入るんじゃないかというくらい広い・・・。

鷺宮家にあたっては、沖縄本土と同じ面積じゃないかというくらいに広い・・・。

そんなことは置いといて・・・。

楓と暦という方と別れ、茜姉さんの後ろを椿と歩いて豊臣家敷地内へと入った。

「ねえ薫、貴方は戦場に行く気がある？」

「いきなりなんですか？」

「別に深い意味はない。けど、いざという時には貴方も駆り出されるかもしれないわ」

「俺は家系に関係ないでしょ。それに、俺なんかが行ったところで、戦力の足しにならないって」

俺がそういうと、茜姉さんは立ち止り、振り向いた。

茜姉さんの目は、真剣な眼差しをしていた。

それに・・・美しい・・・。

流石・・・CVRを虜にする女性だ・・・。

「貴方、自分の秘めた力を知らないからそんなことが言えるのよ」

「秘めた力・・・？」

「貴方の秘めた力・・・。もちろん、私にも同じような力を持っているわ。だけど、貴方が一番最強なの」

「意味がわからないって・・・。その秘めた力って何ですか？」

すると、ハア〜と茜姉さんは額に手を当てて溜息をついた。

「その様子だと、まだ気づいていないみたいね……。まあいつかはわかるわよ、FSSのことわね……。」

FSS？

HSSと違うのか？

まあいいや……。

茜姉さんにはあまり追求しない方がいい……

ただ怖いだけだが……。

茜姉さんは、微笑んで、再び歩き出した。

俺と椿も茜姉さんについていく。

茜姉さんはすべてお見通し……。

なんせ、世界でも数十名しか居ないというくミステリ・インフォーマ謎乃情報科＞なのだからな……。

ま、そんなこんな思いながら歩いていると、所々で庭の掃除をしているメイド達が茜姉さんに気づいて一礼するが、俺を見た途端に俺を睨んでくる。

まあ当然のことだ……。

俺なんかがココに居ること自体が問題なのだ。

すると、1人のメイドが俺たちのところに歩み寄ってきた。

「わざわざご足労、お疲れ様です、茜様」

「別にいいわ。それより、菜月ちゃん達はどこに居るの?」

「今は学校に行かれておられます。あの茜様、少々お伺いしますが・・・どうしてそちらの犯罪者が居られるのですか?」

そのメイドが、そういった瞬間、椿はDEに手を掛けた為、俺は止めた。

「なぜ止めるんですか?」

「いいさ、間違ったことは言っちゃいない・・・」

「ですが・・・」

「頼む・・・今は妹達に会えさえすればいいんだ・・・。例えば、犯罪者と言われようがな・・・」

俺がそういうと、椿は一度眼を閉じた。

そして目を開き、DEから手を放した。

分かってくれたようだ。

ありがとう・・・椿。

「ちょっと途中であつてね、菜月ちゃんに会いに来たみたい

「そうですか。では、お会いになったらすぐにお帰りになるのですね？」

「ああ。あつたすぐに帰るさ」

「では、お帰りになるまでお待ちになつても構いません。ですが、屋敷の中に入ることは許されてはおりません。その辺は理解していただきたい」

「分かつてる。それじゃあ姉さん、またいつか」

「ええ、またね」

茜姉さんはそう言つて、メイドに連れられ、屋敷内に入つて行つた・・・。

さてと・・・まあそこら辺をぶらついたところでメイドに睨まれるだけだ・・・。

俺はそう思い、近くの池を眺めて、待つことにした・・・。

33弾 A i n u t h e l e a d e r

しばらく待つこと1時間……

菜月達が帰って来た……。

現当主の晃史と次期当主の命兄さんと共に……

「兄さん！」「言いながら、美月と葉月が俺に走り寄ってくる。」

その後ろからは、菜月が歩み寄ってくる。

やっぱり家族と会う時が一番幸せだ。

美月と葉月はまだ中学2年生だ。

だが身長はアリアより高い……。

まあ俺もアイヌの血を引き継いでいるからだろう。

「久しぶり！兄さん！会いたかったよ」「」

と美月と葉月は俺に抱きついてくる。

「俺もみんなに会いたかったよ……」

久しぶりに感じる家族の温もりを感じて、なんだかホッとした。

「久しぶり、兄さん」

と菜月は俺に微笑みかけてきてくれた。

「久しぶり、菜月。元気そうよかった」

「兄さんも元気そうで安心したよ。それより、今日来るなんて運が悪いな」

「まったくだ……。茜姉さんから聞いた時は驚いた。けど、3人に会えたからよかった。これで目的は果たした。だからもう帰るさ」

「そう……。なんだ……。」

「「えー!」」と美月と菜月が頬を膨らませて、なぜか俺を睨む。

「仕方ないだろ……。」

すると、晃史がこちらに歩いてくる。

嫌だな……。話すの。。。。。

「おい薫。今日は屋敷に入ることを許可してやる」

俺は晃史から発せられた意外な言葉に驚いた。

「何故……。ですか?」

「鷺宮家の大当主で在らされる雪姫様がお前に話があってこちらに

いらっしやるらしい」

「雪姫様がどうして俺なんかと・・・」

「知らん。だが、重要なことらしい・・・」

晃史はそういうと、屋敷に入って行った。

「なんだか・・・嫌な予感がするね・・・薫」

と命兄さんが俺に言ってきた。

「ホントですよ・・・」

「でも、屋敷に入れるんなら私たちの部屋で休んでいって。そちらのお連れさんもね」

菜月がそういうと、椿はコクリと頷いた。

というわけで、屋敷の中に入った・・・。

相変わらず無駄にでかいんだよな・・・入口・・・

まあいいや・・・

俺はそんなことを考えつつ、菜月達の部屋に入った。

やはり俺の思った通り……箆笥と勉強机以外は何もない……。

なんだか……この家系の奴らにイラツとくるな……。

「ゆっくりしてて。今、お茶持ってくるから」

「悪いな……」

俺がそういうと、菜月は微笑んで部屋を出て行った。

俺は不意に振り向くと、椿と美月・葉月が楽しそうに遊んでいた。

ああ……平和だな……

こんな屋敷の中じゃなかったらな!!

そんなこんな考えていたが……まあ、普通に過ごせた……。

そして……呼びがかかった……

俺は、椿と一緒にさっきの嫌味なメイドに連れられ、大広間に通された。

大広間は、月一又は年一にある家系集会の時か、重役が来たときしか開けることの許されない神の領域なのである。

そんなところに俺と椿は二人っきりでいる……。

なんだか……落着かないな……。

待つこと約1分後……

「雪姫様が参られました」とメイドの声がしたため、俺は正座をして、お辞儀をした。

足音がどんどん、俺に近づいてくる。

それもそうだろ……

なんせ、俺に用があるから態々網走からご足労なさったんだからな・
・

「頭を上げなさい」と雪姫様が出た。（声はおろか、顔すら知らないが……）

俺は恐る恐る頭を上げた。

そこには、茜姉さんに似た女性が、白い着物を着て立っていた。

髪の色はシルバーカラーで、瞳はミッドナイトブルーである。

「お主が、梓弦の息子か？」

「はい、薫と申します」

俺は一礼した。

「うむ。帥は薫の連れか？」と雪姫様は椿に問いかけた。

「はい、椿と申します」と一言だけ答えた。

椿にも今の状況がただ事ではないと感じているのだろう……。

わずかに緊張しているようだ。

「そうか。ならば、帥にも話しておかねばならないだろう」

「あの雪姫様、話というのはなんでしょうか？」

「うむ、そうだな。早速本題に入ろう」

雪姫様はそういうと、俺の前に敷いてあった座布団に正座し座った。

「薫、それに椿」

「はい」「

「二人で救護隊を編成してほしい」

俺はその言葉に自身の耳を疑った。

それもそのはず、普通、部隊編成は当主又はその部隊総統括重役しかできない。

しかも審査の厳しい救護隊だ……。

一歩間違えれば死者を増やしてしまうからな……。

「何故、俺・・・じゃない、私に仰るんですか？それも審査の厳しい救護隊なんて・・・私のようなものより、命兄さんの方が向いていると思いますが・・・」

「確かに命は救護の腕は世界一の武偵と呼べるだろう・・・。しかし、お前も負けず劣らずの腕を持っているであろう」

確かに俺は救護科の成績及び評価は悪くはない。

しかし、ランク的にはBランクぐらいだ。

すごいというものではない。

「お言葉ですが、私は救護に当たったのランクはBランク止まりです。そのような私が頭かしらになるなんて無理です」

「フィーリング・サヴァン・シンドローム
FSS・・・」

雪姫様が言ったその言葉を聞いて、俺は少しばかり、知りたいという感情が湧いた。

「雪姫様、そのFSSとは一体・・・」

「やはり知りたいか？」

「はい」

もちろんだ。

HSSモードもまだ調べていないし、そしてこのFSS・・・。

いったい何なんだろうな・・・

だから知りたいんだ。

「FSS・・・。正式名称は感情知的障害・・・。この症状はある一定の感情に苛まれることにより発動する。茜の場合は一定の殺人感情に苛まれると発動する。薫の場合はなんだ？」

んなことわからん・・・

「わかりません・・・」

「まあ当然だろ・・・。茜も私と戦ってやっとわかったのだ・・・」

雪姫様はそういうと、目を瞑り考え始めた。

しばらくして、目を開けた。

「考えていてもはじまらんか・・・。一度、私と戦おうではないか」
「やっぱりそうなるわけね・・・」

というわけで、雪姫様と戦うことになりました・・・

33弾 A i n u t h e l e a d e r (後書き)

さぎのみや あかね
鷺宮 茜(18)

髪：深紅のストレートロングヘア

身長：168cm B：B70

眼色：カメラア色

携帯武装：ウルサーP88(違法改造・三点バースト&フルオート・)、ベレッタM92F(違法改造・三点バースト&フルオート・)、IMEジェリコ941(違法改造・三点バースト&フルオート・)、グロック26(違法改造・三点バースト&フルオート・)ダブルデリンジャー(対超偵用弾装填可能改造)、サバイバルナイフ、小型ナイフ、スタンガン、眠り香水・スリーピンパフォーム・、クロロホルム

インフォルマ
情報科3年Sランク

薫の父の妹であり、薫の理解者である。

インフォルマ
情報科の中でも最も高貴な二つ名である<謎乃情報科>を持つ最強

であり、何でも知っている武偵である。

しかし、一度戦地に行ったこと以外は、茜の詳しい情報はまったくもって知られていない・・・。

FSモード発動条件感情：殺人感情

とよとみ みこと
豊臣 命(22)

髪：漆黒のショートカット

身長：170cm

眼色：サファイアブルー

携帯武装：コルト シングルアクションアーミー“ピースメーカー”

”ベレッタM92F スペシャルアンビュラス バタフライナイフ(刃カラー：カーボン)
北海道武偵局 特別救護武偵

薫の母の弟にあたり、薫の事を理解していて認めている人物の一人。

出身武偵高は東京で、高天原とは同級生だった。
今でも交流があり、連絡を取り合っている。

高校時代は、戦地に出向き、その地域の住民の安全確保に尽力していた。

とある戦地では、戦争自体を止めさせたという実績を持っている。
次期豊臣家当主である。

とよとみ あきひと
豊臣 晃史（52）

髪：漆黒の短髪

身長：165cm

眼色：サファイアブルー

豊臣家現当主で、薫を批判している人物の一人。

ゆきひめ
雪姫様（400）

髪：シルバーカラーのストレートロングヘア

身長：160cm B：A60

眼色：ミッドナイトブルー

アイヌ民族の長であったくシャクシャインの妻で、ずっと生きながらえて来た。

だから戦争というものがそういうものなのかを知っている為、PK
Oに尽力している。

34弾 Ability & Promise -

豊臣家特殊訓練場に場所を移動して、雪姫様と戦うようになった。

で、俺と雪姫様は訓練場に立っている・・・。

日本刀を持つてな・・・

まあ、日本刀といっても刃は切れない。

当たったら金属バットで殴られたように痛いが・・・

周りには、まあどっから湧いたか知らんが・・・メイド&執事がわんさか居やがる・・・。

それに、菜月達も居やがる・・・。

かつこ悪いところは見せらんねえよな・・・

俺は自然と刀を握る手に力が入る。

「それでは、ぼちぼち始めようではないか。なあ薫」

「そうですね。少々気が退けますが・・・互いに本気を出すということ・・・」

俺がそういうと、雪姫様は驚いた表情をした後、薄らと笑みを浮かべた。

「そのようなことを言ったのは帥が初めてだ……。まあ良からう、本気を出させてもらう」

雪姫様は、そういうとさっきまでのオーラとうって変わって、なんだが強くなった……。

というか、さっきまでオーラすら発していなかったようだ。

それでも威圧感があったのに……。今は逃げ出したい気分だ……。

「どうした？」と雪姫様は俺に問いかけてきた。

「いいえ、何でもありません」と返しておくが……。気になる……。

・

「まさかとは思うが、怖気づいたのか？」

ピンポーン！正解です！……。とは言えないわな……。

「そ、そんなわけじゃないですか！」

「ならば何故、さっきから冷や汗を掻いておるのだ？」

冷や汗？

俺は自分から流れる汗にすら気づいていなかった。

それほどの余裕というものが無いからだ。

「知りませんよ。それより、その感じ・・・」

「気づいたか・・・、そう、これが私のFSSだ。戦闘感情に苛まれると発動する。しかし・・・この力を発動したのは戦地以外では初めてだ・・・。さあ、帥の力の発動条件を探ろうではないか」

「わかりました」

俺は刀を構える。

「それでは・・・行くぞ！」

雪姫様はそう叫んで俺に斬りかかってきた。

俺は持っていた刀で受け止めた。

刀同士がぶつかり、火花が散る。

しかも、ちよつとズレるだけで火花が出る。

重い・・・蘭豹と戦った時より、何十倍も重い・・・。

このままじゃ押し返せない！

俺はそう考え、刀を自由^{フリー}にして流し、雪姫様から離れた。

それから何度も何度も同じようなことを繰り返した・・・。

そして、俺と雪姫様は離れた。

「このままでは埒が明かないな……。次で終わらせよう……」

目的変わってませんか!?

って突っ込んででも始まらん……。

これはあの形でケリをつけるかな……

さきのみやりゅうぶとうしは
鷺宮流武刀身破……

俺は構えた……。

雪姫様も同じ構えをした。

「やはり……帥も使えるのか……。この技を……」

「少し齧った程度ですよ……」

使ったことはない……。ただ……。無意識に構えてしまった。

「まあよい……。行くぞ?」

「……。はい!」と俺がそう答えると、雪姫様は斬りかかってきた。

俺も負けじと斬りかかった。

……。予想通り……。

互いの刀が折れた。

俺が折った雪姫様の刀の破片は、茂みへと飛んでいく。

作戦通りだ。

「しまった！避ける！菜月！」と雪姫様が叫んだ。

俺は慌てて振り向くと、雪姫様が折った俺の刀の破片が……
・・菜月の方へと飛んでいく……

茜姉さんが庇いに向かおうとしているが間に合わない……

菜月を……菜月を助けないと……

俺はそういう感情に苛まれ、血が熱くなった。

その瞬間、俺は自分でも驚くくらいの速さで、菜月の前に向かい、
刀の破片を素手で掴んだ。

切れない刃だから掴んだんじゃない……

恐らく、切れる真剣でもつかんでいただろう……

「大丈夫か？菜月」

「う、うん……。大丈夫……」

菜月は驚いていた。

周りの使用人はともかく、雪姫様すら驚いている。

俺でも信じられない・・・。

俺が居たのは、菜月から結構離れている。

それなのに俺は瞬時に移動した。

何故だ・・・？

まさか・・・これがFSSなのか？

ならなんで発動した？

どんな感情だった？

俺は自分に問いかけた。

「守護的感情・・・か・・・。すまなかった菜月、この通りだ」と雪姫様は菜月と俺の方に歩み寄って、頭を下げた。

「いいんです。兄さんが護ってくれたから・・・」

菜月はそういうと、俺の手を握った。

温かい・・・

これが家族の温もりって奴か・・・

「前も・・・こうやって私を助けてくれたよね・・・。悪いチン

ピラに絡まれた時も……トラッ
クに轢かれかけた時も……兄さんは命を掛けて助けてくれた……」

菜月はそういうと、俺の顔をじっと見つめてきた……。

目に涙を溜めて……。

「ねえ兄さん……、どうしても東京に帰らないといけないの？」

「それは……」

確かに……絶対帰らないといけないというわけじゃない……。

だが……。

「兄さん……」

菜月は今にも泣きだしそうだ……。

すると、美月と葉月も俺に歩み寄り、腕にしがみ付いてきた。

「行かないで！」

「ずっと一緒に居ようよ!!」

と美月と葉月も菜月と同じように目に涙を溜めて俺をじっと見つめている。

止めてくれエ……。

心が揺らいでしまっじゃないか！

「……悪い。俺は戻らなきゃいけないんだ……」

「どうして！？もしかして彼女が東京に居るから？」

「いねエーよ！！違う……」

「ならどうして……」

「戦徒^{アミカ}をほっとく訳にいかねえだろ。俺を信頼して組んでるんだから……」

正直、戦徒^{アミカ}なんてどうでもいいと思っていたら……。

しかし……堇葵だけは一人にさせるわけにはいかない……。

孤独を知っているからこそ……学校に通っている間だけでも一緒に話してやりたい……。

「兄さんは……私達より戦徒^{アミカ}が大事なの……？」

俺は……どっちも大切なんだ……。

それを選べって……無理だ……

「俺は……俺は……選べない……」

俺がそう答えると、菜月はくどうして！？>というような驚きの目

をした。

恐らく、迷わず葉月達を選ぶと思っていたのだろう。

「じゃあ・・・私達のこと嫌いになったんだね・・・」と葉月が言った。

「そうじゃない!」

「じゃあなんで選べないの!？」と美月が叫んだ。

「それは・・・」

俺は言葉に詰まった・・・。

「どちらも大切だからに決まっておるではないか」と雪姫様が言った。

助け船を出してくれたらしい・・・

ありがとうございます。

「そうよ。戦徒^{アミカ}を組むってことは兄妹^{かぞく}になるのと同じくらいに大切なことなのよ」

と茜姉さんも助け船を出してくれた。

「だから、薫も決めかねておるのだ。家族と家族を秤にけることなど、出来るはずが無かるう。だから・・・薫を温かく見送るのだ」

雪姫様はそう言って、微笑んだ。

すると、美月と葉月はコクリと頷いた。

「菜月もわかったか？」

雪姫様がそういうと、菜月は渋々、握っていた手を放した。

「菜月、美月、葉月。ちょっと来い」

俺はそう言って、菜月達を呼び寄せ、3人を抱きしめた。

「必ず・・・迎えに来る」

「ホント？」と葉月が問いかけてきた。

「ああ、約束だ」

「絶対に迎えに来てくれる？」

「当たり前だろ」

俺がそういうと、美月と葉月は微笑んだ。

「それまでと言っちゃなんだが・・・これを菜月に預けるよ」

俺は懷に装備したコルト ガバメントを菜月に渡した。

「これ・・・大事なものじゃないの？」

菜月は驚いたように俺を見つめている。

「ああ、大事なもんだ。なかったら困るくらいにな」

「ならどうして……」

「早く取りに来ないと、自分が大変だろ？だから……俺は必ずこれを受け取りに帰ってくる。できるだけ早く……、必ず戻る」

俺はそういつて、高校一年で大きくなった菜月の頭を撫でた。

「それまで、大切に預かっててくれ。頼んだぞ」

「うん。大切にする……。だけど、私忘れっぽいから失くしちゃうかも……」

菜月はそう言いながらも、微笑んだ。

「なら、忘れてしまわれないうちに取りに来ないとな」

俺も微笑み返した。

「早く迎えに来てね……」

「ああ……」

そして、俺と椿は飛行機で東京に帰って行った・・・。

34弾 Abilita & amp; Promessa - (後書き)

鷺宮 菜月^{なつき} (15)

髪：黒髪のロングヘア

身長：153cm B：B80

眼色：ミッドナイトブルー

北海道武偵高 探偵科^{インクスタ}1年

ランク：Aランク

携帯装備：スプリングフィールドXD バタフライナイフ

薫の妹（長女）

鷺宮 美月^{みつき} (14)

髪：黒髪のポニーテール

身長：153cm B：A70

眼色：ミッドナイトブルー

北海道武偵中 狙撃科^{スナイプ}2年

ランク：Bランク

携帯装備：USSR SVDK “ドラグノフ”

サバイバルナ

イフ

薫の妹（次女）

双子の姉

鷺宮 葉月^{はつき} (14)

髪：黒髪のツインテール

身長：153cm B：A70

眼色：ミッドナイトブルー

北海道武偵中 救護科^{アンビュラス}2年

ランク：Aランク

携帯装備：ベレッタM84 コンバットナイフ

薫の妹（三女）
双子の妹

35弾 Incontro the Amico

AM A 7 4 7 便 機内……

俺は事前にとっていた隠れファーストクラスのベッドで寝ていた。

ホントはひとりでゆっくりするつもりでベッド二つある部屋を態々チケットを取ったというのに……

よりも寄って椿がいる……。

まったくもってゆっくりできん……。

「薫様、ホントによかったのですか？」

不意にそう椿は俺に問いかけてきた。

「何のことだ？」

「ガバメントのことです」

「ああ……そのことか……。いいんだよ、俺は別にガバメントじゃなくても……」

「違います。あれは大切なものなのですよね？ならどうして預けたんだんですか？」

「椿、俺はガバよりも菜月達……家族が大切なんだ。だから預けたんだ。信頼できる家族にな」

俺がそういうと、椿はスカートを捲り、太ももに装備した白銀の D・E・50AE を取り出し、俺に差し出してきた。

「武偵高規則に充当の必須携帯が入っています。持って置くだけでもよろしいでしょう」

「・・・そうだな」

俺はそう言っ、て、D・E・50AE を受け取った。

やっぱり重い・・・。

が、一般的な D・E よりは少し軽い気もする。

まあ、気のせいかもしれないが・・・。

その頃、董葵はあかり達と過ごしていた。

堇葵サイド……

私はあかりちゃんと志乃ちゃん、ライカと一緒に帰っていた。

「ねえ水姫ちゃん、薫先輩いつ帰ってくるの？」

そう言われた私は自然と涙が出た。

「うう……言わないでよ。ただでさえ言ってもらえなかったことすら涙したのに」

「ご、ごめん……」とあかりちゃんは謝ってきた。

「でもさア、薫先輩ってキルタイムの時も思ったけど、何か隠してるみたいだよな」

「とういと？」

私は涙を拭きながら問いかけた。

「なんかこう……真の力を秘めてる……みたいなの？」

「なにそれ……」

ライカってたまに訳が分からないこと言うんだよね。

「ああ！ただそう思っただけ！もうこの話は終わり！で、来週の連休なんだけどどうする？」

ライカは赤くなりながら、無理やり会話を終わらせ、話題を変えた。

「私は特に予定ないよ……」

なんだか悲しいなア

「私も予定ないよ」

「私も」

「なんだよ……みんな予定なしだよ……」

「だって、これといって用事ないし……ねえ？」

「そうだね」

そんなことをいいながら、寮に戻った……

薫サイド……

北海道を離陸して3時間後……

成田に到着した。

俺と椿は、頼んでいたハイヤーに乗って、寮に向かった。

車内はもちろん無言だ。

俺は車窓から流れる風景を眺めていた。

しばらくして、雨が降り始めた。

大粒の雨・・・・・・・・

嫌な天気だ・・・・・・・・。

あの日・・・・・・・・董葵と戦徒試験アミカ・テストをした時もこんな雨が降っていたな・
・

今から4カ月前・・・・・・・・

俺は綴より戦徒申請書アミカを受け取って、土砂降りの中、傘を差してゆつくりと帰宅していた。

まあ、面倒くさいが、テストくらいはやってやらないといけないよな・・・・

俺はそう思い、寮の階段に足を踏み出した瞬間、誰かに袖を掴まれた。

それが堇葵だった……。

「なんだ？お前……」

「試験……してください!!」と堇葵は言ってきた。

「なんで今からなんだよ……」

「お願いします！薫先輩！」

俺は正直、雨も降っているし、面倒だと思っていた。

「明日してやるから……」

「今からお願いします！」

堇葵の目は本気が目だった……。

断りづらいくらいにな……。

「……わかった。なら試験方法は接触タッチングでいいよな？」

「はい!!よろしくお願いします!!」

俺は階段に鞆を置いた。

「んじゃあ、やるか・・・」

「お願いします!」

そして・・・試験を始めた。

しかし、一度も掠ることもなく、堇葵はもう疲れはじめてやがる・・・。

「もう終わりだ。あきらめろ」

「嫌です!!私は諦めません!!」

「諦めも肝心だぞ。それに俺なんかと組まない方がいい」

「嫌です!」

まったくめんどい奴だ・・・

「わかった・・・。ならばお前はなんで武偵になりたい?それを簡潔に30字以内で答えろ」

「ええっ!?ええと・・・その・・・家族を護れるように強くなりたい・・・からです!」

「了解、ならば後2回だけ、チャンスを与えよう」

そして・・・再び試験を始めた・・・。

気づけば、雨は酷くなってきた・・・。

しかし、一度も当たらない。

この試験は手加減無用だからな。

もう堇葵は息絶え絶えだ・・・。

「もう終わりだ」

しかし・・・もう一度掴みかかってこようとしたため、俺は反射的に傘を放り投げて、ベレッ

タM92Fを取り出し、銃口を堇葵に向けた。

「いい加減にしろって言うてんだろ。もうこれ以上やっても同じことだ」

「ハア・・・ハア・・・おな・・・じじゃ・・・ないですよ・・・。

ハア・・・私は・・・薫先

輩のアドの試合で・・・諦めなければ・・・できないこともできるということを学んだんで

す・・・。だから・・・諦めません!!」

そういつて堇葵はまた襲っていたため、俺は堇葵の足元に銃弾を撃ち込んだ。

流石に堇葵も脅えている。

「次は外さねえぞ・・・」

俺はそう言っ、銃口を董葵に向けた。

董葵は2・3歩後ずさった。

「もう諦めろ」

俺はそう言っ、ベレを懷のホルスターの直し、傘を拾っ、折りたたみ、鞆のところに向かった。

あゝあずぶ濡れだ・・・

俺はそう考えつつ鞆のところに向かった。

鞆のところにたどり着き、鞆を持った瞬間、ドサツという何か倒れるような音がしたため、振り向いてみると、董葵が倒れていた。

「お、おい！」

俺は慌てて、董儀に歩み寄り、呼びかけるが反応が薄い・・・

董葵の首元を触ってみた。

董葵の体は尋常じゃないほど熱く、このまま放っておくと死んでしまったため、俺は董葵を負って、部屋に向かった。

そして、着替えさせて、ベッドに眠らせた。

薬も飲ませたし、明日には良くなっているだろう。

まあこいつとなら一度だけでも組んでみるのもいいかもな……。

俺はそう思い、ソファで眠った。

翌日、俺はなんだかいい匂いがしたため、薄らと目を開け、キッチンを見る。

そこには、薫葵が立って、料理をしている様だ。

俺はゆっくり起き上がった。

「あ、おはようございます！薫先輩！」

「お前、病み上がりなんだからゆっくりしておけ。てか、ここで作るな」

俺はソファから立ち上がり、洗面所に向かい、顔を洗い、歯を磨いてリビングに戻り、制服を着て、武装した。

「あれ？今日は休みじゃないんですか？」

「そうだ。だが、誰かさんが余計な仕事を持って来たんでな・・・」

「誰ですか！？私がガツンと言ってあげます！」

「それは助かる。ならガツンと言ってもらおうか、堇葵水姫って奴に」

俺がそういうと、堇葵は固まってしまった。

「私・・・ですか・・・？」

俺はコクリと頷いた。

「す、すいません！！でもどうして・・・」

「お前の申請書、返しに行くんだ」

俺がそういうと、堇葵は俯いた。

「やっぱり・・・ダメですよね・・・。EランクがSランクに戦徒^{アミカ}申請するなんて無理な話ですよね・・・」

「はア？なに訳の分からないこと言ってんだ？俺は申請受理しに行くだけだ。だから、申請じゃなく、受理書に替えてくる」

「え・・・」

「認めてやるよ、お前のこと。お前は今日から俺の戦妹だ」

俺がそういうと、董葵は嬉しそうに返事をした……

そして、董葵と戦徒^{アミカ}を組んで、今に至ったのである……

36弾 Believe me・I'll be a new man・

しばらくして、俺と椿は雨の降る中、寮に帰って来た。

部屋に向かい、カギを開けた。

すると、呻き声の様な音が雨と混じって聞えて来た。

「薫様」と椿は俺を見てくる。

どうやら俺の聞き間違えではないみたいだ。

「行くぞ」

俺がそういうと椿も頷いた。

俺は階段を下りて、呻き声のする方に警戒しながら歩いていく。

雨が降るのも関係なく、とにかく耳を澄まして呻き声のする方に歩く。

しばらく歩くと、赤く汚れたメイド服に、雨で弾いた泥が掛つてる少女が倒れていた。

それも・・・俺と椿が知っているメイド・・・

「クリス!!」

椿は動揺しながらそう叫び、血だらけのメイドを抱き上げる。

微かに息はあるみたいだ。

俺も走り寄り、脈を測る。

かなり低いが、立ち直せないわけでもない……。

「G……セカ……ンド……」

「喋るな！ 椿、先に部屋戻って医療キットを準備しておけ！」

「わかりました！！」

椿はそう返事して部屋に走って行った。

俺は来ていたブレザーを脱いで、クリスの傷口を止血した。

そして、お姫様だっこで抱き上げ、部屋に向かう。

部屋にたどり着き、すぐに治療を始めた。

FSSモードの俺でな。

途中、輸血が必要になったものの、椿と一緒にだったため、なんとかなった。

傷口を見る限り、明らかに致命傷を狙っていた。

。だが、ギリギリのところでは避けたのか・・・誰かが庇ったか・・・

なんにせよ、一命は取り留めた。

俺は煮沸消毒したタオルで傷口の辺りを拭き取った。

そして、クリスの寝ているベッドで添い寝していた椿に毛布を掛けて、俺はシャワーを浴びて、PCをすることにした。

そして翌日、クリスのことがある為翌日は椿と俺は休むことにした。

俺はクリスの点滴を替え、傷口を消毒した。

しかし、傷口はすでに塞がれた。

「なあ椿」

「はい、なんですか？」

「まさかとは思うが・・・、こいつも俺の遺伝子をひいてんのか？」

「9割8里ほどです。私の場合は10割ですが」

「なるほどな……。通りで傷の治りが早いと思った……」

「それでは、私は買い出しに行つて参ります」

椿はそういつて、部屋を出て行つた。

俺の家系の血族……。といつても鷺宮家の血族は、自然治癒力が化け物並みに速い。

その血を半分ひいている俺は一日でどんな怪我でも治つてしまう。

「なら……。心配はいらないな」

俺はそういつて、クリスの側に座つた。

すると、クリスは目を覚ました。

「ここは……」

「俺の部屋だ」

俺がそういつと、クリスは慌てた様子で起き上がった。

するとクリスは全裸であることに気づき、シーツを纏つた。

「そんなに脅える必要ねえだろ……」

「なぜ……。助けたんですか……?」

「そんな理由なんてねエ。ただ助けたかったから助けただけだ」

「お人好しですね、G？。わざわざヒットマンを助けるなど・・・」

「お前は敵じゃない。椿の親友だろ」

俺がそういうと、クリスは俯いた。

「・・・違います。椿は私を裏切った・・・。もう親友ではありません」

「裏切った・・・ねエ。クリス、お前は本当にそう思っているのか？」

俺がそう問いかけると、驚いたように俺を見てきた。

「裏切りというのはな、お前が使えていた主のことを言うんだ。あんな奴からは手を退け」

「・・・無理です。私はメイド・・・、主が居なければ不要なんです・・・」

「そんなの誰が決めた？国か？世界か？そんなことは全世界全宇宙なんかで決められてねえよ。決められてるのは自由だ」

「自由・・・？」

「そうだ、全世界一人ずつに自由がある。もちろん、お前にもな」

「でも・・・私は・・・」

「どうしても主が要るんなら俺がなってやる！そしてお前に自由を教えてやる！」

俺は自分でも恥ずかしいセリフを叫んだ。

「・・・兄様達が貴方を認めたのも分かる気がします」

「何があつたか話してくれ・・・」

クリスは俯き、話し始めた・・・

「私は、兄様と共に主に報告に行きました。主といっても使いの者のグレイにですが・・・貴方と椿に関する情報を報告した後のことでした・・・」

クリス過去サイド・・・

「・・・以上がG？と椿の情報です」

兄様はそう報告した。

「なるほど・・・、これだけの情報があれば、次のヒットマンを選出するのに役立つかもしれません・・・。」

「ちょっと待て！！選出するってどういうことだ！？」

「そうです！まだ私たちは負けていない！！」

「負けですよ。それに・・・約束の時刻が過ぎていきますよ。ですから作戦は失敗ですよ・・・」

。グレイは、サーベルを取り出して、刃先を私に向けてきました・・・。

「メイドはもう・・・用済みです！！」

使いの者は私めがけて突っ込んできた・・・。

私は・・・初めて死を覚悟しました・・・。

しかし・・・兄様が盾になってくれた・・・。

ですが・・・兄様を貫通したサーベルは私の胸部まで貫通したんです・・・。

「に・・・げろ・・・。G・・・セカン・・・ドの・・・ところまで逃げろ・・・」

「兄様・・・」

私は言われた通り逃げました。

でも、兄様は・・・私を逃がすために一人残って・・・グレイと戦ったんです・・・

薫サイド・・・

クリスは悲しそうに語り、俯き涙を流した・・・。

俺は優しく抱きしめた。

「・・・辛かったな。でももう安心しろ・・・、俺がお前を護つてやる・・・。お前を護ってくれた兄貴の分もな・・・」

俺はそう言って、クリスの頭を撫でるのであった・・・。

クリスは・・・気の済むまで泣き、眠りについた・・・。

そして、椿が帰ってきたため、斯く斯く云々と事情を説明した。

椿はただコクリと頷いた。

ただ……それだけの反応だった……。

けれど、感じ取れる思いはとても悲しそうだった……。

翌日、クリスを一人にすることもできないため……、とある助っ人を呼んだ……。

っていうか……風見荘の管理を任せている杉浦 琴音さんに面倒を任せた。

ちなみに琴音さんは、杉浦 愛美の母親である。

杉浦親子は中学校から父親が居ないらしい。

シングルマザーというものだ。

去年初めて出会ったときに理由を聞いていた。

父親の不倫……。

それをクリスマスの夜に二人して目撃してしまったらしい……。

＜残酷なクリスマスの夜＞^{ノック}だったんだろ？……。

それで家出して、一年の一学期……つまり、俺が編入した時は漫画喫茶を転々としていたらしい……。

そんなときに上がった3階建ての一戸建ての買い手を探す依頼クエストが出
ていた……。

まあそんなときはたんまりとアレが余るほどあったため、俺が購入し
た。

それを俺一人で管理するのは無理であるため、琴音さんに住むこと
を条件に管理してもらっている。

もちろん、家賃なんぞ取っていない。

他の住んでる奴からも家賃は取っていない……。

その代わりにいろいろと協力してもらっている……。

まあ互いに和解し合っているからいいんだが……。

しばらくタクシーに揺られること30分……

俺と椿は武偵高に到着した。

もちろん、武藤にいろいろと突っ込まれたが、軽くあしらって、授
業を受けた……。

そして昼休み、俺はあることに気づいてしまった……。

「金持ってくるの忘れた……ハア……」

俺はため息をついた。

椿の場合、財布を持ってきてはいるが・・・、そこまで期待はできない・・・。

まあ一昨日から忙しくて、気にしてなかったもんな・・・。

仕方ない・・・我慢するか・・・。

俺が覚悟を決めた時、教室の後ろ口辺りに男子が集っている。

「何の騒ぎだ？」とキンジが俺に問いかけてきた。

「俺が知るか！どうせくだらんことだろ・・・。」

すると、武藤の声が何だかわくわくしたような声になった。

「いや、あの・・・、誰に用があるんですかア？」

何聞いてんだあのKY武藤・・・

「・・・鷺宮薫様と椿は居られますか？」という声が聞えた。

おいおいまさか・・・

俺は恐る恐る振り向いた。

その瞬間、集っていた男子が俺を睨んできた。

「おい薫、お客さんだぞ」と武藤が暗い様子で言ってきた。

俺は睨んでくる男子を掻きわけていく。

そこには・・・・・・・・クリスが居た・・・

「クリス！お前なんで・・・・・・・・」

「はい、琴音様が薫様と椿に昼食を持っていくようにと言われたので持って参りました」

クリスはそういうと、軽く会釈してきた。

なんだか・・・・・・・・複雑だ・・・・・・・・。

しかも・・・・・・・・エペを腰に装備している・・・・・・・・。

「そ、そうか。椿なら恐らく装備科塔アムドに言っていると思うから、一緒に行く」

俺がそういうと、クリスは嬉しそうに「はい」と答えた。

すると、武藤は俺に肩を組んできた。

「おーおー両手に花だねえ、か・お・る！」

明らかに恨み籠っている・・・・・・・・。

「うるせえよ・・・・・・・・」

俺はそう呟いて、肩を解いた。

ていうか……両手に花ではなく、両手に武装神姫の間違いだろ。
……。

恐らく、真実を知らんからそんなことが言えるんだ……。

俺はそんなことを考えながら、クリスを連れて、^{アムド}装備科塔に向かった……。

俺は恐る恐る振り返ると、クリスはキョロキョロ周りを見渡している。

興味が居るのだろうか……。

「クリス、学校案内してやろうか？」

「で、ですが椿に昼食を……。」

「どうせ^{アムド}装備科塔は端っこにある。外にある学科は大抵案内できる。だから安心しろ」

「……なら、少しだけ」

「わかった。ちゃんと付いて来いよ」

「畏まりました、薫様」

クリスはそう言った。

そして、最初に強襲科^{アサルト}を案内することにした。

強襲科^{アサルト}実習場に入り、ある程度の説明をした。

ついでに蘭豹にも会わせておいた。

次に狙撃科^{スナイプ}に行き、レキと宮崎に会わせた。

車輜科^{ロジ}に行き、宮澤と石宮に会わせて、装備科塔^{アムト}に到着した。

椿はこんな時、大抵、平賀と共に居る。

ていうか・・・平賀からヘルプを頼まれて昼休み返上で手伝いに行っているんだが・・・

中に入ると、何やらグレネードランチャーを整備していた。

「おい、平賀・椿」と俺が呼ぶと、二人は振り向いてきた。

「お！珍しいお客なのだ！」

「薫様にクリス、どうしたんです？」

「クリスが昼食を持ってきてくれた。一緒に食べようぜ」

「わかりました。平賀さんも一緒にませんか？」

「でもお邪魔したら悪いのだ」

と平賀は遠慮する。

「別に遠慮しなくてもいいだろ。それに、最近一人寂しく昼食摂ってんだろ？」

「な、なんで知ってるのだ!？」

ゲツ！マジかよ………

ホントのところ、冗談のつもりだった………

「ま、まあな。それより、外で食べようぜ」

と俺が提案し、4人で少し遅れた昼食を摂ることにした………

36弾 Believe me・I'll be a new man・

クリス（17）

髪：藍色のストレートロングヘア

身長：160cm B：B70

眼色：エメラルドブルー

携帯武装：エペ（今現在）

前までは薫の敵であったが、信賴していた主と主直属の使いの者である 그레이 に裏切られ、殺されかけた。

しかし、兄である執事が盾になり、瀕死の状態ながらも命だけは助かった。

信賴していた主に裏切られたショックから、これから生きる為の目的を失い、命を救ってくれた薫と椿を恨んだ。

しかし、薫からく「どうしても主が要るんなら俺がなってやる！そしてお前に自由を教えてやる！」>という訴えに、生きる意味を得た。

そして、薫が本当の主として相応しいと考え、薫に仕えることにした。

37弾 There is no man but loves his ho

俺達は、^{アムド}装備科塔の近くにある芝生の敷かれた広場にポツンと一つだけ、テーブルとベンチがあった。

平賀の話によると、昔ここで^{アムド}装備科生徒だけが昼食がとれるテラスのようなモノがあったらしい。

今は少子化で統合になり、ここは3年でも使わならしい・・・。

んなことはどうでもいいや・・・。

というわけで、ベンチに座り、クリスの持ってきてくれた3段重箱の弁当を広げた。

まあ定番の弁当だ。

(中身はご想像にお任せします><)

そして、4人中睦まじく、昼食を摂った。

昼休みが終わり、クリスを琴音さんのところへ帰り、椿と平賀は再びGRの整備に戻った。

俺は久しぶりに、鷺宮家支家に行くことにした。

その理由は・・・・・・・・

再び家族6人で暮らすためだ。

今は伯父が住んでいるが・・・・、不治の病で寝たきりらしい。

その為、生きているうちに話したい。

伯父さんは・・・・鷺宮家の誇りで在り、俺を理解してくれていた一人である。

あの支家を自らが管理し、俺が罪を償ったら、また俺が親父に明け渡すと言っていた。

でも、親父はイタリアに転勤になっているから俺しか居ないだろ・・・・。

俺は車輜^{ロジ}科に停めてあるムーブカスタムに乗り込み、支家に向かった。

支家は奥多摩の方にあり、敷地も広い。

俺はそこで何度も迷ったことがある。

酷い時には、三日間帰れなかったこともあった。

「ハア・・・・帰るの嫌だな・・・・。でも・・・・みんな一緒に住む

んならあの家しかないよな・・・」

俺はそう漏らしながら、国道を走った。

ホントは高速を使いたいのだが、支家の近くで下りれない。

しばらくして、国道よりずれた山道に入った。

ここからはもう鷺宮家の敷地内である。

参道は夕方になる暗黒に包まれ、ライトをつけないと道路が見えなくなるほどだ。

夜になると、0距離でも全く見えない。

だがここは支家に行くための唯一の道だ。

俺はここら辺で迷ったりしたんだが・・・

そう苦い思い出を思い出しつつ、昔の自分が段々馬鹿らしくなってきた。

すると突然、道路に何かが飛び出してきた。

俺は咄嗟にブレーキを踏み、ハンドルを切って、衝突は回避した。

「危なかった……」

俺はそう呟いた後、飛び出してきたモノを確認するため、銃とLEDライトを取り出し、車から降り、ライトで先を照らしながら、銃を構える。

そして、さっき何か飛び出してきたところへと、歩み寄って行くと、何かが動いた。

黒くてヒラヒラな……。

例えるならメイド服の様な……。

「何者だ？」と俺がその蠢く何かに問いかけた。

「う、撃たないでください!!」

その声はタダの少女である。

俺は獣ではないと判断し、銃の構えを解いた。

「わかった。で、こんなところで何してんだ？」

「山菜を採りに山に入ったんですが、道に迷ってしまって……。あちこち歩いていたら日が沈んじやって……」

「帰る方向が分からなくなった……。ってところか……。」と俺が推測して言った。

「はい……でも、貴方が通りすがってくれたおかげで道に出ることができました。ありがとうございます」

「ございます!」

「まあ別に礼を言われるようなことはしてねえよ……。それより、お前の家はどこだ?」

「まあ家というか……職場というか……」

「住み込みか?何してんだ?」

「メイドです」

あ、なるほど。

暗闇で見えないが、さっき一瞬見えたヒラヒラはやっぱりメイド服だったか。

「そうか……。んじゃあ、そこまで送ってやる。どこの屋敷だ?」

「鷺宮家です」

俺はその言葉に驚いた……。

「今……。鷺宮って言った……。?」

「はい、言いましたが……」

「ハァ……。目的は同じ方向か……」

「旦那様に御用ですか？」

「まあな……。早く乗れ、俺だってこんな時間帯にここ走るの初めてで先が分からんからな」

「分かりました！」

というわけでメイドが乗り込んで来たのだが……

「なんで助手席？」

「もしも道に迷ったとしても、私がお教えします！」

いや……。迷ってたじゃん……………

俺は不安になりつつも、車を走らせるのであった……………。

走り出してしばらく経った頃……………。

隣のメイドは寝ていた。

予想はしていたが……………現実になると結構堪えるな……………

そして、やっと屋敷に到着した。

車を玄関に寄せて停める。

「おい、着いたぞ」

俺はメイドを揺すり起こす。

「．．．ん．．．そう．．．ですか．．．」

メイドは半起半寝で返事し、車を降りた。

俺も車から降りて、玄関に向かった。

「ただ今戻りました．．．．」

と眠そうにメイドは言った。

すると、奥からメイドが走ってきた。

「水葉！アンタどこに行つてて．．．」

そのメイドは俺と目が合うと固まった．．．。

「あの．．．．」

と俺が話しはじめようとした瞬間、そのメイドは抱きついてきた。

「ちょ！いきなりなんだ!？」

俺は動揺せざるを得ない．．．。

「お帰りなさいませ、ご主人様．．．」

メイドはそう呟いた。

「ご主人って……俺にメイドなんかいないぞ」

でも一人、それっぽいのがうちに来たが……

「お忘れになるのも仕方ありませんよね……。私は、春風 代都^{よう}葉^はです。8年前に貴方にお仕えしていたメイドです」

その名前を聞いて微かに覚えがあるが……

俺が覚えているメイドとは全然違った。

やっぱり人つてのは時が経つと変わるもんなんだな……。

俺はしみじみそう思った。

「ってことは……この子があの水葉か？」

俺は横で壁にもたれて眠っているメイドを指さして問いかける。

「はい！思い出しましたか？」

「ああ……。しかし、やっぱり8年経つと互いに変わっちまうもんだな……」

「そうですね……。旦那様もお体の調子が優れず寝た切りな日々が2年続いております」

「そんなにひどい病気なのか？」

「それが・・・原因不明なのです。病気ではないという診断をもらい、安心はしていたのですが・・・」
未だに寝たきりでございます」

「そうか・・・どこにいる？」

「ご案内いたします。こちらへ・・・」

代都葉はそういつと、俺を伯父のところまで案内してくれた。

後ろから水葉が眠そうについてくる・・・。

眠いんなら寝とけよな・・・。

俺はそう思いつつ、代都葉の後をついていく。

この家は無駄に広い・・・。

平屋の200坪だからな。

そして、恐らく、伯父が寝ているのであろう部屋の前で、代都葉が立ち止った。

「こちらで寝ておられます」

代都葉は振り返りそう言った。

「今日はどうだ？」

「いつもと変わらずです」

今も寝たきりってことか……

「春月様、薫様がお帰りになれました」

と代都葉が言った。

しかし返事がない……………。

「寝てますね…………」

俺はゆっくり障子をあけた

やはり、伯父の春月は寝ていた。

俺は伯父の寝ている布団のそばまで歩き、正座で座った。

「起きてんだろ？春月さん」

「フツ、やはり気づいていたか…………」

「寝ている気じゃなかったからな。なんとなくだ」

「そうか……。今日は何をしに来たんだ？お前が意味もなしにこんな山奥の屋敷まで来るようには思えんがな」

「ちょっとばかり頼みたいことがあつてな・・・」

「頼み？それはなんだ？私が協力できる限りのことはしてやる」

「菜月達を豊臣家から離す」

俺がそういうと、春月は驚いた表情をする。

「おいおい何バカなことを言っているんだ、薫！！あの家系は鷺宮家と親密な関係がある！話すことなどできない！」

「寝たきりの割には元気いいじゃんか、春月さん」

「そ、それは・・・・・・」

春月は、動揺する。

「まあどうでもいいが・・・。春月さん、俺はそんな大それたことじゃない。ただ、この家で一緒に暮らしたいってだけだ」

「なんだ・・・そんなことか・・・。なら別にかまわんだろ。お前も釈放されたことだし、アドでは準優勝している・・・。お前は立派な鷺宮家の家系の人間だ。あの程度の発言は許される。しかし・・・。雪姫様からの文によると、お前、救護隊の設立を命令されたみたいだが・・・本当か？」

「まあそうだが・・・、卒業するまでは普通に過ごしたい。だから、

今度、学生武偵チームで救護専門のチームを創る予定だ」

「そうか。ならば、何か困ったことがあったら連絡してくれ」

「分かった」

俺は立ち上がり、障子に向かい歩き出す。

そして、閉める前に振り向く。

「仮病は程々におけよ、春月」

俺はそう言って、武偵高寮に帰った……

37弾 There is no man but loves his ho

鷺宮 春月（はるつき 87）

髪：白髪の角刈り

身長：179cm

眼色：ダークブルー

鷺宮家で雪姫様の次に権力を持っている。

救護関係の部隊を創設した人である。

日本医師会の元となった日本医療部隊の総長であった。

今までは戦場で活躍していたが、歳のせいもあって、今は命に任せ
ている。

ちなみに強い

春風 代都葉（よつば 25）

髪：ブラウン系の三つ編

身長：160cm B：C90

眼色：ブラウン

8年前、薫の側近メイドの一人である。
今は、春月の仮メイドである。

春風 水葉（みずは 17）

髪：ブラウン系のセミロングウェーブ

身長：157cm B：B70

眼色：ブラウン

8年前、菜月達の側近メイドである。
少し、天然だが、とてもやさしいメイドで菜月たちも慕っている。

薫の妹みたいなメイドである。

38弾 Time Slip

翌日、俺は制服のまま、寮で寝ていた。

学校をサボったというか・・・自宅謹慎になったのだ。

理由・・・それは豊臣家による圧力だ。

豊臣家は本来、俺みたいな犯罪者で在っても、P K O部隊メンバーに加えるほどの人手不足だ。

それは誰も知らない小さな戦争が∞数で存在するということを意味する。

人の欲・・・他者の身勝手・・・犠牲になる民衆・・・。

それを救うのがP K O部隊<ピースメーカー>の役目なのである。

出発式は来週の金曜日・・・。

今日は木曜日・・・、あと8日・・・。

このことは誰も知らない。

知っているのは、マスターズ教務科の綴だけだ。

俺は寮でグッスリ眠っていた。

クリスマスもまだ眠っている。

椿には今日は休むと伝えた。

すると、チャイムが鳴った。

俺は起き上がり、玄関に向かった。

そして、ドアを開けた。

「すみません、鷺宮薫様のお宅でしょうか？」

それはタダの配達員だった。

「そうですが・・・」

「北海道の鷺宮雪姫様という方から小包をお預かりしています。こちらにサインをお願いできますか？」

「ええ・・・」

俺は指定されたところにサインした。

「ありがとうございます。それではこちらが小包です」

俺はその小包を受け取った。

「それでは、失礼します」

と配達員は帰って行った。

俺は小包を持って、ドアを閉め中に戻った。

「なんだ・・・これ・・・」

俺はそう呟きつつ、小包を開けた。

小包の中には、コルト シングル・アクション・アーミー“ピースメーカー”と手紙が入っていた。

俺はその手紙を広げて、黙読する。

<薫へ こんなことに巻き込んでしまつてすまない・・・。だが、これから戦地に赴く身になるのになれば、一度は行つて現状を理解することも大切だ。そしてお前の為すべきことがいかに大切か理解した上で、鷺宮本家に来てくれ。これは餞別だ、お前に託す。 雪姫より>

俺はその手紙の意味をある程度理解した。

そして、ピースメーカーを手を取った。

ピースメーカーの回転式弾倉シンダーを開けてみる。

中には・45 Long Colt弾が装填されていた。

しかし・・・少し錆びれている・・・。

手か使えるのかこれ・・・？

俺はふと、銃身バレルについた刀傷に気づき、指でなぞった。

すると、なんだか目の前が真っ暗になり、頭痛に苛まれ、そのままブラックアウトした……。

しばらくして、俺は目を覚ました。

しかし、俺はどこに寝転んでんだ……？

さっきまで確かに寮の部屋にいた。

だが今は、知らない草原で寝転んでいる……。

俺は右手に何か握っている様だったため、右手に握られたモノを見た。

さっき部屋で箱から取ったばかりで錆びたピースメーカーが……新品同様に光っている。

意味が分らん……。

何がどうなってるんだ？

てかここはどこだ!?

俺はどこに立ってんだ!?

地平線の真ん中でなに突っ立ってんだ!?

ん? 地平線……?

てことは……

「北海道う

!」

俺は風吹くなか叫んでしまった。

「お、落ち着け自分……。まずは整理しよう。俺は部屋でピースメーカーを箱から取り出して、刀傷を指でなぞって……。頭痛が起こって……。」

今に至りました……。

だが……。何もないな……。

俺は携帯を取り出した。

しかし圏外だ……。

「さうて……。どうするかな……。」

俺はそう呟き、空を眺めた。

「お主はそこでなにをしている？」と背後から声がした。

どこか聞いたことのある声だ。

俺は声のする方に振り向いた。

そこには、雪姫様が居た。

「雪姫様……？」

俺がそういうと、雪姫様は驚いた表情をして後ずさる。

「何故私の名を知っておる！？さては幕府の人間か！？」

「幕府って……何百年前の話ですか……」

「その様子だと幕府の者ではないみたいだな。名をなんという？」

「あの……ふざけてます？薫ですよ、薫」

「私はそのような名の者は知らん。それに、見たことのない身なりをしておるが……お前は西洋人か？」

西洋人って……まさか……

「つかぬことをお伺いしますが……今は何年で？」

「寛文10年だが……なぜそのようなことを聞く？」

「いや．．．別にこれといって意味は．．．」

おいおいマジかよ．．．．．、タイムスリップしてやがる．．．．。

そんなのアニメの中の話じゃねえんだから．．．．。

でもそれなら辻褄が合う．．．．。

このピースメーカーが新品同様になったわけか．．．．。

「帥の持っているモノはなんだ？」

と雪姫様が俺に近づき、俺の握っていたピースメーカーを指さした。

そういえば、まだ武偵つてのが無い時代だな．．．．。

「西洋で造られた銃ですよ」

この時代ではまだ造られていないのだが．．．．

「ほう．．．、少し見せてくれんか？」

俺はピースメーカーを雪姫様に渡す。

雪姫様は興味があるのか、じっくり観察している。

「これは中々のものだな．．．．」

雪姫様はそういうと、ピースメーカーを返してきた。

俺は受け取って、腰にさした。

「帥、薫といったな？」

「ええ……」

「そう固くなるな。薫よ、行くところが無いのなら家に来い。歓迎してやる」

「は、はあ……」

俺は少し対応に困った……。

が、どうせ行くところも何もない。

だから着いて行くことにした……。

まわりを見る限り、草原が広がっている。

しばらく歩くと、テントの様なものが集まって村の様になっていた。

ここがアイヌ民族の集落か……。

資料で見た絵より、綺麗だな……。

当たり前か……。

てか……周りの目線が痛い……。

雪姫様はこの集落の中で一番デカイテントに入って行く。

俺も後について入る。

「そこに座っていてくれ」

俺は言われた通り、そこに座った。

しかし……何もないなここ……。

「どうした？」

「いいえ何でもありません。ですが……やけに少ないですか？」

「この前、松前藩の兵が戦を仕掛けてな……。それで多くの命を失ってしまった……」

雪姫様は何か飲みモノをコップに入れて俺に渡してきた。

「これは……」

「ヤギの乳だ。温めて飲むとおいしいぞ」

初めて飲むな……

俺は少し抵抗があつたが……飲んだ……。

味は思ったよりはおいしかった。

「しかし、お前は西洋からどうやって来たのだ？」

「ふ、船で……」

ホントは未来から来ました。

なんて言わない方がいいだろ……。

「そうか。いつまでここに居るんだ？」

質問ばかりだな……

「さあ分かりませんね……」

帰り方が分からん以上、何もできん……。

とにかく……何か手を考えなければ……

「そうだ、薫。今から私と付き合え」

「別にいいですが……どこに行くんですか？」

「着いてくれば分かる」

俺は雪姫様の後をついて行く。

すると、馬が数頭いた。

雪姫様は一頭の馬に乗った。

「さあ後ろに乗れ」と雪姫様は手を差し伸べてきた。

俺は躊躇いつつ、手を握り、馬に乗った。

「ちゃんと掴まっているのだぞ！」

と雪姫様が言った瞬間、いきなり馬が走り出した。

俺は雪姫様にしがみつくことしかできなかった。

馬で駆ける雪姫様は、とても笑顔で、楽しそうだった。

「どうした？何を脅えておる？」

「い……いや脅えているわけじゃないですが………なんだか今の雪姫様は新鮮で可愛いなあ〜と
思って……」

「まるで未来の私を知っているみたいだな」

「……ええ」

すると、雪姫様は馬を止めた。

「ここだ」

俺は馬から降りて、周りを見渡す。

そこは海が見える草原であつた。

「どうだ？ 凄いだろ？」

「ええ、とても美しいです」

「なあ薫、今お主は未来の私を知っていると云つたが……、未来では私はどのような身なりをしている？」

「今と変わらず、美しいですよ」

「美しい……か……。私には似合わぬ言葉だな……」

「そんなに謙遜しなくてもいいですって……」

「もう一つ聞く、これからこの日の国はどうなるのだ？」

「……世界大戦という戦争に巻き込まれ、多くの命が奪われます。その時に……誰もが助けを求めた。しかし、誰も助けてくれず……。ただ……息絶えるのを待つばかり……。雪姫様、私はこの国で苦しむ者が居ること自体が間違っていると思います。もし、苦しんでいる者が居るなら手を差し伸べるのが義というものと私は思います」

「しかし、私には何もできん……」

「できますよ……。名を変え、この土地に拠点を置き、苦しんでいる日本……。日の国を助けてやるべきです」

「……。それが未来の私がしている事か？」

「ええ……。とても立派な組織になっていますよ……。そして・
・貴女はその組織を指揮している・
る・」

「それも……。面白いかもしれん……。薫、お前の族名を与えてはくれぬか？」

「私の族名であるく鷺宮くをですか？」

「そうだ。そしてお前が言った日の国を救う組織とやらを創って見せる・」

「……。頑張ってください」

「さあ、戻るとするか」

雪姫様がそっくり、馬に近づいた瞬間、爆発音がした。

俺はすぐさま、煙が立ち込めているところを見つけた。

「あそこって……。集落がある所じゃ・」

「そんな・」

雪姫様はショックのあまりか、膝から崩れ落ちた。

「雪姫様！―そんなところで座つていても何もなりませんよ！」

しかし、雪姫様は動く気配が無い。

俺は嫌気がさし、雪姫様をだっこして、馬に飛び乗り、集落に急いで向かった。

ここから集落は早くて10分掛る。

馬は急いでくるつもりみたいだが、今の俺には遅く感じる。

FSSモードの俺にはな。

そして、馬は疲れ果てたのか、到着してそのまま座り込んでしまった。

俺はピースメーカーと懐に入れていたガバメントを取り出し、二丁^{ツイン}拳銃を構えながら

、歩いて集落に入っていく。

後ろに雪姫様を連れて、奥まで進むと、あちこちのテントから火が出ている。

恐らく、火矢で射られたんだろう。

すると突然、火矢が飛んできた。

俺は咄嗟にガバで弾き飛ばした。

火矢が飛んできたところを見ると、鎧や兜を被った男どもがわんさかと湧いて出た。

よく見てみると、デカイトントにほとんどの民衆が逃げ込んでいた。

「雪姫様、貴女はテントに行ってください。後は私が何とかやりま
す」

「し、しかし・・・」

「お願いですから・・・、約束だけは守ってくださいね・・・」

俺は雪姫様に微笑んで見せた。

「・・・分かった。ならばお前も約束してくれ。未来の私に手を貸
す・・・と・・・」

「もちろんです!」

俺はそう返事をした。

すると、雪姫様は微笑み、テントへと向かった。

さうて・・・、さつさとやっちまうか・・・

「貴様、異様な身なりをしているな。さてはアイヌの援軍か?」

「まあそんなところかな。で、俺はお前たちを追い返さないといけないんだが・・・、死にたくなかったら身をここから退いてもらおうか？」

「何を今さら・・・。お主がワシらの邪魔をするのなら、お主もただでは済まぬぞ？」

俺は、ガバでその調子に乗った奴を撃った。

もちろん、死にはしない程度だ。

しかし、気絶はするがな・・・。

その倒れた侍を見て、周りの兵も後ずさった。

「さっさと帰れ！」

「こ、このオ——！！」と若い武士が俺に刀で切りかかったので、俺はピースメーカーで刀を受け止めた。

恐らくこれで傷がついたのだろう。

「うつぜエーんだよ！！」

俺はそう叫んで、ガバを若い武士に向けて撃った。

若い武士も、気絶した。

「さっさと退きやがれ」

俺がガバとピースメーカーを向けると、兵は全員退いた。

もちろん、気絶した奴らを連れて……。

さてと……俺はテントの中に入った。

「どうなった？」

と雪姫様が俺に問いかけてきた。

「退きました。反脅しでしたが……」

「そうか……、迷惑をかけてすまないな……」

「別に……、ちょっと雪姫様、話があるんですが……」

俺は雪姫様を拱いた。

そして、外で二人つきりになった。

「なんだ？」

「もうそろそろ、時間みたいです」

俺はさっき気づいた……。

俺の体は薄れかけていた。

「どっということだ!？」

「未来に帰る時間みたいです……。だけど、心配しないでください、恐らくこの銃を持っていればあつちも襲ってきませんよ」

俺はピースメーカーを雪姫様に渡した。

「だが……。これは薫の大切なものでは……」

「いいですよ……。それは貴女に差し上げます。使い方は危ないのでお教えできませんが……。もし、幕府の人間が襲ってきたら、サクサイヌの生まれ変わりから託されたモノだと見せれば脅えると思います」

「……。そうか。お前はサクサイヌの生まれ変わりか……。分かる気がする……。元気だな……」

「雪姫様も……。お元気で……」

そして俺は再びブラックアウトするのであった……

しばらくして、俺は目を覚ました。

いつも見る天井がなんだか懐かしく感じる。

俺は起き上がり、握られたピースメーカーを見る。

そのピースメーカーは間違いなく、俺の手に有った。

まあいい……。

俺はそう思いつつ、工房に行き、銃倉庫にピースメーカーをなおした。

そして……。俺はこの前、須田から送られてきたジャンク品から、使える部品を取り出す作業を始めた……。

しばらくして、時計を見ると、もう午前10時30分……。

そろそろクリスマスも起きてくるだろう。

どうせ……今日は外に出れないし……。

俺はリビングに出て、背伸びをした。

さうて何するかな……。

すると、携帯が鳴った。

着信音に、俺は少し動揺した。

この着信音は……姉さんだ……。

豊臣家 P K O部隊<ピースメーカー>の一部隊の隊長をしている
茜姉さんと同じ年の姉……。

豊臣 光希^{みき}……。

P K O部隊<ピースメーカー>の中で極少数であるチーム<メシア>の隊長で在り、薫が尊敬している人物である。

3年前から一切の連絡を取っていなかったが、今になって電話が来ている。

なぜだ……」

とにかく、出てみることにした。

「もしもし……？」

『出るのが遅いぞ、薫』

「すみません……」

『まあいいや。今、男子寮の下まで来てるんだけど……、今部屋に居る？』

「ああ、自宅謹慎中だから……」

『晃史の仕業……か……。まあ丁度いいつか……。今からそっち行くね、そんじゃあ、切るね
エ』

と言って、光希姉さんは電話を一方的に切った。

「光希姉さんが来るのか……。……待てよ……。さつき男子寮の下に居るって言ってたような……。……
てことは……。……」

すると、ピンポンとチャイムが鳴った。

俺はすぐに悟った……。。

今、扉の向こうに光希姉さんが居る……。

そして、俺は振り向いた。

あの寝室にはクリスが居る……。

鉢合わせした時はどうなるのだろうか……。

想像しただけでも恐ろしい……。

俺は勇気を振り絞って、玄関に向かい、ドアを開けた。

ドアの向こうにはやはり光希姉さんが立っていた。

「よゝっす、薰うゝ。3年ぶりだな」

「あ、ああ……」

相変わらず、美少女的な顔である。

てか、なんで鷺宮家と豊臣家はこういう顔つきが多いんだ……？

まあ、今さら疑問に思ったところでなにも変わらないがな……。

「中、入っても問題ないか？エロ本とかは片付けているか？」

「そんなもんは無エ！！てか、俺の体質知ってんだろ……」そ

俺がそういうと、光希姉さんは薄らと微笑んだ。

「確か、異性不感情病・・・だったか？」

「そうだよ・・・。てか、早く入れよ・・・」

「そうだな、それじゃあお邪魔します」

と光希姉さんを中に招いた。

そして、ソファに座らせて、キッチンに向かおうとした時、寝室のドアが開いた。

もちろん、俺は慌てて振り向いた。

光希姉さんも振り向いた・・・。

俺と光希姉さんは、寝室のドアを開けた張本人・・・クリスを見て、一瞬、空気と共に固まった・・・。

「薫様、お客様ですか？」

とクリスは目を擦りながら、俺に問いかけてきた。

「まあな。それよりもう少し寝てても・・・」

「あら、別にいいじゃないか。ちょっと話さないか？」

「別にかまいませんが、少々お待ちください」

とクリスは言って、洗面所に向かった。

「何のつもりだよ……姉さん」

「お前も隅に置けないな。彼女が居るなら要るって言うてくれればよかったのに」

「彼女じゃないって……。ちよつとわけあつて匿つてるだけだ」

「その言い方じゃあ、まるで命を狙われているってところかしら？」

「そんなところだ。だから、姉さんが思っている様な関係でもないし、厭らしい関係でもない！」

俺はそう断言した。

「でも、茜つちから聞いたけど、もう一人訳ありな少女を匿つてるって聞いたぞ？」

なんでもう情報が流れてんだ………。

「そうだけど、そいつも訳ありなんだよ……。とにかく、二人とはそんな関係ではございません！」

「まあお前がどうであれ、心やさしいのは私を含め、命と茜つち、雪姫様は知ってるぞ」

光希姉さんはそういうと、足を組んだ。

「まあどう思おうと勝手ですが……、俺は自分の義を通すだけですよ」

俺は、キッチンに向かい、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、蓋を開け、飲んだ。

「私にもくれないか？ちよつと喉が渴いた」

「別にいいけど・・・」

俺は冷蔵庫からミネラルウォーターをもう一本取り出し、光希姉さんに投じた。

光希姉さんは片手で簡単にキャッチした。

「サンキュー」と言つて、光希姉さんは蓋をあけて、水を口に含んだ。

すると、クリスがバシッとメイド服に身を包んだ状態で現れた。

「お待たせしました」とクリスは言つて、会釈をした。

「ほゝ、メイド服で生活してるのか？」

「はい、そうですか」

「薰うゝ、お前も隅に置けないなゝ。メイドを雇うなんて・・・」

「だから訳ありだつてえの！！てか、光希姉さんから何か話があるんだろ？」

「あ、そうだそうだ。ねえ貴女、薰とどういう関係？」

「だから……」

「そういう方じゃないの。実際問題、どうしてアンタとであったのか……。ただの巡り合わせじゃないんでしょ？」

俺は光希姉さんが言った言葉に反論できなかった。

確かに、こいつと出逢ったのは巡り合わせじゃない。

最初はヒットマンとして俺の前に現れた。

だが、姉さんが知ったところで必要ないだろ……。

「ねえ、本当のことを話してくれない？」

姉さんは、椿の目を見つめて問いかけた。

クリスは、目を反らし、俺にアイコンタクトで言ってもいいのか、問いかけてきた。

俺は、話してもいいという意味で頷いた。

そして、クリスは話し始めた。

（中略）

「ふん……なるほどね。そりゃ薫の方が正しいな」

当たり前だろが……

「でも、クリスちゃんもいい主に出逢えたね。こいつは仲間想いのいい奴だからな。仲間のためなら

盗みすらしてしまうほど、仲間優先なんだ。それに、武偵としても世界第二位の実力だしね」

「なんで知ってんだよ！！てか、みんなどうやって知ってんだ！？」

「そんなの簡単よ、武偵局に問い合わせれば、アンタのことなんて筒抜けよ」

「おいおい……。今度から武偵局を信頼できないかもな……」

「まあいい……。で、今日来たのはそういうことを言いに来たんじゃないだろ？」

「あ、そうそう忘れるところだった。今度、お前が行く戦地なんだが……。今回、お前は初めてと聞いたから、任務内容としては救護だ。アンヘヒュラス戦争で被害に遭った地域で負傷者や病人の手当てに当たる。いいな？」

「ああ。その為に俺は参加するんだからな」

俺の本当の目的は、戦争で被害に遭った地域を救うこと。

そして、できるのなら、その地域を戦場になる前の風景に戻してあげたい……。

だから、武偵で在り、一人の人間として生きてきたんだ。

「あの・・・薫様、先ほどから話を聞いていると、まるで薫様が戦地へ赴くように聞こえるのですが・・・」

クリスは、不安そうな顔をして、俺に問いかけてきた。

「・・・ああ。だが心配するな、そこまで危険なところに行くわけじゃない。ただ、戦争で被害に遭った人たちを助けに行くだけだ」

「・・・そうですか。なら、私もお供いたします」

俺はクリスの言った言葉に耳を疑った。

「お供するって・・・、連れて行けるわけないだろ・・・」

俺は頭を抱えて、溜息をついた。

「あら、どうして？」

「はっ！？何言って・・・」

「クリスちゃん、貴女、医療の経験と戦闘に対する基本は身につけている？」

「ええ、大抵は小さい頃に学んでいます」

「そう。なら着いてくる資格はあるな」

姉さんはそういうと、俺をヤラシイ眼で見てきた。

「な．．．なんだよ．．．？」

「いいや何もないぞ。ただ、お前はクリスマスちゃんの行為を無駄にするような人間なんだなア」と思っ
て
ね」

姉さんはクリスを連れていく気満々だ．．．。

こうなったら、部屋一つ吹き飛ぶような喧嘩をしないと收拾がつかない．．．。

「わかった．．．、連れていけばいいんだろ．．．連れていけば」

俺は渋々了承した。

「ありがとうございます」

クリスは軽く会釈をしてきた。

「そうそうそうこないとな。で、もう一人はどうする？」

「恐らく、椿も行くって言うだろう．．．。その時は連れて行くしかない．．．。」

「そうか。まあ私的には何人来ようが歓迎するさ。あ、あと一言
い忘れていたが．．．、今日はここに泊めてもらうからな」

「なんでだよ！？てか、ホテル取ってんじゃないのか！？」

「なぐに言ってるんだよ薰うゝ。今日なんで謹慎状態なのか忘れたのかアゝ？」

「そりゃあ晃史の・・・・・・・・・・」

俺は察してしまった・・・・。

事の現況が・・・・光希姉さんの仕業ではないのかと・・・・

「やっと分かったみたいだな・・・・。気づくにが遅すぎるぞ」

「なんでこんなことしたんだよ・・・・？」

「昔した約束は果たすさ」

「約束？」

「忘れたのか？無理もない・・・・。約束をした時はお前はまだ12だったからな・・・・」

「何を約束したっけか・・・・？」

俺は頭を抱えながら悩んだ。

しかし、思い出せない・・・・。

「く絶対、強くなったら光希姉さんと茜姉さんの背中を護る・・・・。

> だったか・・・」

・・・思い出してしまった。

俺はそんな台詞を吐いた自分に怒りを覚えた。

「若気の至りだ・・・。忘れてくれ・・・。」

俺は熱くなった面を両手で覆い、呟いた。

「忘れないさ・・・。お前がそう言ってくれた時、私と茜は救われたのさ」

「俺は何もしちゃいない・・・。ただ・・・そんな時は本気で守りたいと思ったただけ。何も分かってない俺がな・・・。」

「まあお前が仲間想いなのは知っているからな。取りあえず、今日は和食で頼む」

「さり気無く夕食のメニューを要望するな!!」

「いいじゃないか、せつかく日本に帰れたんだからさ。とにかくよろしくね、クリスちゃん」

姉さんはクリスに敬礼して、言った。

「残念ながら、私は和食というものを作ったことがございません」

クリスはそういうと、一礼した。

「えゝ、そんじゃあ薫、作って」

「嫌だね。俺だって忙しいんだ」

「ハアゝ、仕方ない……。今日は我慢するかな……」

姉さんはそういうと、ソファから立ち上がり、寝室に向かっていった。

「薫様、あの方は一体……」

「ああ、俺の母さんの妹だ。ああ見えて、戦場の救世主（サルヴァトーレ）と呼ばれるほど戦場では有名なんだが……。そこら辺に居る武偵っ娘となんら変わらんさ」

俺はそういうと、ソファに寝転んだ。

「クリス、俺は少し寝るが、後は好きにしていいいからな」

それはクリスにそう言って、眠りについた……。

堇葵サイド……………

ハアゝ……、退屈だなゝ。

後で薫先輩のところに行こう・・・。

私はそう思いつつ、眠気を我慢して、授業を受けた。

そして、やっと午前の授業が終わり、2年A組の教室に向かうとした時、遠山先輩と遭遇した。

「あ、遠山先輩、薫先輩は教室に居られますか？」

「ん？薫なら休みだぞ」

私は驚きのあまり、ぽかんと口を開けて固まった。

「お、おい・・・。大丈夫か？」

「え、ええ。すいません！でもどうして・・・」

するとそこに綴先生が現れた。

「おゝ、鷺宮の戦徒^{アミカ}アゝ。まさか遠山に告白かア？」

「ち、違います！！それより、先生は薫先輩が休んでる理由知ってますか？」

「あゝ、あいつなら自宅謹慎だぞオゝ」

「「自宅謹慎！？」」

私と遠山先輩は驚いた。

「なんでだよ!？」

「そ、そうですね!薫先輩が何をしたって言うんですか!？」

「あゝ、私も詳しくは知らないんだが・・・上からそう連絡があった。でもまあ、明日からは出てくるだろ」

綴先生はそう言って、その場から立ち去った。

「まああいつが謹慎問題を起こすとは思えんが・・・、今日あいつの部屋に行ってみるかな・・・」

「あ、私もお供していいですか？」

「あ、ああ。別にかまわんが、アリアも来ると思うぞ」

「それがどうしたんですか？」

「いや・・・、別にないが・・・」

遠山先輩はそういうと、目を反らし、その場を立ち去った。

神崎先輩・・・どんな人間なんだろ・・・。

私はそう思いつつ、午後の授業を受けに行った・・・。

そして午後になり、遠山先輩と神崎先輩と共に薫先輩のところに向かった。

その途中、夜食の材料を買うため、スーパーに寄った。

「さてと・・・今日はすき焼きでも作りましようかね」

私はそう呟いて、すき焼きの具材と調味料、卵を買った。

ふと、お菓子コーナーを覗くと、神崎先輩がキヨロキヨロとしていた。

「神崎先輩、なにしてるんですか？」

「べ、別に何でもないわ！」

神崎先輩はそういうと、頬を赤らめつつ、ツンとした態度をとった。するとそこに、遠山先輩が現れた。

「買うもんかったか？」

「あ、はい。ある程度は買いましたよ」

「そうか、ならさっさと行くぞ」

遠山先輩はそういうと、歩き出した。

私と神崎先輩は着いて行く。

スーパーを出てしばらく歩くと、見知らぬメイドと出逢った。

メイドは私達に気づくと軽く会釈をして、男子寮の方へと歩いて行く。

「確かあいつは薫の知り合い……」

遠山先輩は不意にそう言った。

「へえ、薫先輩の知り合いですか」

すると、後ろから、誰かが歩いてきた。

「あ、椿、アンタも今帰り？」

「はい。薫様が心配ですから少し早めに切り上げてきました」

この人も薫先輩の知り合いなんだ。

なんだか、薫先輩って顔が広いんだな。

「椿、お前は何か聞いてないのか？」

「いいえ。昨日、薫様に電話が来て、それから自宅謹慎だと……」

「いったい何をやらかしたんだか……」

「恐らく、あの方の仕業でしょう」

椿さんという人はさういうと、歩き出した。

私達は椿さんについて行く形で、男子寮に向かった。

男子寮の薫先輩の部屋にたどり着くと、椿さんはチャイムを鳴らした。

すると、さつき遭ったメイドがドアを開けてきた。

「お帰りなさい、椿」

「ただいま」

そついう日常会話をした後、私達は部屋の中へと招かれた。

「薫様、お客様がお見えです」

メイドはソファで寝ている薫先輩を起こした。

「ん・・・、ああ、どうした？3人して・・・」

「どうしたじゃねえよ・・・。一体なんでお前は自宅謹慎なんだ？」

遠山先輩は直球で聞いた。

「姉さんが俺に会いたいわってだけの理由さ・それ以外はない」

「なんて理由だよ……」

「そんなこといって、学校をサボろうとしたんじゃないの？」

神崎先輩……それは無いと思う……。

私はただ苦笑する。

「そんなことしねえよ……。でも、心配掛けたな……。悪い」

「別にいいって。どうせ隣同士なんだからよ。それよりお前が休んだって言ったら、戦徒^{コイツ}が一番驚いてたぞ」

「と、遠山先輩!!」

私は恥ずかしくなり、頬が赤くなった。

「すまないな堇葵……、心配掛けて……」

「いいんです。何もないならそれで……。あ、今晚の夕食は私が作りますね」

「悪い……。なあ堇葵、ついでと言っちゃなんだが……。クリスに和食の作り方を教えてやってくれないか？」

「え？私なんか教えてもいいんですか？」

「お願いします」

クリスマスというメイドは礼儀正しく、私にお願いしてきた。

「わかりました。これからもたまたまに教えますね」

そうすれば薫先輩と会う時間が増えるしね・・・。

薫サイド・・・・・・・・・・

まったく・・・・この部屋も賑やかになったもんだ・・・。

「キンジ、明日から学校には行けるんだが・・・、ちょっと行くところがあるから休むと伝えてくれ」

「ん？どこ行くんだよ？」

「ちょっと・・・な。まあ気にすんなや。俺はちょっと寝るから・・・」

俺はそう言い残し、寝室に入った。

寝室に入ると、右側二段ベッドの下で姉さんが寝ていた。

俺は左側二段ベッドの下に寝転んだ。

月奈つきなが死んでもう半年・・・か・・・。

月奈が死んだことはみんな知らない。

知っているのは俺と、あいつの家族だけだ。

月奈とは、俺が編入してきた時からパートナーを組んでいた強襲科
生徒であった。アサルト

アドの時、俺が負けたのも月奈であった。

が、月奈は自殺した。

月奈が自殺した日、俺は月奈と縁切りになるほどの大ゲンカをした。

原因は俺が月奈と縁を切って、武偵を辞めると言ったからだ。

正直、なんであんなことを言ったのか分からない。

今はただ・・・後悔しかない・・・。

恐らく、異性に関心をわかないようになったのはその時からだと思う。

今まで・・・俺は・・・何を生きがい生きてきたんだ・・・。

俺はそう思いつつ、目を閉じた。

しばらくして、俺は自然と目を覚ました。

もう部屋は電気をつけていないため、真っ暗だ。

俺はベッドから起き上がり、リビングに向かうと、既にキンジとアリアは帰っていた。

「キンジとアリアはどうした？」

「居ても仕方ないからって、帰りましたよ」

ふう、危ない危ない……。

危うく姉さんと遭ってしまふところだった……。

すると、寝室から姉さんが起きてきた。

「おゝ薫、おはよう……。」

「寝むそうだな……。」

「あの……薫様……、その方は一体……。」

「この人は俺の姉だ」

正確には俺の母さんの妹だがな。

「そうでしたか。はじめまして、薫先輩と戦徒契約アミカしている菫葵水姫といいます」

菫葵はそういうと、一礼した。

「これはこれは丁寧に……。私は薫カオルの母親の妹で豊臣 光希だ。
よろしくね」

「はい！こちらこそよろしく願いします！」

「はいはい堅苦しいのは後にして、もう夕食にしようぜ……」

「あ、そうですね。今できたところです」

と薫葵はそういつて、クリスと作ってくれたすき焼きを5人で食べるのであった……。

39弾 She was looking forward to seeing

豊臣 光希^{みき}（18）

髪：漆黒のショートカット

身長：162cm B：B70

眼色：ダークブルー

薫の母親の妹でPKO部隊の一つであり、極少数部隊<メシア>のチームリーダーであり、戦場の救世主（サルヴァトーレ）の二つ名を持っている。

強さは茜と等しい。

薫の味方の一人である。

40弾 Invisible vs Invisible

そして翌日、俺は千葉にある月奈の実家にある墓に、墓参りに来ていた。

もちろん、独りで来ている。

光希姉さんは、早朝4時に部隊員が迎えに来て、北海道の鷺宮家に向かった。

椿は学校、クリスは琴音さんの手伝いに行っている。

墓に線香を焚き、合掌する。

目を閉じ、瞑想に入る。

「ごめん……」

俺はそう呟き、目を開けた。

そして、桶を持って、その場を立ち去った。

桶を住職に返し、俺は来た山道を歩いて帰る。

この道を通るのは、納骨の日以来だ。

俺はどんな思いでここを通ったんだろうな……。

あのときは、俺自身覚えていない……。

まさにその時の俺は、心ここに有らずだった……。

俺は地面を見つめて、立ち止った。

この気配……

俺はふと、後ろを振り向いた。

「誰か居るのか？」

しかし、何も返事はない。

気のせいか……。

俺は再び歩き出した。

しかし、気配はいつになっても消えなかった。

正直、イライラする……。

しかもその気配は恐ろしいほど嫌な気配だ……。

そろそろ……撒いてみるかな……。

俺は林に入り、走って行く。

しかし、気配は一向に消えない。

てか、もう一人増えた。

俺は咄嗟にワイヤーで木の上に登った。

忍びの心得というものは持つちゃいないが、この程度なら俺にもできる。

すると、下に長い三つ編の髪型の女性と、俺も知っている少女が来た。

去るまで待つてみるか……。

ちなみに俺は気配を消すことができる。

まあ泥棒にとっては標準的に身についている。

しばらくして、二人はどこかに走って行った。

いま降りてもいいんだが……、見つかると厄介だしな……。

俺はそう思いつつも、降りた。

そして、急いでその場を去った。

駐車場に停めてあった車に乗り込み、急いでその場を逃げ出そうとした時、何かに車の後方を掴まれたように、進めなかった。

車が力負けするような力と言ったら……あいつの像^{ツレ}しかないわな……。

それは咄嗟に車から脱出した。

その瞬間、車は動く像によって破壊された。

「あらら・・・、パトラも大胆なことしやがるよな・・・。どうしてくれんだよ？」

「帥が逃げるからじゃろ」

パトラは不気味な笑みを俺に向けて放つ。

「相変わらず可愛くねえ女・・・」

「そういう帥は、相変わらず警戒心が解けておらぬな。昔と変わらず・・・」

「うるせえよ・・・。それより、今日はなんの様だ？俺はもうイ・ウーのメンバーじゃない。
もう俺に関わるな」

「薫、お前はそのつもりだろうが、教授はそうは思^{フロフェション}っては居らぬぞ」

「なら奴に伝えとけ、俺は忙しいから相手にすんなって」

すると、茂みの奥から三つ編みの女性が現れた。

「これはまた続々と・・・、俺は忙しいんだってエの・・・」

「そうはいかないわ。教授が貴方^{フロフェション}に会いたがっているの。着いて来てくれるかしら？」

こいつ……俺の話を聞いていないのか……。

「だから……。」

俺が反論しようとする、三つ編みの女性は、ピースメーカーを取り出し、銃口を向けてきた。

「無理……とは言わせないわよ」

俺は後ろを瞬見ると、パトラの像が槍の矛先を俺に向けてきている。

面倒だ……。

さうて……どうしたものかな……。

俺は懷からDE・50AEを取り出し、女性に向ける。

「俺はさつさと帰らないといけないんでね。ケリをつけて終わらせてやるよ」

「薰！キンイチに銃を向けるでない！！」

知るか……。

「それは宣戦布告とっていいのよね？」

「好きに思ってくれてかまわない。俺はアンタがやるって言っんなら、本気で戦う！」

俺がそういうと、女性は不気味な微笑みを見せた瞬間、俺の懐に何か気付かなかったが、弾丸がめり込んだような衝撃を受けた。

俺は体勢を崩し、片膝をついた。

実際に食らったことは初めてだが……プロフェッショナル教授が使っていたことは覚えている……。

「不可視インヴィジブル乃銃撃……」

「あら、知っているのね。まあそれが分かったところで防ぎようはないけど……」

「いいや、今のでハッキリと分かった。アンタが描く、ルト弾道がな」

俺は余裕の笑みを見せつける。

「なら……お手並み拝見と行こうかしら!」

女性はそういうと、再び不可視インヴィジブル乃銃撃を放った。

俺は放たれた弾丸を、DEで撃ち落とした。

もちろんこつちも不可視インヴィジブル乃銃撃だ。

「ヘエ、貴方も使えるのね……」

「目には目を、刃には刃をつてね……。同じ芸当ができるからと

いつて、強弱はあるさ。

さっきのは、俺の方がアンタより、2秒ほど遅れた。一歩間違えれば、『死』だな……」

「そう言ってる割には、表情には余裕が窺えるけど？」

「そりゃそうだろ。俺だってアンタみたいな奴に会えて、アルジェント・ルーパー銀狼としての血が

騒ぐ！」

俺は、懷からサバナイを取り出し切りかかった。

カキンッと、パトラの像が受け止めた。

「目的を忘れるな、キンイチ。こいつの相手をしていては限が無い」

「私は相手をしているつもりもないけど……そうね」

「チツ……、まったく……、俺は帰らせてもらっぞ」

俺は180度周り、破壊された車を粒子分解する。

粒子分解してしまえば、塵とかすだけだ。

「待て、薫」

「なんだ？パトラ。俺は夕方までには帰らないといけないんだ。誰かさんが車を壊しやがったせいで時間がなくなった。車さえ無事なら余裕があつたのだが……」

「帥が逃げるからであらう。それより、お前に忠告しておく」

「忠告？」

「もう神崎という奴とは関わるでない。そうしなければお主は消されるぞ」

「今さら、関わるなって言われても、もう後戻りできないって・・・」

「なら、貴方とは戦う運命になるみたいね・・・。もし、貴方がこつちに来てくれば、敵同士にならなくて済むと思ったのに・・・残念」

「どちらにしろ、お前らとは敵だ・・・。また、会う時になったら相手してやる」

俺はそう言って、その場を立ち去った。

駅まで歩いて向かい、少々時間はかかったが、昼前には到着した。

流石に、あの二人もここまででは追ってこなかった。

まあ、ここまで追いかけてきたら、ここは火の海決定だろう・・・。

しかし・・・あの三つ編みの女の人は一切何者だ？

どこか・・・キンジに似ていたような・・・。

まあいつか・・・。。。

俺は東京行の電車に乗って、東京に戻った・・・。。

41弾 expose an Kaoru

俺は寮に帰りつき、部屋に入って、カギを閉めた。

「畜生．．．、肋骨が数本折れてやがる．．．」

俺は懷の痛みを抑えながら、寢室に向かう。

どうせ、明日には治っているだろうが、今は痛み止めを飲まない
地獄だ。

寢室に入り、ベッドの下に有る薬箱から痛み止めを取り出し、服用
し、ベッドに寝転んだ。

薬が効き始めるまでは、地獄だ．．．。

しかも、一番効きが悪い奴しか残ってなかったし．．．。

あゝ買つとけばよかった．．．。

俺はそう思いつつ、ブラックアウトするのであった．．．。

堇葵サイド．．．。

今日も薫先輩は休みだ．．．。

遠山先輩の話によると、千葉まで用事があつて行っているらしい．．

・。

そういえば、前は群馬、北海道っていろんなところに行ってるみたいだし……。

暇なんだろうな……。

私は強襲科実習場の射撃練習場でクーガーを放っていた。
アサルト

マガジンをリロードして、再び構える。

このクーガーは薫先輩から貰ったもので、戦徒契約アミカの時に渡された。性能的にはベレッタM92Fより劣るらしいけど、それほど差はないらしい。

その上、私の手にもピッタリフィットするから扱いやすい。

私が、クーガーを構えた時、後ろから椿先輩が歩いてきた。

「あ、椿先輩。強襲科アサルトになんか御用ですか？」

「薫様から、貴女に弾を持って行くように朝言われていたもので、持ってきました」

「そうですか。ありがとうございます」

私は、9×19mmパラベラム弾が50発入りの箱を受け取った。

「あ、いいこと思いつきました。貴女のクーガーをここでオーバー

ホールしましょうか？」

「え？でもここじゃあ……」

「大丈夫です。道具はあるので」

「……それではお言葉に甘えて」

私はクーガーを椿先輩に渡した。

薫サイド……………

俺はしばらく眠った後、目が覚めた。

それほど深い眠りではないが、痛みが無い分、清々しい。

俺はベッドから起き上がり、脱ぎ捨てたブレザーを手に取り、隠しポケットに入れた鉄板を取り出した。

厚さは約8？あり、どんな弾丸でも貫通しない素材を使っているのだが……、不可視銃撃（インヴィジビレ）ってのは厄介だな……。

鉄板は、ほぼくの字に曲がっていて、不可視銃撃インヴィジビレの威力を物語っていた。

もし、この鉄板が無かったらと思うと、背筋が凍るほど恐ろしい……

・・。

俺はその鉄板を置いて、机の引き出しから、新しい鉄板を取り出し、ブレザーの隠しポケットに入れた。

しかしまあ、イ・ウーもついに動き出したか・・・。

だからといって、なんでパトラの野郎・・俺のところに来たんだ？

まあ考えたところで、あいつとはもう関わることはない・・・俺はそう願う。

俺はベランダに出て、頬杖を付きながら空を眺めていた。

すると、ピンポンとチャイムが鳴った。

俺は少し面倒くさいと思いながらも、玄関に向かった。

ドアノブに手を掛けた瞬間、ドアの向こう側に居る人物が分かった。

俺はドアを開けた。

そこには、古めかしいデザインのスーツで正装し、オールバックの髪型をした20歳ほどの身長180cm程ある大柄な男性が居た。

「プロフィール教授。貴方から私のところに来るとは驚きですね」

「久しぶりだね、アルジェント」

「堅苦しい挨拶は無しにしましょう。それより、早くお入りください」

い」

「そうさせてもらつよ」

俺は、教授を部屋の中に招いた。

教授は窓の外を眺めながら、立っていた。

「で、今日は何の御用ですか？シナリオはすべて終わっていませんよ」

「そうだね。まだ終結まではもう少し時間がかかるかな」
フィナーレ

「そうですよ。今の状況からも、もうひと押ししないと、完璧とは
パーフェクト
言えない・・・」

「きみがそういうのなら、もう少し時間を掛けるとしよう・・・」

「シナリオは、完璧であるからこそ真の意味を持つ・・・。それは
パーフェクト
そうと、

教授、今日パトラと三つ編みの女性の襲撃を受けましたよ・・・。あれもシナリオの内ですか？」

「君に対してのちょっとしたサプライズだよ。喜んでくれたかい？」

「ええ。ちょっとひやつとして楽しかったですよ。それに・・・、アルジエントとしての血も思い出しましたし・・・。」

「それはよかった。それじゃあ、私はイ・ウーに戻るよ」

「まだアレは健在なんですね」

「とっても居心地がいいよ。それじゃあ作戦を実行するときになったら知らせるよ」

教授はそう言つて、帰つて行つた。

俺は工房に入り、銃倉庫から伊・ウーの刻印の入ったカメオを装着した白銀のAMT ハードボーラーを手に取つた。

マガジンを取り出し、弾を確認する。

弾は満タンだ。

いつでも使用可能だ。

このAMT ハードボーラーは5インチと7インチとがある。

俺が持っているのは7インチのやつだ。

これを最後に使つたのは、理子をブラドの元から行き離れた時だ。

この弾丸をブラドに撃ち込んだ時の感覚は今でも覚えている。

あの時、なんでブラドを殺らなかったのかと今さらながらに後悔している。

あの時殺っておけば、理子は自由になれ、アリアの母親も罪に問われなくて済んでいたはずだ……。

すべては俺が悪いのかもしれない……。

「ハア……。」

あまり思い詰めても仕方ないよな……。

これも教授が描いたシナリオ通り……。

俺はそれに登場するキャストに過ぎない……。

主人公を立てるための脇役に過ぎない……。

まあ俺はそんなキャラ設定だからいいんだが……。

ってなんの話してんだ！？俺！！

さてと、気分を換えるかな……。

そして翌日、今日から一学期期末^{ファースト・エンド・テスト}検査期間が始まった。

俺はほとんど範囲が分からなかったが、殆ど簡単にできた。

こんなのは、日頃から勉強してれば分かるっちゅうねん……。

これがわからないという武藤は車の勉強より一般教科の勉強を頑張るべきであろう……。

「薫、昨日はなんで休んだんだ？」

武藤は不意に俺に問いかけてきた。

「ちょっと月奈と会ってた」

「月奈って、元パートナーの？」

「ああそうだよ」

「あいつ、今どこに居んだ？」

「ロシアの武偵高だ……」

正直、死んだと今言ったところで冗談にしか聞こえないだろう。

特に強襲科アサルトの連中が言ったことはな……。

「ところで、なんでここには寄らないんだ？月奈のやつ……」

俺は目を反らした。

「なんでか知らないのか？薫」

そう聞いてきたのは、キンジであった。

「知らねえよ。俺だって、キンジが来た日の朝連絡があって吃驚し

「ただからよ・・・」

「そうか・・・」

「でも、薫だけに連絡するってところを見ると、薫に想いを寄せているんだね」

「不知火よ・・・そういうのは隠すべきことではないのか・・・」

「まあ俺には関係ないが・・・」

「んなわけあるか・・・」

「薫、アンタ昨日千葉に行ってたでしょ？」

「アリアは歩み寄って来たかと思えば、そう問いかけてきた。」

「なんで知ってたんだよ？」

「さっき、強襲科アサルトの女子が噂してたわ」

「そうか。確かに昨日は千葉に行った。が、それは月奈に会いに行くために行っただけで、それ以外の目的はない」

「そう。それならいいけど」

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「別に深い意味はないわ」

アリアはそういうと、自分の席に戻った。

武藤や不知火、キンジも自分の席に戻った。

そして、次の教科のテストが始まった・・・。

その後、残り二つの試験を他の生徒と受けたが、俺は一日ですべて終わらせるために、放課後も残ってテストを受けた・・・。

テストが終わり、俺は真つすぐ寮に帰った・・・。

戦地への救護活動出発式まであと4日・・・

42弾 Let bygones be bygones

翌日、椿の登校を見送った後、クリスは琴音さんに呼ばれて、風見荘に向かった。

俺はどうせ学校に行ってもテストは済ませているためすることが無い。

その為、俺は部屋に籠っていた。

どうせ何もすることが無いので寝ているだけなのだが……。

まあ部屋の掃除と工房整理があるから死ぬほど暇にはならないだろう。

というわけで、工房の掃除を始めた。

掃除を始めて2時間後……。

大量の銃廃部品が大量に出てきた。

我ながらなんでこんなにため込んでいたんだろうと呆れた。

俺はそれを粒子分解して、その塵を燃えないゴミとして出すことにした。

袋に詰め、隅に置いてい置いた。

次に書斎の掃除をすることにした。

書斎はただ小説と知識本、歴史本があるだけだ。

俺はその本をすべて出し、棚のぞうきんがけをした。

すべての棚をぞうきんがけして、本を直そうと、歴史本を数冊持ちあげた瞬間、どこからか写真が滑り落ちてきた。

俺は知識本を直した後、その写真を手に取った。

「・・・懐かしいな」

写真には、とある家族が写っている。

しかし、この写真に写っている家族は一人を除いて、今は亡くなっている。

俺はその写真を近くにあった本に挟み、すべての本を片付けた。

そして、俺はシャワーを浴びた・・・。

俺は制服に身を包み、ソファで眠りに就くことにした…………。

キンジサイド・・・・・・・・・・

俺はテストを終えて、寮に向かって歩いていった。

ちなみに今日も薫は休みだ。

相変わらずマイペースというか身勝手というか・・・・・・・・。

まああいつの成績はこの学校では白雪と張り合っくらいに高い。

まともに勉強をしているところを見たこともないのに何であんなに頭がいいんだよ・・・・。

俺はそう思いつつ、いつものルートを通って寮に向かう。

するとその途中、移動販売車でリーフパイを買っているメイドが目
に留まった。

え〜と確か薫のところに居た・・・・・・・・ええっと・・・・・・・・あ！ク
リスだ。

確かそんな名前だった（様な気がする）。

すると、クリスはリーフパイ一枚を銜えながらこっちを振り向いた。

「はむ・・・・これは遠山様、学職ご苦労さまでございました。も
ぐもぐ・・・・」

食べるか喋るかどっちかにしてほしい・・・・。

「あ、ああ。それより買い出しか？」

「もぐもぐ……いいえ、先ほど終わり、帰るところです。もぐもぐ……」

「そうか……。ていうか、さっきから思っていたんだが……」

「もぐもぐ……。何でしょうか？もぐもぐ……」

「食べるか喋るか、どっちかにしてくれ……」

「承知しました。もぐもぐ……」

クリスは見ると見るうちにリーフパイを食べ終えた。

てか……。食べる優先かよ……。

まあこの際どうでもいいつか……。

「で、今から帰るのか？」

「はい」

「それじゃあ一緒に帰るか？」

「チツ……、そうですね。目的は同じ方向なのでそうすることにします」

こいつ……。舌打ちしたよな……。

可愛くねえ……。

てかなんで俺嫌われてんだ!?

理解不能だ……。

そして、俺とクリスは公園を横断するルート歩く。

「このようなルートもあったのですね……」

「知らなかったのか？」

「薫様に教えていただいたルートにここはありませんでした」

「そうか……」

今さらだが、こいつはなんで薫のことを様付けするんだ？

まあ余計な詮索はしない方が平和でいられるとは思うが……。

すると、前の茂みから椿が飛び出してきた。

「椿!?!」

「遠山さん!それにクリスまで……。どうしてここに!?!」

「いや……。ここが寮までの最短ルートで……」

「逃げてください!!」

「は？」

すると、茂みから話の様な鋭利なモノが椿めがけて飛んでいく。

椿はそれを持っていた日本刀で弾いた。

「随分と粘るじゃないか・・・椿君。でも、もうお目当ての者は見つけちゃったよ」

と茂みから男の声が聞えた。

ふと気付くと、クリスは脅えた表情で、俺の腕を握っていた。

その瞳^めはとても潤んでいて、まるで子犬の様だった・・・。

さっきまでとは正反対だな・・・。

ってまずい！！ヒスリかけてやがる！

お、落着け俺！

そんなに性的興奮状態になるような状況じゃないぞ！

よし・・・少しは落ち着いてきたな・・・。

「グレイ・・・」

クリスは脅えた声でそう呟いた。

すると、椿はこっちに後ずさりながら、刀を構えた。

「忠告する！！クリスはもう貴様らの配下には属していない！！」

椿はそう叫んだ。

いつもは穏やかな椿がマジギレしたかのように叫んだのだ。

「フツ・・・、そんなのは百も承知だよ。だけどね、クリスは主を裏切った。君と同じでね。でも、

君の場合はもう許してあげるよ。だけど・・・クリスだけは主が始末しろってうるさくてね」

「あの方がどう言ったか知らないけど、クリスの主は薫様よ！！」

椿がそういうと、茂みから一人の少年が現れた。

「やれやれ・・・G？にしろG？にしろ・・・、どうして慕われるんだろうね・・・。まあ、その辺はどうでもいいけど・・・。」

「おい！一体お前はなんなんだ！？」

俺はつい、少年に問いかけてしまった。

「あれ？部外者が居る。でも安心して、君に危害は加えないよ。だけど・・・邪魔するんなら容赦はしないけど」

少年は不気味な笑みを浮かべた。

「遠山さん、貴方は逃げた方がいい・・・」

「だけだよ!」

「これは私達の問題です。貴方は関わらない方がいい・・・」

「ふざけんなよ!目の前で仲間が戦うつて時に逃げれっか!」

あゝ恥ずかしい!!

だけど、のこのこ逃げるわけにはいかねえだろ・・・。

「なら・・・君も消しておくよ」

少年はそういうと、輪のような刃物を投げてきた。

椿はそれを刀で弾いた。

「死んでも責任取れませんからね・・・」

そんなに重いことかよ!!

俺は懷からベレッタを取り出し構えた。

「さうて、本気を・・・」

少年はそういうと、輪のような刃物を二つ取り出し構えた。

しかし、少年はすぐに構えを解いた。

「奴が・・・来てしまう・・・。仕方ない・・・ここは退かせてもらいますよ」

少年はそう言っ、煙玉のようなものを地面に投げつけて、姿を消した。

「なんだっただ・・・あいつは・・・」

「遠山さん、さっきのことは口外しないでください。例え薫様であつても・・・」

椿はそう言っ、刀を鞘に収めた。

「なんでだよ？」

椿は睨んでくるように俺の目を見てくる。

「これ以上、薫様に迷惑はかけられない・・・。お願いします・・・」

その眼は真剣で、いつもの椿と違った。

「・・・わかった。でも、途中までは心配だから部屋までは送って行く。それはいいだろ？」

「迷惑を掛けます・・・」

椿はそういつて会釈をして、歩き出した。

クリスマス脅えたままであつたが、あいつが居たところよりは落ち着い

ている。

しかし……あいつが言っていたく奴>つてのは誰のことなんだ？

あんな奴でも脅える様な人物がこの近くに居たのか……。

そんな気配は全くなかったのに……。

やっぱ、上には上が居るんだな……。

俺はしみじみ、そう思った。

そして、薫の部屋にたどり着いた。

椿は深呼吸をして、ドアを開けた。

「ただいま、帰りました」

椿はそう言って、中に入って行った。

「今戻りました」

クリスも声を振り絞って、中に入った。

俺も心配なため、中に入った。

そこには薫は居らず、椿とクリスは一安心しているみたいだ。

クリスは少し休むと言って、寝室に入って行った。

しかしまあ、整理された部屋だな・・・。

「遠山さん、何かお飲みになります?」

椿は俺にそう問いかけてきた。

「別にいらないうて・・・」

「そうですか?では、少しクリスの様子を見てくださいね」

椿はそう言って、寝室に入って行った。

俺はここに居ても仕方ないと思い、自分の部屋に行こうとした時、薫が帰って来た。

「あ、不法侵入だ」

「んなわけあるか!!っていつかさつき・・・」

くさつきのことは口外しないでください。例え薫様であつても・・・
>という椿の言葉を思い出し、言葉に詰まった。

「さつき・・・なんだよ?」

「いや・・・別にもうどうでもいいや。忘れてくれ」

「なんだよそれ・・・。まあいいや。それより、クリスと椿は帰

っているか？」

「あ、ああ・・・」

「それならいいや。さつき、何者かが椿に似た武偵高女子を襲撃してたつて噂を聞いたからよ・・・。

まさかとは思っていたんだが・・・思い違いだったみたいだな・・・。
まあ、無事ならそれでいいさ」

薫はそういうと、持っていた袋をテーブルに置いて、椅子に座った。

「なあ薫・・・」

「なんだ？」

「お前とあの二人はどういう関係だ？」

「・・・昔からの幼馴染だ。椿とは日本で出逢って、クリスマスとはイギリスで出逢った・・・。二人とも、それほど長いほどの付き合いではなかったが、まさかここで出逢うとは思わなかった・・・。そんな関係だ」

「そうか・・・。それならいいんだ・・・それなら・・・」

「お前がそんなことを聞くななんて珍しいな・・・。なにかあったのか？」

「べ、別に何も無い！そんなじゃあまたな！」

俺はその場を逃げるようにして、自分の部屋に戻った……。

薫サイド……………

どうせ、 그레이가椿達を襲ったんだろう…………。

そこに偶然ながらもキンジが居た…………というところかな…………。

まあ、キンジが言わなかったってことは口止めされてたんだろう。

無駄に詮索しない方がいいな。

俺は背伸びをして、ソファに寝転んだ…………。

43弾 Missing in action

椿とクリスが寝た夜中……。

俺は黒いスーツに身を包み、二人の寝顔を覗いた。

「悪い……」

俺はそう呟いて、二人の頭を撫でて、部屋を出た……。

キンジサイド……

今日はテストの最終日だ。

もちろん薫も居ない。

どうせ部屋で寝ているんだろうな……。

俺は適当に問題を解いて、テストを終わらせた。

放課後になり、俺は帰り支度をしていた。

あ、そういえばあの時のこと、椿に聞いてみるか……。

「おい椿」

「なんですか？遠山さん」

「あれからクリスは落着いたか？」

「ええ。なんとか落ち着いてきています」

「そうか……。薫にもまだバレてないんだな……」

「薫……。？誰ですか？それ……」

「は？何言ってるんだよ。薫だよ、薫」

「その方は一体誰ですか？私はそのような方は存じませんが……」

「おいおい……。何言ってるんだ？椿の奴……」

「キンジ、どうしたの？」

「しめた！アリアならボケたりしねえからな。」

「アリア、椿が薫のこと覚えてないって言うんだが……」

「誰よ？それ」

「おいおいお前まで何ボケてんだよ……」

「悪いんですが、クリスの様子が気になるので帰らせていただきます」

椿は一礼して、帰って行った。

「一体どうしたんだよ……」

「キンジ、その薰って誰なの？」

「お前……本気で言ってるのか？」

「なに？私が冗談を言っているように見えるの？」

まさか……みんなが薰のことを忘れているってことが……。

でもなんで……。

とにかく、白雪にも聞いてみるか……。

「アリア、俺はちょっと用事を思い出したから……」

「ちょっと！薰って誰なの！？」

「……なら着いて来い」

そして……俺とアリアは薰と関わりのあった生徒と会って、薰のことを聞いて回った……。

しかし、その誰ひとりとして薰のことを覚えては居なかった。

一体どうしてなんだ・・・・・・・・。

俺はアリアを引き連れながら、溜息を堪えた。

角を曲がろうとした時、堇葵が肩を竦めた様子で歩いて来ていた。

「堇葵？」

俺がそういうと、堇葵はゆっくり頭を上げた。

「ああ・・・遠山先輩・・・・・・・・。お疲れ様です・・・・・・・・」

「お前の方が疲れているようだが・・・」

「あはは・・・・。あ、つかぬことをお聞きしますが・・・・変なこともかもしれません・・・・・・・・もしも知らなかったら正直に言ってくればいいですから・・・・・・・・」

「なんだよ？聞いてみないと分からないだろ・・・・・・・・」

「そうですね・・・・・・・・。遠山先輩、神崎先輩・・・・・・・・。鷺宮薫って方をご存じじゃないですか？」

俺はその名前を聞いて、希望の光が見えたような気がした。

「水姫・・・アンタまでバカキンジと同じことを聞くのよ・・・・」

アリアは呆れたように言った。

すると、堇葵も希望の光が見えたのか、俺を見て目を見開いた。

「遠山先輩はご存じなんですね!？」

「あ、ああ・・・」

やっぱり全員が忘れているわけじゃないんだ・・・。

となると、数人は覚えている・・・か・・・。

今は董葵^{とうき}だけが俺の味方な気がしてきた・・・。

「とにかく、薫の痕跡を探るってみるぞ」

「はい!」

アリアも呆れたように帰って行った。

最初は、薫の居た寮に行ってみることにした。

てか、俺の部屋の隣なんだが・・・。

俺は董葵を連れて薫の住んでいた部屋に到着した。

カギは閉まっていた。

表札も気づかないうちに剥されていた。

管理人にカギを借りて、中に入った。

しかし・・・中はモノケの空のごとく何もないに等しかった。

俺は寢室を隈なく探したが、何もなかった。

「これだけ何もないと本当に居たのかって疑っちゃうな・・・」

「先輩！！そんなこと言わないでくださいよ・・・」

堇葵は眼を潤々させながら反論してきた。

「わ、悪かった！だから泣くな！」

ああもう！！なんで女つてのは涙もろいんだ！？

「まったく・・・、お前には失望したぞ・・・」

俺はその聞き覚えのある声に振り向いた。

振り向いた先には、ジャンヌが居た。

「ジャンヌ！お前どうして・・・」

「薫が姿を消したらしいな・・・。話はすべて理子から聞いた」

「理子が・・・？」

「どうやら、私達の記憶は書き換えられていないみたいだ」

「記憶を書き換えるってどういうことだ？」

「薫は、どんな相手でも記憶を書き換えることができる能力を持っている」

「そんなことできるのか？」

「奴は道化師クルーンだからな……。あいつは何でもできるだろう」

「そんなのありえないだろ……」

「一つ教えてやる。薫がイ・ウーで持っていた二つ名は＜アサルト・クルーン＞……。直訳すると、＜強襲の道化師＞だ」

「銀狼じゃねえのかよ!？」

「それは後からついた名だ。しかもそれは存在していない泥棒らしい」

「どう言うことだ？」

「つまり、世界で有名な銀狼アルジャン・ルーは、架空の人間だった……。ということだ」

「だがよ、世界中で姿すら見られてんだぞ！それを架空というのは無理がある!」

「確かにそうだな。だが、あいつは人の記憶を書き換えることができるからな。世界中を騙すことなど、一度マスコミの前に出てしまえば容易いことだ」

「でも……」

「この私ですら、倒された時の記憶を書き換えられた……。本当は、死にかけていたのに……」

「ジャンヌ……」

「だから、薫だけは敵にまわしたくないのだ」

ジャンヌはそういうと、リビングにある本棚から一冊の本を取り出した。

そして、その本を俺に投げてきた。

「これは？」

「薫がつけていた日記だ。外側は小説に見立てているが、薫はこんな本を読まない」

ジャンヌはそういった。

俺はその本を開いてみる。

確かに日記の様だ。

しかしもう最後のページまで使っていた。

最後のページの題名は……<善は真の悪である>

それはその題名に嫌な予感をした。

「今日は最後の日だ。俺はもうこの学校に用はない。だから、俺と関わったすべての奴らの記憶を消す。これを読んだ者に言っておく、さようなら」

と書いてあった。

「どういうことだ……?」

「私にもわからん。だが、薫はもうここには戻らないだろう」

堇葵はジャンヌが言った言葉に意識喪失した。

そりゃそうだろう……。

信じていた戦徒^{アミカ}に裏切られたに等しいんだから……

「理子は今何してんだ?」

「……薫の痕跡を辿っている。だが、薫は完璧主義なうえに痕跡を残さないように行動している。恐らく、たどり着けないだろう」

「そうか……」

「堇葵は私が連れて帰る……」

「頼む……」

俺は堇葵をジャンヌに任せて、独り部屋に残った。

ジャンヌと堇葵は薫を通じて知り合っている。

その薫が居ないんだ・・・。

二人にとっては寂しいことだろう・・・。

薫・・・どこに行きやがったんだ・・・。

俺は薫に怒りを覚えた・・・。

44弾 Lost memory

キンジサイド……

アレから一週間が過ぎた……。

だが、薫につながるような情報は得られなかった。

よくよく考えれば、来週からは夏休みになる。

早いような遅いような……そんな感じだ。

俺はそう思いつつ、学校に登校するのであった……。

堇葵サイド……

私は教室で授業を受けていた。

でも……薫先輩のことが頭から離れない……。

どうして居なくなっただろう……。

私はそう考えていて、全く頭に入らなかった。

明日休みだから気分転換に行こう……。

そして、一般授業が終わり、私は強襲科の授業に向かった。

いつものように実習を受けて、寮に帰った。

寮に帰りついた私は、ソファに倒れこんだ。

「ハア．．．、薫先輩．．．どこ行っただろう．．．」

私はポケットから携帯を取り出し、ダメ元で電話してみる。

「おかけになった電話は現在使われておりません。番号をお確かめの上、お掛け直してください」

やっぱり出ない．．．．．というが使われてない．．．．．。

どうして．．．．

私は鳴き声が聞えないよう、クッションで声を殺し、夜まで泣いた．．．．。

翌日．．．．

今日は休みだ・・・。

私は気分転換に秋葉原に出向いた。

いつまでも落ち込んでるわけにもいかないし・・・。

さてと・・・、最初はどこに行こうかな・・・。

とにかく、大手電気店に行こう。

私はビックカメラに足を運んだ。

適当にP CやT Vを見て、C Dを見て回った。

そのあと、携帯を見に行った。

私はa u派なので、適当に携帯を見してみる。

すると、誰かとぶつかった。

「すみません！」

「こつちこそ悪い・・・」

そのぶつかった人と目があつた・・・。

その人は私がもの凄く尊敬している人・・・。

「薫・・・先輩・・・」

「堇葵！なんでお前が……」

私は反射的に薫先輩の腕を掴んだ。

「堇葵……」

私はくもつ離さないぐつてくらいに力強く握っていた。

「ハア……、とにかく、ここでは詳しい話ができん……」

私は薫先輩に連れられて、店を出た。

しばらくして、人気のない公園に着いた。

「ここなら話せるか……」

「薫先輩！！どうして私たちの前から姿を消したんですか！？」

私は単刀直入に薫先輩に問いかけた。

「……アリアのためだ」

薫先輩は一言そう答えた。

「神崎先輩の……ため？」

「そうだ。アリアの母親はな、冤罪で服役中なんだよ。それで、その原因の組織に俺は今侵入してんだ。だからお前らの前から姿と記憶を消したんだ」

「でも・・・なんで私と遠山先輩、ジャンヌ先輩と峰先輩の記憶は消さなかったんですか？」

私が薫先輩にそう問いかけると、薫先輩は俯いた。

「もう・・・消すさ・・・」

薫先輩がそういうと、目が段々霞んできて、そのままその場に倒れ、ブラックアウトした・・・。

目を覚ますと、白いワンピース姿で読書をしている知らない女性の膝を枕として、ベンチで寝ていた・・・。

「月奈・・・先輩？」

私は頭にふと思いついた名前と呼んでみた。

すると、その女性はゆっくりと私の目を見てきた。

「大丈夫？水姫ちゃん」

「は、はい。でもどうして・・・」

「さっきここを通りかかったら、貴女が倒れていたから・・・」

倒れてた？

なんで私こんなところで・・・。

私はゆっくり体を起こした。

「でも発見が早くてよかったわ・・・」

「どうしてですか？」

「どうしてって・・・女の子がこんなところで倒れてたら何されるか・・・。まあとにかく、何もな

くてよかったわ。それより、これからどこに行くの？」

「これといって予定はないんですが・・・」

「なら、一緒に寮に帰りましょう」

「わかりました」

こうして、私が月奈先輩と共に寮に帰った。

ええっと・・・月奈先輩との関係は・・・戦徒アミカを組んでいる・・・。

でも・・・なんだかしっくりこない・・・。

なんだか、他の人と組んでいたような気がするけど・・・思い出

せない・・・。

まあ気にしなくてもいいっか・・・。

私はそう思いつつ、一日を終えた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7993w/>

緋弾のARIA～強襲の道化師～

2011年11月29日23時48分発行